広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第207集

沼田川河川総合開発事業(福富ダム)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

福原城跡

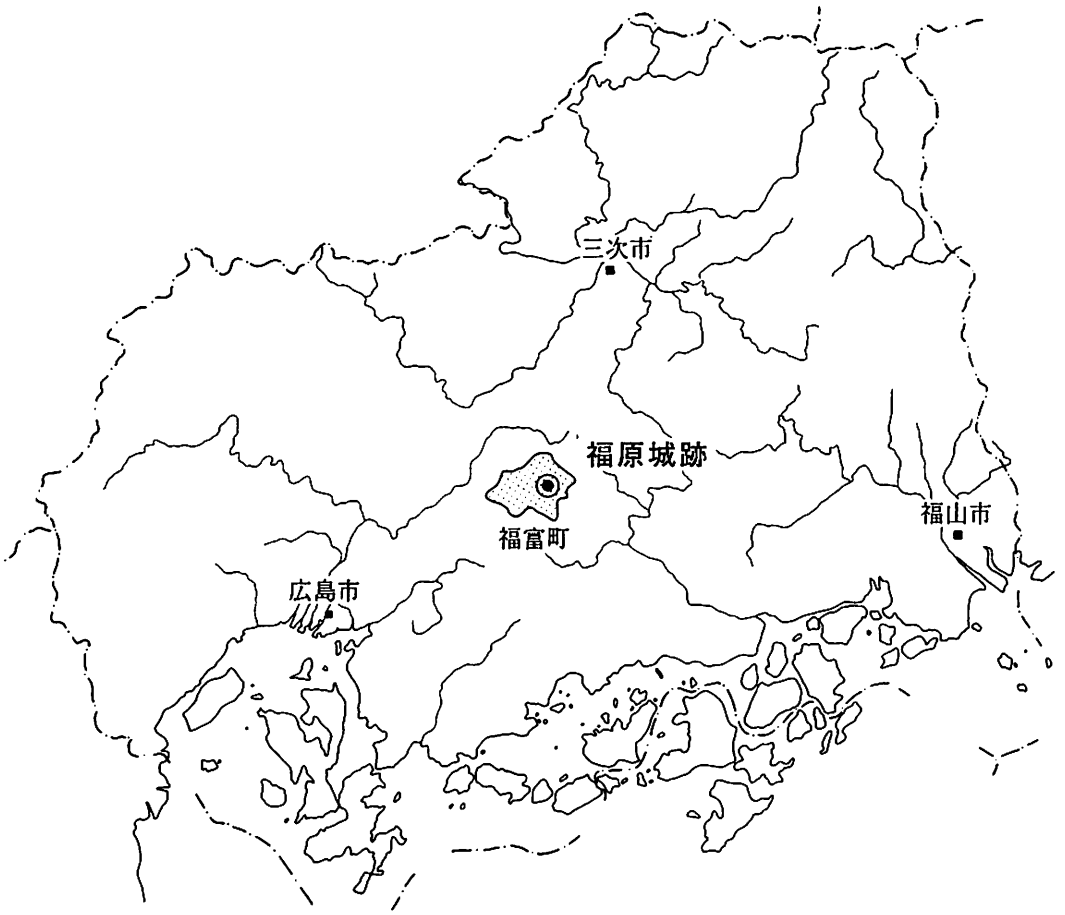
ふくはらじょうあと

2003

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（１）

福原城跡



２００３

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

遺跡全景（上空南から）

巻頭図版 2

1　遺跡遠景（上空南から）

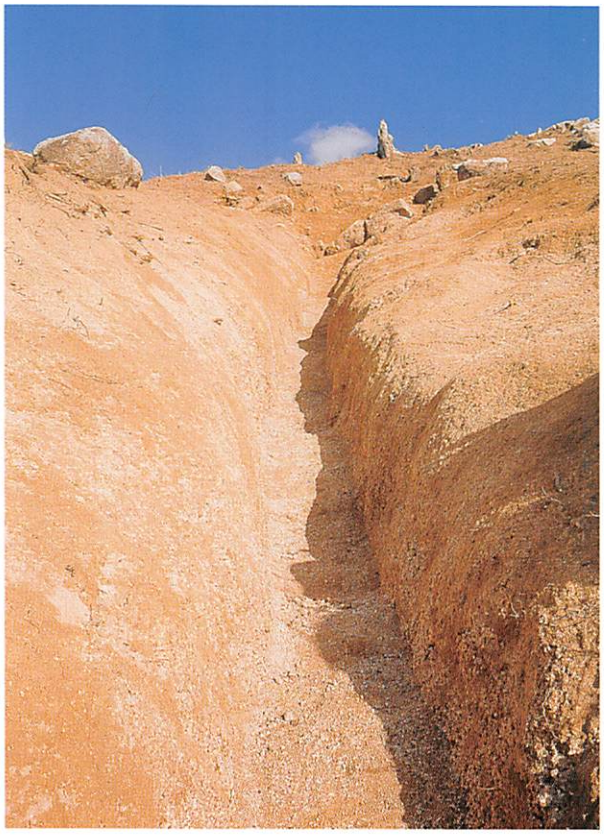
2　遺跡調査前全景（上空南から）

1　平坦面１西石積（北西から）

2　平坦面１出入口（北から）

巻頭図版 4

1　石組遺構（南から）



2　竪堀（西から）

3　平坦面 6 遺物出土状況（北東から）

4　堀切 2 遺物出土状況（北西から）

例　言

1　本書は，平成13（2001）年度に調査を実施した沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る福原城跡（賀茂郡福富町久芳所在）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，広島県東広島地域事務所との委託契約により，財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3　発掘調査は橋坂久己（現・筒賀村立筒賀中学校），糸賀省三（現・吉田町立丹比西小学校），梅本健治，片岡由起子（現・下蒲刈町立下蒲刈中学校），鈴木康之，下津間康夫，葉杖哲也，濱岡才二，三原稔宏が担当した。

4　出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は糸賀，鈴木，葉杖，濱岡，三原が行った。

5　本書の執筆は，糸賀（Ⅰ・Ⅱ），鈴木（Ⅴ－(1)・(2)），葉杖（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ－(3)・Ⅵ），三原（付）が行い，葉杖が編集した。

6　本書で使用した遺構の表示記号は次の通りである。

　　ＳＫ：土坑

　　ＳＸ：不明の遺構

7　図版と挿図の遺物番号は同一である。

8　本書に使用した方位は，全て平面直角座標系第Ⅲ座標系北である。

9　第１図は国土交通省国土地理院発行の１：25,000の地形図（乃美）を使用した。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 6
Ⅳ　遺　　構 …… 8
Ⅴ　遺　　物 …… 29
Ⅵ　ま　と　め　1　検出遺構 …… 37
　　2　出土遺物 …… 39
　　3　城の年代観 …… 39
　　4　福原城跡の復元 …… 39
付　北東区の埋甕遺構について …… 44

巻頭図版目次

巻頭図版１　遺跡全景（上空南から）
巻頭図版２－１　遺跡遠景（上空南から）
　　２　遺跡調査前全景（上空南から）
巻頭図版３－１　平坦面１西石積（北西から）
　　２　平坦面１出入口（北から）
巻頭図版４－１　石組遺構（南から）
　　２　竪堀（西から）
　　３　平坦面６遺物出土状況(北東から)
　　４　堀切２遺物出土状況（北西から）

挿 図 目 次

第１図　福原城跡と周辺の遺跡　（１：25,000）…… 3
第２図　福原城跡周辺地形図　（１：5,000）…… 6
第３図　平坦面１・５遺構配置図　（１：200）…… 折り込み
第４図　平坦面１西石積実測図　（１：100）…… 折り込み
第５図　平坦面１北石積実測図　（１：100）…… 折り込み
第６図　平坦面１東石積，南石積実測図（１：100）…… 折り込み
第７図　石組遺構実測図　（１：30）…… 10
第８図　石列遺構実測図　（１：30）…… 折り込み
第９図　ＳＫ１実測図　（１：30）…… 11
第10図　土塁３実測図　（１：150）…… 12
第11図　竪堀実測図　（１：150）…… 13
第12図　平坦面１出入口実測図　（１：150）…… 14
第13図　平坦面２遺構配置図　（１：200）…… 16
第14図　堀切１実測図　（１：150）…… 18
第15図　ＳＫ４実測図　（１：30）…… 19
第16図　ＳＫ５実測図　（１：30）…… 20
第17図　基壇実測図　（１：40）…… 20
第18図　平坦面３・６遺構配置図　（１：200）…… 折り込み
第19図　平坦面３東石積・西石積実測図（１：100）…… 折り込み
第20図　ＳＫ６実測図　（１：30）…… 22
第21図　堀切２・土塁１・土塁２実測図（１：150）…… 折り込み

第22図　平坦面６遺物出土状況実測図　（１：10）…… 23
第23図　平坦面４遺構配置図　（１：200）…… 24
第24図　神社跡実測図　（１：50）…… 25
第25図　ＳＢ１実測図　（１：60）…… 26
第26図　北東区遺構配置図　（１：200）…… 27
第27図　ＳＸ１実測図　（１：60）…… 28
第28図　出土土器実測図１　（１：３）…… 30
第29図　出土土器実測図２　（１：３）…… 31
第30図　出土鉄製品実測図　（１：２）…… 34
第31図　出土石製品実測図　（１：３）…… 35
第32図　福原城跡縄張復元図　（１：1,000）…… 41
第33図　福原城跡と周辺の城跡　（１：40,000）…… 42
第34図　埋甕遺構実測図　（１：30）…… 44
第35図　出土土器（埋甕）実測図　（１：８）…… 45
第36図　福原城跡全体図　（１：500）…… 折り込み

表　目　次

表１　出土土器一覧表 …… 33
表２　出土鉄製品一覧表 …… 34
表３　出土石製品一覧表 …… 36
表４　東広島市内出土の近世以降の埋甕一覧 …… 46

図 版 目 次

図版１－１　福原城跡全景（南東から）
　　２　福原城跡全景（上空西から）
　　３　福原城跡全景（西から）
図版２－１　平坦面１・４・５（上空南西から）
　　２　平坦面１土留石（東から）
　　３　平坦面１北石積（北から）
図版３－１　平坦面１西石積（西から）
　　２　平坦面１西石積（南から）
　　３　平坦面１西石積（北西から）
図版４－１　平坦面１東石積（東から）
　　２　石組遺構（東から）
　　３　石列遺構検出状況（西から）
図版５－１　石列遺構検出状況（北から）
　　２　ＳＫ１（東から）
　　３　土墨３（西から）
図版６－１　竪堀（西から）
　　２　平坦面１出入口（北から）
　　３　平坦面５（東から）
図版７－１　平坦面２（上空南から）
　　２　堀切１（西から）
　　３　堀切１（東から）
図版８－１　堀切１堀切・竪堀結合部（西から）
　　２　ＳＫ４（西から）
　　３　ＳＫ４遺物出土状況（西から）
図版９－１　ＳＫ５（西から）
　　２　基壇（西から）
　　３　平坦面３・６（上空西から）
図版10－１　平坦面３西石積（西から）
　　２　平坦面３西石積（南から）
　　３　平坦面３東石積（北東から）
図版11－１　ＳＫ６遺物出土状況（西から）
　　２　堀切２（東から）
　　３　土墨１・２，堀切２（西から）
図版12－１　土墨２，堀切２（西から）
　　２　堀切２屈曲部（南から）
　　３　平坦面４　神社跡（南から）
図版13－１　平坦面６（北東から）
　　２　平坦面６遺物出土状況（南東から）
　　３　平坦面６遺物出土状況（東から）
図版14－１　ＳＢ１（北から）
　　２　ＳＸ１（南から）
　　３　埋甕遺構（南から）
図版15　出土土器１
図版16　出土土器２
図版17　出土鉄製品・石製品

Ⅰ　はじめに

賀茂郡福富町に源を発し，三原湾に注ぐ沼田川は，流路延長約49km，流域面積約540㎢の尾三地域を代表する河川である。沼田川の水は現在，かんがい用水，水道用水，発電等に利用され，地域の生活を支える重要な水資源である。しかし，その集水域が年間を通して降雨量が少ない瀬戸内地域であるため，しばしば水不足が発生してきた。加えて，近年流域および周辺地域での宅地化の進展により，水需要の増大が予想され，水源の確保が緊急性の高い課題となってきた。

その一方，降雨の集中する梅雨・台風期には沼田川流域一帯は洪水被害にたびたび見舞われてきた。さらに，流域の発展に伴い，洪水被害は増加の傾向にあり，抜本的な治水計画が強く望まれてきた。

こうした諸問題を解決することを目的として，広島県では沼田川河川総合開発事業を策定し，その一環として昭和50年，福富ダムの建設を計画した。事業の実施に先立ち，広島県東広島土木建築事務所（現広島県東広島地域事務所，以下「東広島土木」という。）は，平成５（1993）年11月４日付けで，福富ダム建設計画地内の文化財の有無及び取扱いについて，広島県教育委員会（以下「県教委」という。）と協議した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い，平成12（2000）年９月20日付けで東広島土木に対して，計画地内に福原城跡が存在する旨を回答した。この遺跡の取り扱いについて，県教委と東広島土木は協議を重ねたが，計画地変更等による現状保存が困難であるという結論に達し，県教委は同年11月29日付けで，東広島土木あてに事前に発掘調査が必要である旨を通知した。

福原城跡の発掘調査については，平成13（2001）年３月に東広島土木から財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）あてに調査依頼があった。これを受けてセンターは広島県東広島地域事務所と同年６月１日付けで委託契約を結び，７月16日から12月21日までの約５ヶ月間発掘調査を実施した。なお，11月10日には福富町教育委員会と共催で遺跡見学会を開催し，約150名の参加があった。

本報告書は，以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして，少しでも寄与できれば幸いである。

なお，発掘調査にあたっては，広島県東広島地域事務所，同福富ダム建設事業所，福富町教育委員会及び地元の方々に多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

Ⅱ　位置と環境

福原城跡は，賀茂郡福富町大字久芳字金口，字大畑に所在する。

福富町は，広島県のほぼ中央部にあたり，北部は高田郡向原町，東部は豊栄町，南東部は河内町，南西部は東広島市に接している。周囲には北に標高922mの鷹ノ巣山，東に標高733mの西原山，南に標高731mの野路山など，標高700mを超える山々が連なる。本町域は，これらの山々に囲まれた盆地状の地形をなしている。盆地内は，竜王山山地を沼田川が激しく侵食した結果生じた島状の丘陵が数多く分布する久芳丘陵地に地形分類されている。

地質的には，花崗岩質の土壌で，地表下10m以上まで風化が進み，花崗岩の風化土である真砂土中に風化されずに残った花崗岩が点在するという状況である。本城跡にある石積や石組，石列などの石材を用いた遺構は，これらの花崗岩を利用して築かれている。ただし，丘陵先端部にある本城跡では真砂土が流出し，風化礫を含む赤褐色粘質土が露出している部分もある。

河川は，町域内の上竹仁を源とする沼田川が上流で東丁田川，谷河内川などの細流を集めて盆地のほぼ中央を貫流し，河内町，本郷町を下り，三原市で瀬戸内海に注いでいる。

福原城跡は，福富町役場などのある町並の中心から直線距離で南西に約1.2kmの位置にあり，北西に鷹ノ巣山を望み，沼田川と谷河内川の合流地点を南に見おろす丘陵上に立地している。

以下，中世を中心に福富町内における主要な遺跡について概観してみたい。

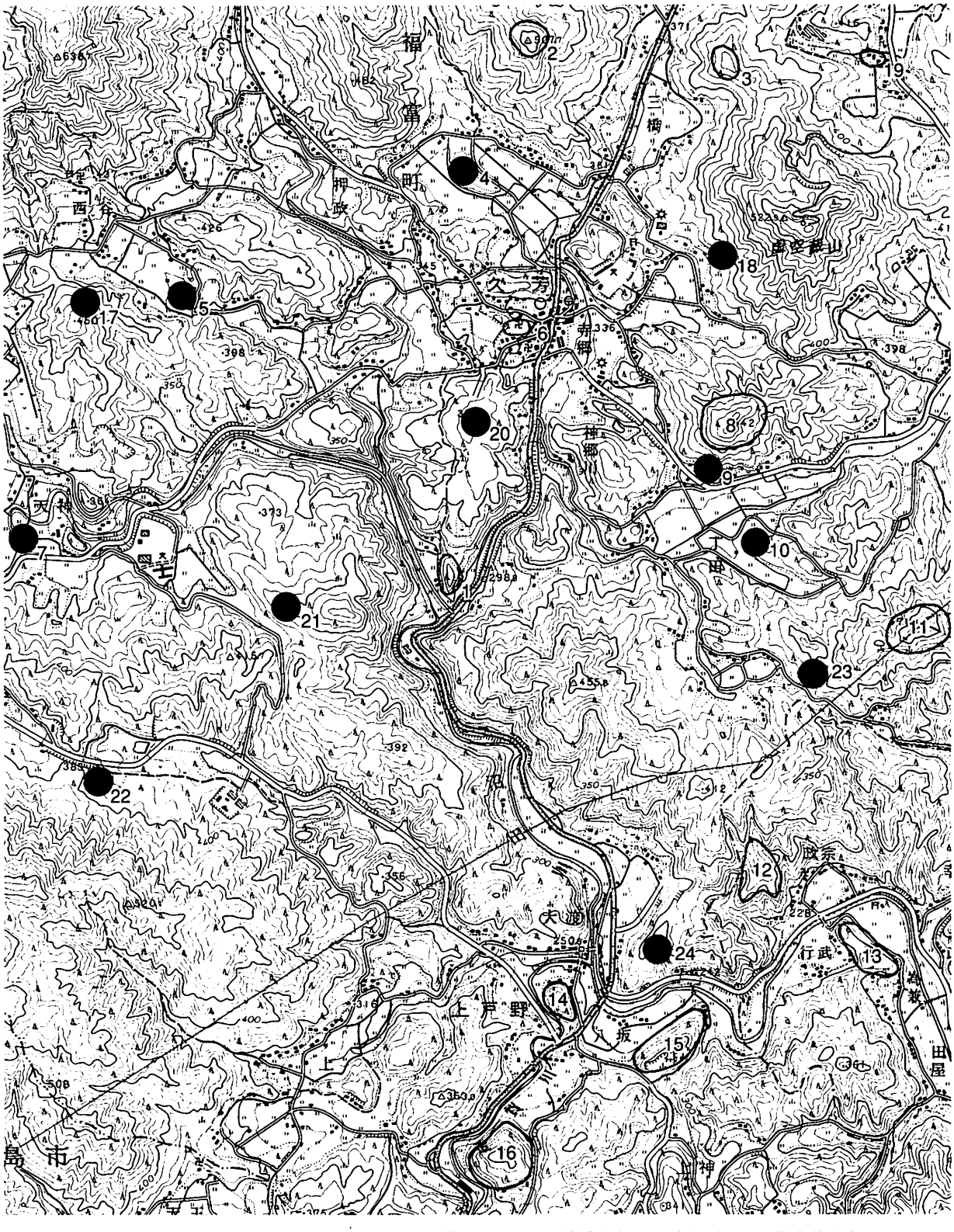
古墳時代以前をみると，縄文時代では久芳の金口古墳群の調査の際縄文時代の石器が出土している[1]。弥生時代では久芳の正覚寺裏遺跡，上竹仁の平が市遺跡，下竹仁の竹仁遺跡など5ヶ所が知られている[2]が，いずれも遺物の出土のみで遺構は確認されていない。

古墳時代では，集落跡として久芳の松崎遺跡[3]などがあり，古墳は現時点で約80基が確認されている。6世紀前半の古墳としては，久芳の金口古墳群[4]などがある。金口古墳群は本城跡と同一丘陵上にある7基からなる古墳群で，埋葬施設として箱式石棺，石蓋土坑，土坑がある。6世紀後半以降の古墳は，久芳の丁田南第3号古墳[5]，上戸野の貝峠古墳[6]，下竹仁の福富中学校裏古墳[7]などがあり，埋葬施設はいずれも横穴式石室である。このうち丁田南第3号古墳の周辺からは環状瓶，貝峠古墳からは鳥形瓶といった県央部に出土例の多い特色ある須恵器が出土している[8]。

古代には，「和名類聚抄」安芸国豊田郡（沙田郡）六郷の中に「訓芳」の地名があり，久芳一帯に郷が置かれていたことがうかがえる。後に訓芳郷，久芳保・久芳郷と称された。また，「登能」の地名もあり，これは戸野一帯に置かれていた郷をさしていると考えられる。

中世の町内の遺跡としては，城跡や古墓があり，城跡は17箇所が確認されている[9][10]。

上竹仁には長屋城跡と芋葉城跡が，下竹仁には宍戸城跡と阿良井城跡がある。長屋城跡は複数の平坦面及び堀切，土塁，竪堀群からなる。城主は坂氏と伝えられる。芋葉城跡は丘陵頂部に立地し，複数の平坦面と堀切からなる。宍戸城跡は3面の平坦面からなる。城主は宍戸氏と伝えら



1　福原城跡　2　戌丸山城跡　3　松田城跡　4　柿本城跡　5　見張城跡　6　堀城跡　7　阿良井城跡
8　狐が城跡　9　西丁田城跡　10　東丁田城跡　11　杉風呂城跡　12　常友城跡　13　下鷹城跡
14　堀城跡　15　行武城跡　16　高塚城跡　17　西ノ谷古墓　18　神郷古墓　19　松崎遺跡　20　金口古墳群
21　福富中学校裏古墳　22　竹仁遺跡　23　丁田南古墳群　24　貝峠古墳

第1図　福原城跡と周辺の遺跡（1：25,000）

れる。阿良井城跡は２面の平坦面からなる。城主は児玉氏と伝えられる。

久芳には福原城跡の他，戌丸山城跡，松田城跡，堀城跡，柿本城跡，見張城跡，狐が城跡，東丁田城跡，西丁田城跡，杉風呂城跡がある。戌丸山城跡と堀城跡は丘陵頂部に立地する単郭の城跡である。堀城跡の城主は久芳氏と伝えられる。松田城跡は複数の小規模な平坦面からなり，南辺には石垣と二重の堀切がある。狐が城跡は複数の平坦面と横堀，竪堀，堀切がある。西丁田城は狐が城跡のある山塊から南に伸びる丘陵先端部に立地し，狐が城の支城あるいは館跡と考えられている城である。ただ，『芸藩通志』久芳村の地図には西丁田城跡が存在するあたりに，「安穏寺跡」という記述があり，今後の検討が必要であろう。東丁田城跡は丘陵先端部に立地する単郭の城跡である。杉風呂城跡は丘陵頂部に立地し，２面の平坦面と堀切，畝状竪堀群がある。城主は渡辺氏と伝えられる。

河内町戸野を含む旧戸野村内には，福富町内に堀城跡，高塚城跡，行武城跡，河内町内に常友城跡，下鷹城跡，笠城跡がある。堀城跡は北流する造賀川右岸の独立丘陵上に立地し，直線的に複数の平坦面がある。城主は小坂氏，または堀氏と伝えられる。高塚城跡は造賀川の右岸の丘陵頂部にあり，同心円状に平坦面が存在する。城主は鷹司氏と伝えられる。行武城跡は沼田川右岸の丘陵先端部に立地し，３段の平坦面がある。城主は行武氏と伝えられる。常友城跡は沼田川左岸の丘陵頂部に立地する。城主は佐倉氏と伝えられる。下鷹城跡は沼田川右岸の丘陵先端部に立地し，４面の平坦面からなる。城主は大野氏と伝えられる。笠城跡は沼田川左岸の丘陵先端部に立地し，４面の平坦面からなる。

中世の古墓には久芳の神郷古墓や西ノ谷古墓がある。神郷古墓では2.3×1.7mの石積基壇や五輪塔が，西ノ谷古墓では五輪塔や宝篋印塔が確認されている。西ノ谷古墓は地元の人が「殿さん墓」と呼んでいるもので，石塔が２基あり，久芳永清，久芳広清の墓だと伝えられている。

最後に福原城跡周辺地域の中世の様相について簡単に触れておく。

中世初期には，源平合戦や承久の乱の後，東国の御家人が安芸国の地頭に任ぜられ，暫時西遷・土着して，領域支配を強めていった。児玉氏は承久の乱の功により竹仁村の地頭に任ぜられ，周辺では高屋保（東広島市高屋町）の平賀氏等が地頭に任ぜられている。

室町時代の安芸国は，政治的に安定していたとは言いがたい状況であった。全国的に大きく揺れ動いた南北朝期・戦国期のいずれの時期も安芸国一帯は全国的に見ても戦闘が激しかった地域で，国全体を統率するほどの勢力を持った領主が現れなかったこともあり，中小領主が乱立し，全国的な動向や周辺の大領主の影響を受けながら，絶えず争いが繰り広げられていた。

久芳郷は室町時代初期には，室町将軍家により，本圀寺や園城寺の造営領として寄進され，小早川氏が地頭として任ぜられていた。しかし，室町時代中頃に大内氏が進入の圧力を強め，ついにはこれを事実上押領した。そして，大内氏の代官として江間氏が周防から久芳に移り，江間氏は後に久芳氏を称した。小早川氏も15世紀後半に久芳などの諸城の攻撃を行い，勢力の回復を図ったが，うまく行かなかったようである。

竹仁郷は鎌倉時代以来，児玉氏の重代相伝の地であったが，14世紀中頃には内藤氏の支配下に入る。15世紀頃から毛利氏が勢力を広げ始め，15世紀前半には上竹仁村が毛利氏の支配下となり，15世紀末頃には下竹仁を支配していた平賀氏と毛利氏の間で合戦が行われている。

戸野郷は当初東寺の国衙領であったが，南北朝期には，南朝方の拠点であった戸野城攻撃に平賀氏・小早川氏が加わるなど情勢は安定していなかった。そして，その間に新荘小早川氏庶家である小田氏の押領が進んだ。15世紀はじめの文書には，戸野郷半分地頭及び国衙公文職が本荘小早川氏の所領とされるなど，小早川氏の勢力下にあったと考えられる。一方，その頃から西条を勢力下に治めた大内氏の北進に伴い，15世紀中頃までには平賀氏の支配下に入る。小早川氏は室町幕府に働きかけたり，自ら「戸野・河戸・河内・造果」の城を攻めるなど，勢力の回復に努めたが，その後は両者の文書に戸野郷が現れ，両勢力の接触点であったと考えられるが，大内氏と結びついた平賀氏の勢力は根強く，概ね平賀氏の支配下にあったようである。

このように，16世紀に入る頃までには福富町周辺地域一帯は概ね大内氏の支配下に入り一時的な安定期を迎える。ただ，この状態も長続きせず，16世紀前半の数次にわたる尼子氏の南進により，周辺の国人小領主も大内・尼子方に分かれて争いを繰り広げた。

16世紀中頃になると，周辺の国人衆は尼子氏を退け，勢力を拡張しつつあった毛利氏の指揮下に入るものが相次ぎ，小康状態となる。その後大内氏を倒した陶氏と毛利氏の対立の中でこの地域も一時的に混乱するが，毛利氏が陶氏を倒し，毛利両川体制を確立する過程で，安芸国の国人衆は毛利氏につき，安定期を迎える。

註

（1）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『金口古墳群』 1997年
（2）広島県教育委員会『広島県遺跡地図』Ⅱ 1994年
（3）註（2）と同じ
（4）註（1）と同じ
（5）福富町教育委員会『丁田南第3号古墳』 1994年
（6）河瀬正利「広島県出土の鳥形須恵器」『芸備古墳文化論考』芸備友の会 1985年
（7）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『福富中学校裏古墳』 2001年
（8）註（6）と同じ
（9）広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第2集 1994年
（10）福富町教育委員会「福富町教委文化シリーズ№4」『福富の山城』 1984年

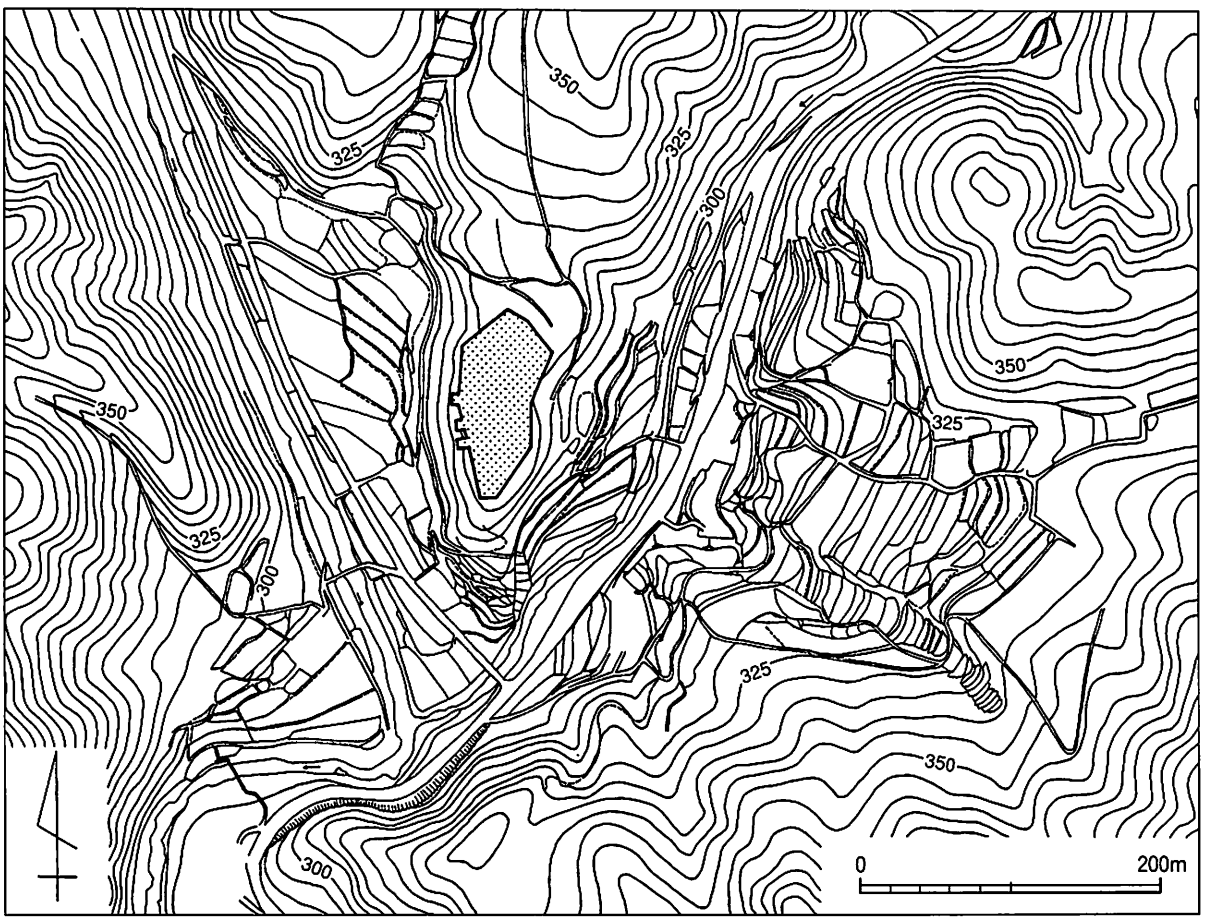
【引用・参考文献】

広島県『土地分類基本調査 乃美』 1979年
後藤陽一監修『広島県の地名 日本歴史地名大系35』平凡社 1982年
岸田裕之編『広島県の歴史』山川出版社 1999年
岸田裕之・秋山伸隆編『広島県史 中世』広島県 1984年
飯田米秋『賀茂郡史―中世武士編―』㈱東広島ジャーナル 1984年
西本省三・葛原克人編『日本城郭体系』13 広島・岡山 新人物往来社 1980年

Ⅲ　調査の概要

本城跡は，久芳・下竹仁・上戸野の３大字の境界付近にある。周囲は吉備高原面が沼田川の本支流に侵食されて形成された丘陵が複雑に入り組んでいる。本城跡はそうしたもののうち先端部が高まった丘陵を利用して築かれている。本城跡が造られている丘陵の周囲は，東側には丘陵に接して久芳から谷河内川が南西方向に流れ，西側には狭小な谷底平地を隔てて下竹仁から沼田川が南東方向に流れる。両者は城のある丘陵のすぐ南側で合流し，さらに南流する。丘陵の周辺にある谷底平地は，現在は主に水田として利用されており，水田面から城の最高所までの比高は約30mである。城跡の現状は竹やぶ混じりの山林で，調査で北東区（第36図）とした部分は近年まで耕作地（畑）として利用されていた。

調査対象は尾根の先端部の最高所から南に約30m，北に約100m，東西にそれぞれ最大約25mの範囲で，福原城跡のほぼ全域をカバーする。なお，調査範囲の南側の斜面下方には近年まで水田として利用されていた小平坦面があり，北側にも尾根が連続していたため，城域がさらに広がっている可能性も考えられたが，広島県教育委員会による試掘調査の結果，遺構・遺物が確認できなかったため調査範囲外とした。



第２図　福原城跡周辺地形図（１：5,000）　アミ目は調査区

各遺構の名称（第36図）は一番高所にある平坦面を平坦面１とし，北に向かって平坦面１に近い順に平坦面２，平坦面３，南に向かって平坦面４，小規模平坦面を平坦面５・６とした。土塁や堀切及び各平坦面内にある遺構についても同様に番号を割り振った。なお，調査区北側に広がる部分は城との直接的な関連性が明確でなかったため，北東区とした。

調査に際し，調査区の南東隅を基準として南北方向に１～13の，東西方向にＡ～Ｆの基準線を10ｍおきに設けて区分けし，各区の北西隅の交点を区の名称とした。遺構に伴わない遺物の取り上げは各郭及び各区の区分けを併用して行った。

調査はまず試掘溝の掘り下げから行った。試掘溝は城跡全体の長軸となる南北方向のものを平坦面１～４及び北東区に各１条，これと直行する東西方向のものを平坦面１に３条，平坦面２・３に各１条，傾斜と平行する方向のものを平坦面５・６に各１条設定し掘り下げた。

この結果，各平坦面の中央では現表土より５～10㎝で基盤面に達し，城の廃絶以後の風化・再堆積は少ないことが確認できた。各平坦面の縁辺部にある造成部分では最大１ｍ近い造成土が，北東区では最大70㎝の後世の耕作土が確認できた。なお，試掘溝の土層観察から，遺構面は１面であると判断して遺構の掘り下げを行うこととした。

掘り下げは各平坦面及び堀切については，遺構面直上まで重機を利用して堆積土を除去し，さらに人力により遺構精査を行った後，検出した各遺構は人力で掘り下げを行った。斜面部は検出から掘り下げまで全て人力で行った。なお，調査前・調査後の地形図及び平坦面１の石積（東・西・南・北）・平坦面３の西側石積の実測図作成については写真測量を行った。

調査の結果，遺構として，平坦面６面，堀切２条，竪堀１条，土塁３箇所，土坑６基，石組遺構１基，石列遺構１基，基壇１基，石積５面，掘立柱建物跡１軒，竪穴住居跡状遺構１基，埋甕遺構１基，神社跡１基を検出した。このうち城に伴うと考えられる遺構は，平坦面，堀切，竪堀，土塁，土坑，石組遺構，石列遺構，基壇，石積である。

遺物としては土器類，鉄製品類，石製品類が出土した。土器類には，土師質土器（杯・皿），瓦質土器（鍋・擂鉢），東播系須恵器（擂鉢），中国産青磁（碗），亀山焼（壷），常滑焼（甕），瀬戸焼（瓶子），備前焼（甕）が，鉄製品類には小刀，釘，不明鉄製品，石製品には五輪塔（風輪・火輪・水輪），用途不明石器がある。

Ⅳ 遺　構

調査の結果，城を構成する平坦面をはじめした遺構を検出した。以下では各平坦面ごとに，関連性が深いと考えられる遺構も合わせて報告する。

1　平坦面１（第３図，図版２－１・２）

本城跡の最高所に位置する平坦面である。現状では「福原城跡記念碑」と記された石碑が平坦面のほぼ中央に立てられていた。石碑の周囲は木が切り開かれ，斜面は雑木が生い茂り，一部竹藪となっていた。遺存状況は良好とはいいがたく，特に北側の端では，中央部より１ｍほど低くなっており，崩落が進んでいた。遺構検出面は，厚さ10cm以下の腐葉土を除去するとすぐに現れる。平坦面の中央では基盤面である花崗岩風化土が，周辺では造成のための盛土面の上端が遺構面となる。

平面形は北辺約25m，東辺約36m，南辺約６ｍ，西辺約32mの南側が細くなった不整形の台形で，面積は約612m²，平坦面内は盛土の自然流出部分を除けばほぼ水平である。端部は北側と西側，東側の一部に石積が築かれ，南側及び東側の南半分は自然石を利用した切岸状になっている。本平坦面の北側には平坦面２が，南側には平坦面４が，東側斜面北寄りには，本平坦面と一体で機能すると考えられる平坦面５がある。本平坦面と平坦面２は本平坦面の出入口でつながるが，平坦面４と連絡する通路はない。

遺物は平坦面の東半から土師質土器（皿・杯），石組遺構周辺から備前焼（甕），平坦面北側の造成土中から瀬戸焼（瓶子）・亀山焼（甕）・常滑焼（甕），瓦質土器（擂鉢）が出土した。

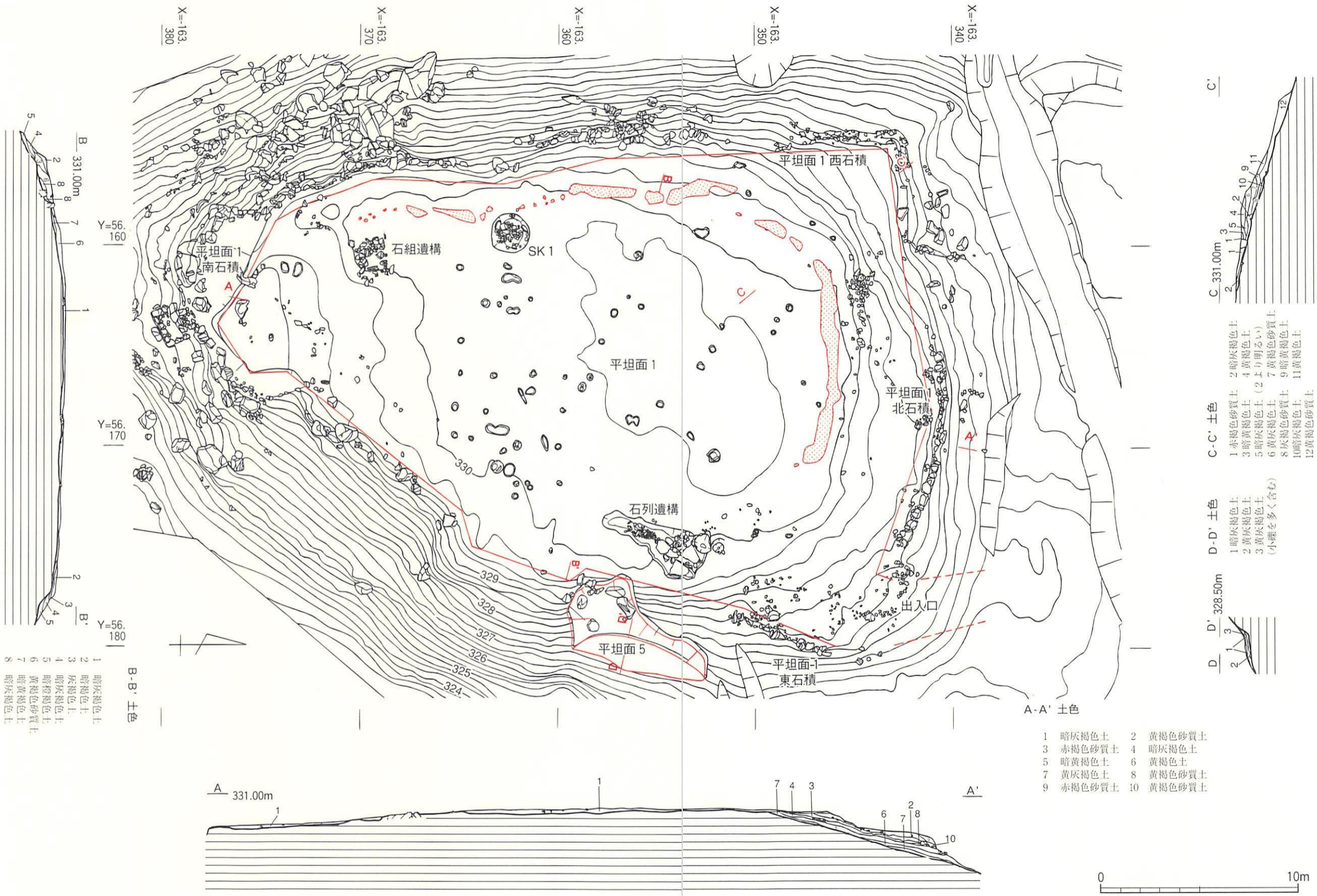
平坦面の造成

造成のための盛土は，石積が行われていた北側，西側及び東側の石積部分で多く，その他の部分ではわずかに見られるのみである。基本的には平坦面の中央部を削り出した土を盛ったと考えられる。北側及び西側の盛土は最大で１ｍ以上現存している。また，北側及び西側では，石積遺存面の内側約２ｍに，20cm前後の礫を高さ20～30cmの高さで円弧状に配した石列があり，造成の際に土留めとして築かれたと考えられる。造成に際して版築などを行った痕跡は確認できなかった。

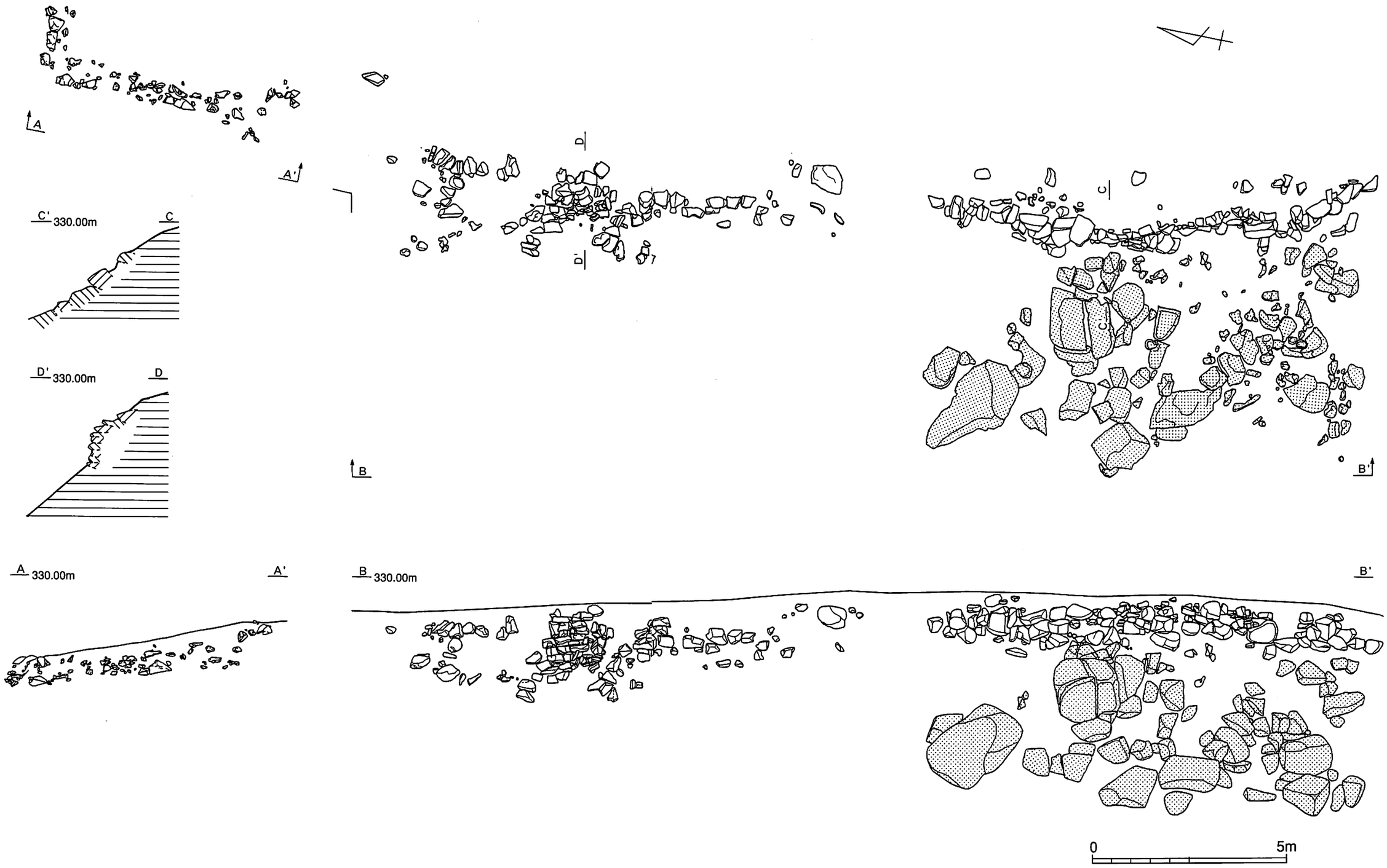
石積（第４～６図，図版２－３，３，４－１）

石積は平坦面の北側，西側，及び東側の北東隅付近で確認できた。西側の石積は，部分的には４段以上，高さ約1.2mまで確認でき，最大高は約1.5m近くになる可能性がある。北側及び東側は遺存状況が悪く，最大で２段，多くは基底石のみが部分的に欠けながら残る状況で，最大の段数及び高さの推定も困難な状況だった。石積の長さは，西側が約35.5m，北側が約21m，東側が約7.5m（自然礫との判別が困難な部分を除く）である。

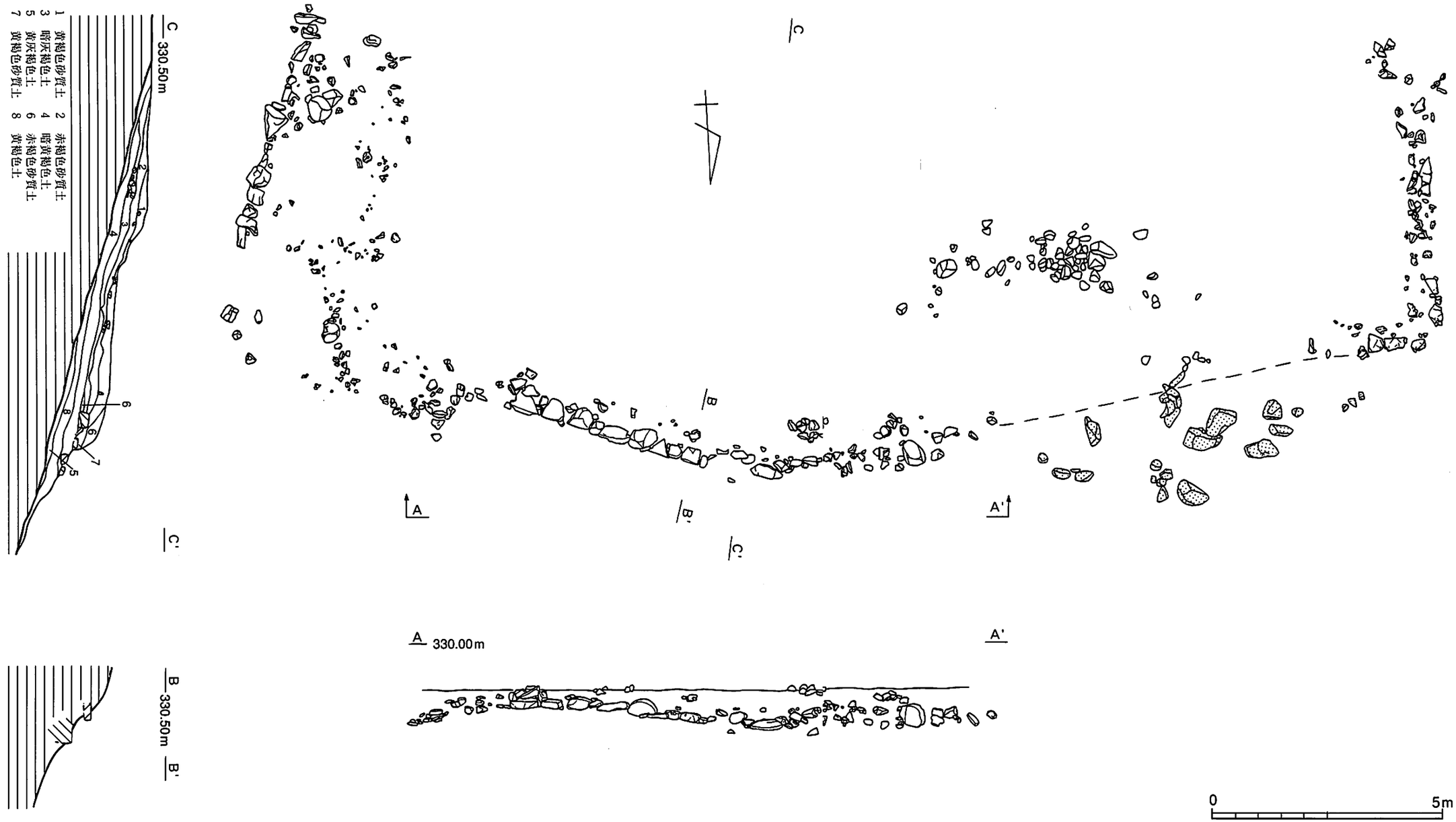
石積の基礎の造成方法は大きく２通りに分かれる。東側・北側・西側北東隅付近の石積は基盤面より20～50cmの厚みがある再堆積土あるいは盛土の上に基底石を据えている。西側石積の大部



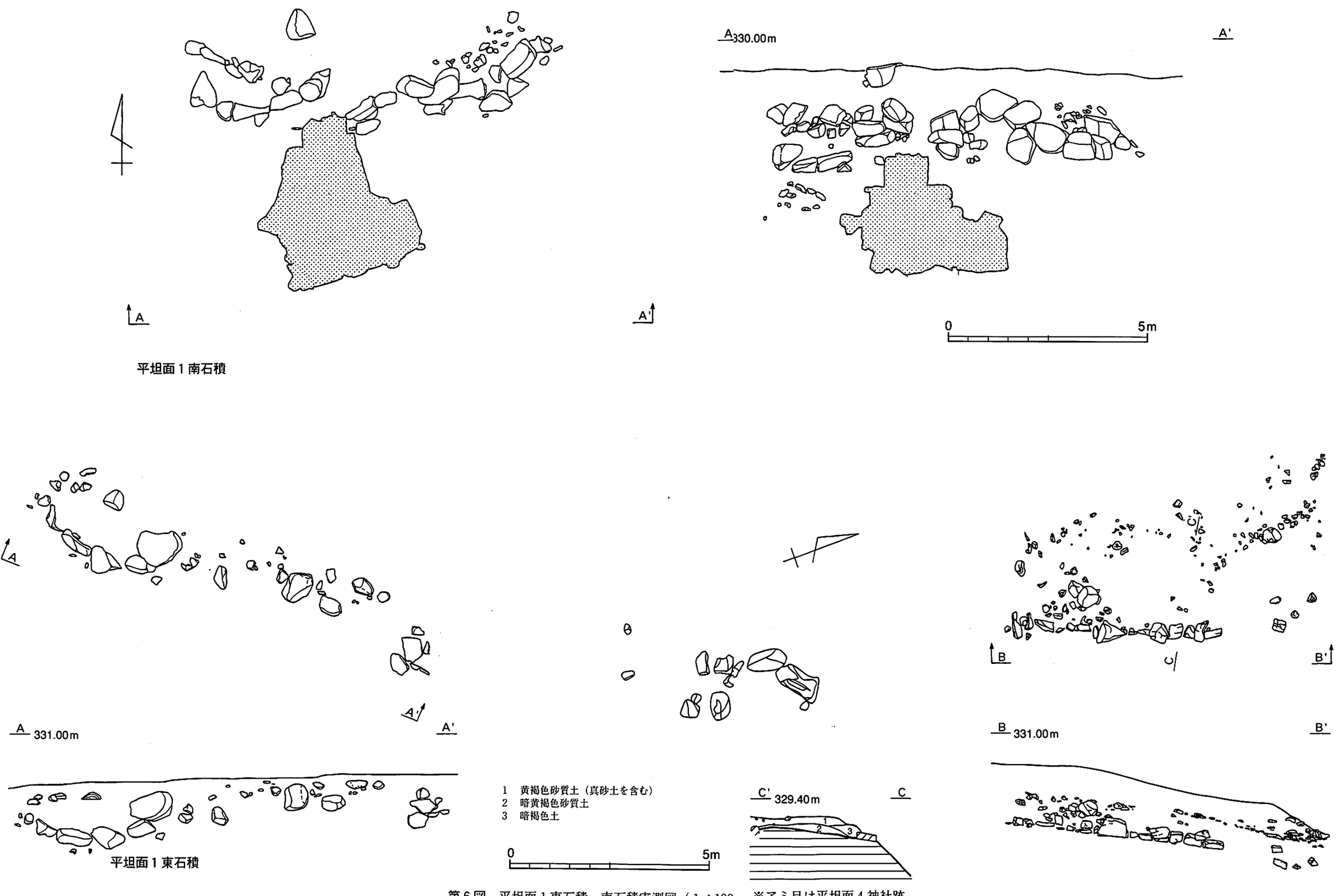
第３図　平坦面１・５遺構配置図（1：200）　※アミ目は土留石



第４図　平坦面1 西石積実測図（１：100）　（アミ目は自然石）



第5図　平坦面1北石積実測図 1：100)



第６図　平坦面１東石積，南石積実測図（１：100　※アミ目は平坦面４神社跡

分は花崗岩の露頭及び基盤面をそのまま，あるいは少し削り出すように整地して基礎としている。先述した石積の遺存状況に差が出ているのは石積の基礎部分における強度の違いに拠るところが大きいと考えられる。

積み方は乱積みで，概ね石の広口面を石積の表面とするような積み方がされている。裏込めの石はごくわずかである。石材は平坦面内を含め周辺に多数露出している花崗岩で，加工痕のある石材はなく，周囲にある20～50cm程度の手ごろな自然石を利用したものと考えられる。

平坦面１に伴う遺構

平坦面内で確認できた遺構には，石組遺構１，石列遺構１，土坑３（ＳＫ１～３），ピット多数がある。周辺では，東側斜面で土塁，西側斜面で竪堀，北東隅で出入口を検出した。

石組遺構（第７図，図版４－２）

平坦面１の南端近くにある。平面形は，南側が削平されるなど崩壊が進んでいるためはっきりとしないが，一辺約1.5mの正方形と考えられる。各辺の方向はほぼ東－西，南－北（磁北）方向を向いている。南側では幅20cm，高さ50cm程度の扁平な石を立て並べており，北側の土層観察からは，掘り込みの跡が確認できた。これらのことから，まず地山を掘りこみ，その掘り込みの壁際に石材を縦長に立て並べて作り出したと考えられる。石組内の土層はほぼ水平になっており，人為的に入れられた可能性が高い。また，１層の暗褐色土と２層の暗黄褐色土の境界付近に，最大の厚さが約10cmにもなる火を受けている層があり，その中には部分的によく焼きしまった明赤褐色の焼土がブロック状に入っており，かなり強い火力の使用があったことがうかがえる。

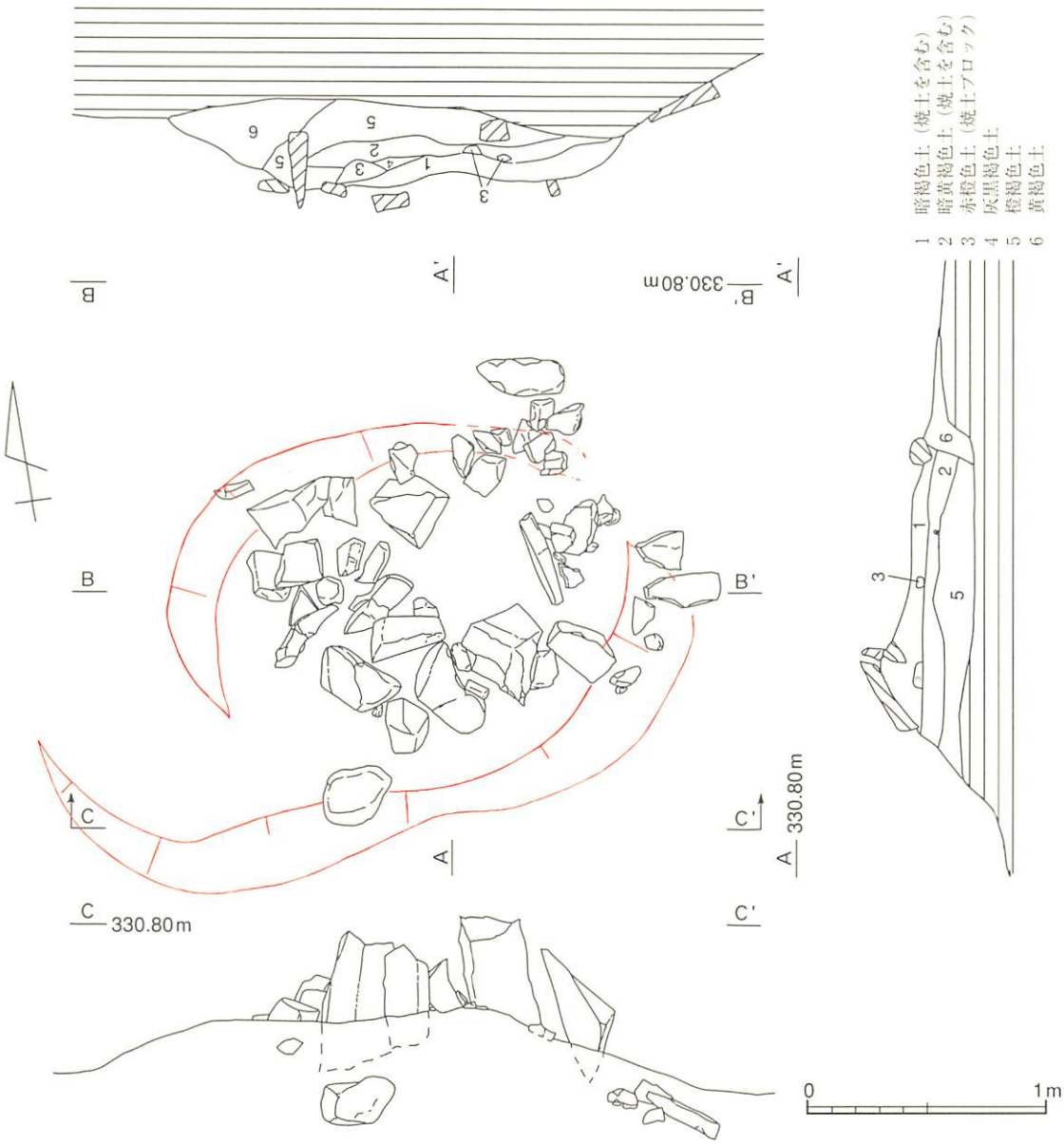
遺物は遺構内及び周辺から備前焼（甕）の破片が出土しているが，盛土からではなく，表土層直下からの出土である。

石列遺構（第８図，図版４－３，５－１）

平坦面１の北西隅付近にある。近接する２基の土坑（ＳＫ２・３）と一連で使用されていた可能性が高い。最大長約4.5m，最大幅約2.2mの不定形をしており，長軸はおおよそ南西－北東方向である。遺構は南西から北東に向かって緩やかに傾斜する掘方を掘り，その中に石材を並べるようにして造っている。掘方の深さは最大で約0.5mである。

石材は10～30cm程度の不定形のものを掘方内に規則性なく入れた部分と，50cm以上のものを「刺股」形に組み，その周囲に20cm程度の石材を入れた部分を組み合わせたような形で作られている。前者と後者の境は遺構の南西隅から約1.9mあたりである。

前者は遺構検出面と同レベルでは石材の大半が地中にあり，暗渠状を呈していた。後者は北東端の２つの巨石（長さ１m以上）の上面を水平かつレベルを揃え，両者の内側が幅約30cmの平行な溝状になるように配し，溝状部分の底にも平石を敷くように組み込んでいる。巨石の南西側には，15cmほどの石を２列敷き並べ，その上に渡すように端を重ねて置かれた扁平な石が２つある。

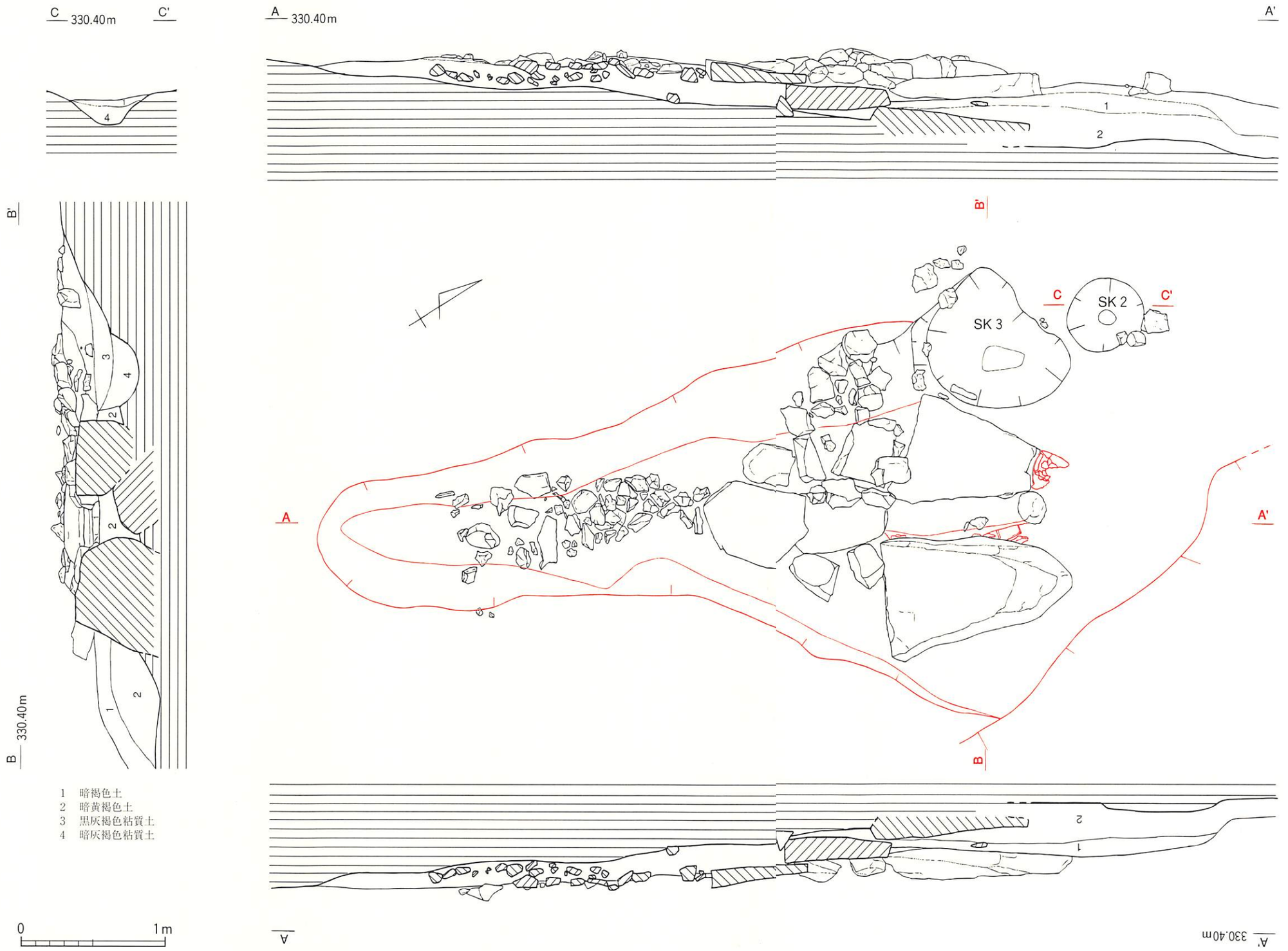


第７図　石組遺構実測図（１：30）

この２つの石と巨石の上面のレベルはほぼ等しい。なお，溝状部分の底にある石は遺構の掘方底面の傾斜につながるように据えられていた。

ＳＫ２・３は，２基が並んで石列遺構の西側に接するように掘り込まれていた。ＳＫ２は径約0.5mの円形で，深さは約0.25m，断面形は擂鉢状である。ＳＫ３は長径約１m，短径約0.8mの不整な楕円形で，深さは約0.4m，断面形はボウル状である。埋土中にやや粘質の黒灰褐色土を含み，平坦面１内にある他の遺構の埋土とは異なる。

遺物は南西側の小礫の間から土師質土器（皿）が出土したが，いずれも小片のため図示できなかった。



1　暗褐色土
2　暗黄褐色土
3　黒灰褐色粘質土
4　暗灰褐色粘質土

第８図　石列遺構実測図（１：30）

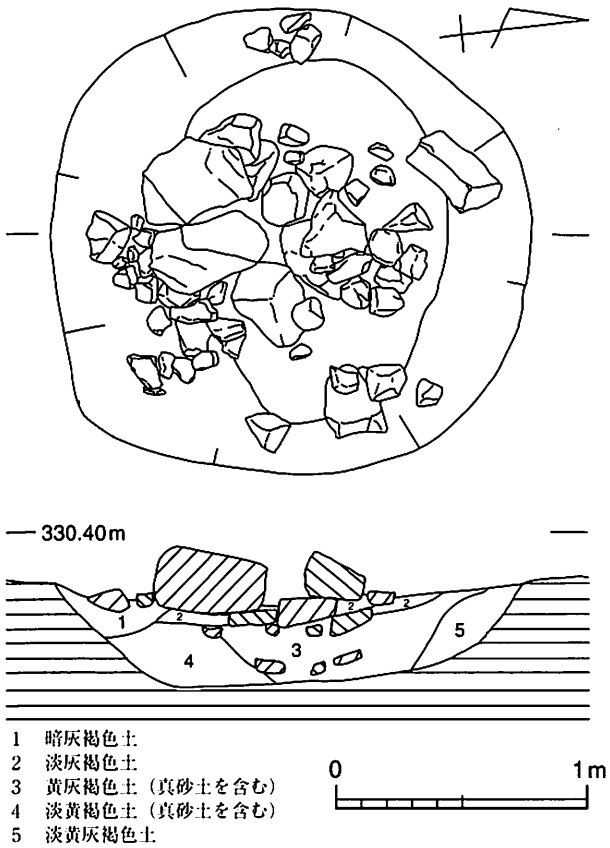
土坑

ＳＫ１（第９図，図版５－２）

平坦面の南半，西寄りにあり，石組遺構の北約７ｍに位置する。直径約1.9ｍ，深さ0.4ｍの不整な円形の土坑で，緩やかな弧を描くように掘り込まれ，底はほぼ水平である。底面形は長径約1.5ｍ，短径約1.2ｍの不整な楕円形である。

中央部の遺構検出面付近からは，50cm以下の石材が多数検出されたが，石材の配列にはっきりとした規則性がうかがえず，また，土層観察からも落ち込み等を確認することができなかった。

遺構内からの遺物の出土はなかった。



第９図　ＳＫ１実測図（１：30）

ピット

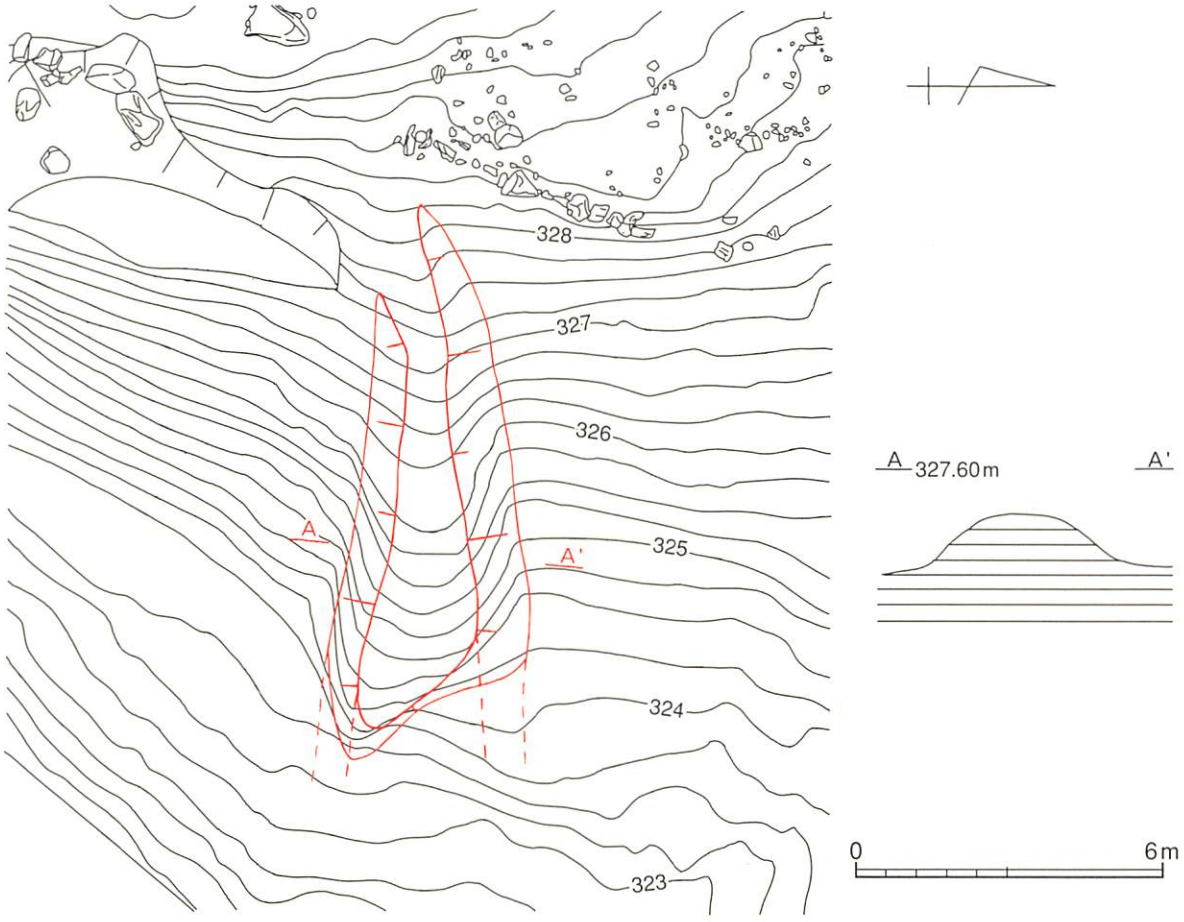
平坦面の南端を除いたほぼ全面から散在する状況で検出した。特に東半中央付近では，比較的集中していたため，掘立柱建物跡の存在を念頭に置きながら精査したが，確定には至らなかった。ピットの直径は0.2～0.6ｍで，0.3ｍ程度のものが最も多く，深さは0.2ｍ程度のものを中心に，0.1～0.3ｍのものが多い。

ピット内からも土師質土器（皿）とみられる土器が少数出土したが，いずれも小片のため図示できなかった。

土塁３（第10図，図版５－３）

平坦面の東側斜面にあり，平坦面５の北端付近から斜面下方に向かって伸びる。傾斜のなだらかな部分にある土塁１・２とは異なり，全て地山の削り出しによって造られている。全体的に侵食及び崩落が激しく全容は不明であるが，基点から６ｍ付近の最も遺存状況のよい部分で，基底部の幅約3.5ｍ，上端の幅約1.5ｍ，高さ約0.7ｍ，断面形は畝状になだらかに盛りあがり，現存長は約10ｍである。

なお，遺構周辺では斜面の下方に行くほど，土塁１・２の造成土と類似した粒子の細かい淡黄褐色土が多く堆積していた。この土が土塁の築造に伴う土が流出して再堆積したものであるなら，当初は地山を削り出した土を上に積んだ，さらに高い土塁であったとも考えられるが，遺構の土層観察で淡黄褐色土が確認できなかったため，可能性の指摘にとどめておく。



第10図　土塁３実測図（１：150）

竪堀（第11図，図版６－１）

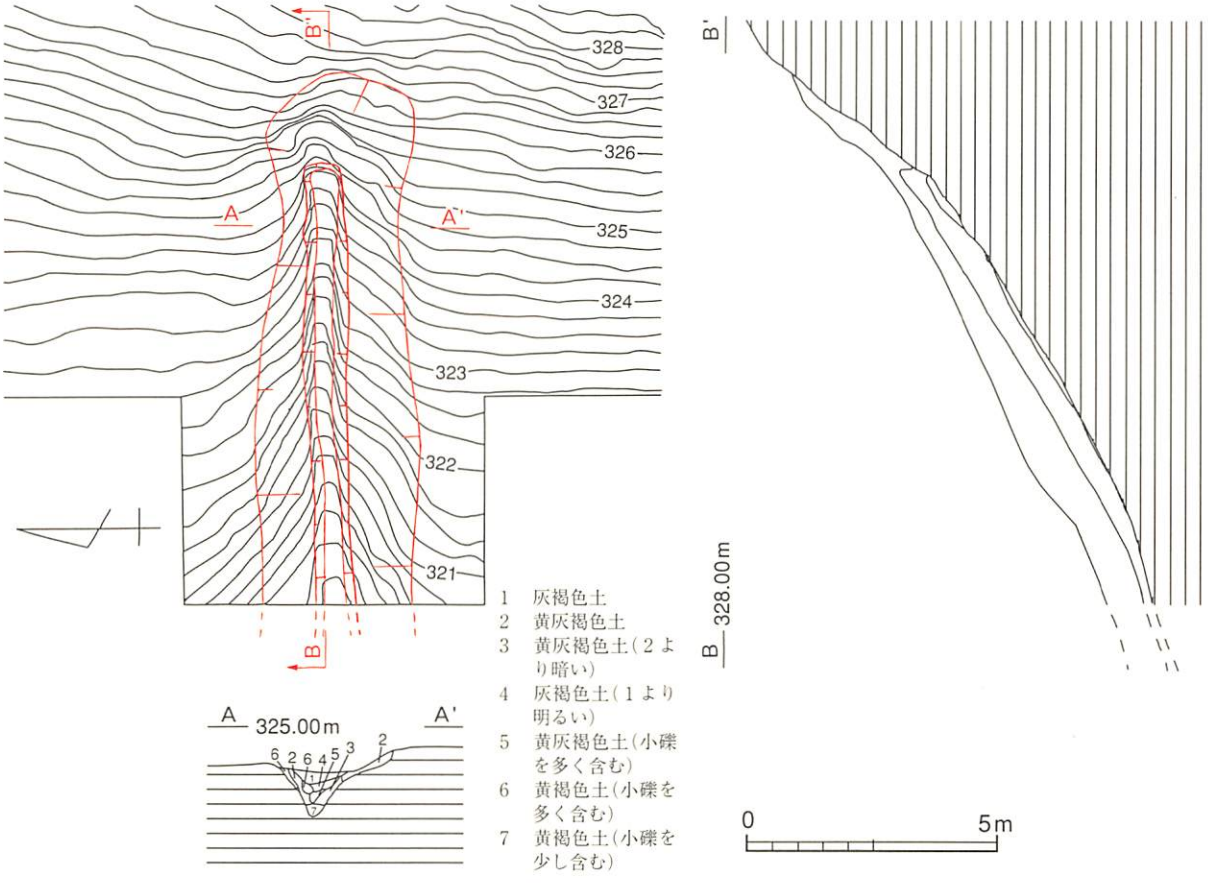
平坦面の西側斜面，ほぼ土塁３に対応するような位置にある。平坦面から約３ｍ下がったところから掘り込まれ始め，調査区外に続く。

堀の上面の幅は約2.3～3.5m，底面の幅は約0.2～0.4m，深さ１～1.5m，確認した長さは約11mである。横断面は二段掘りになっており，上部の傾斜は20～30°，下部の傾斜は約50°，縦断面は堀の内部が約30°，平坦面側への立ち上がりが約50～60°にもなる急角度で掘り込まれた薬研堀である。なお，堀の埋土の堆積状況から，この堀は自然の営力で埋まったのではなく，人為的に埋められた可能性も考えられる。

堀内からの遺物の出土はなかった。

出入口（第12図，図版６－２）

平坦面１の北東隅に位置する。平坦面１北石積が約90°北側に折れ曲がり，１ｍ程伸びる部分と，平坦面１東石積の間にある幅約4.5mの部分は，平坦面１から平坦面２へとなだらかに続き，検出面が小礫混じりの土となっている。周辺の地山は濡れると非常にすべりやすい土質であることから，小礫が意図的に入れられた可能性も考えられる。このような形状と，他に平坦面１とつ

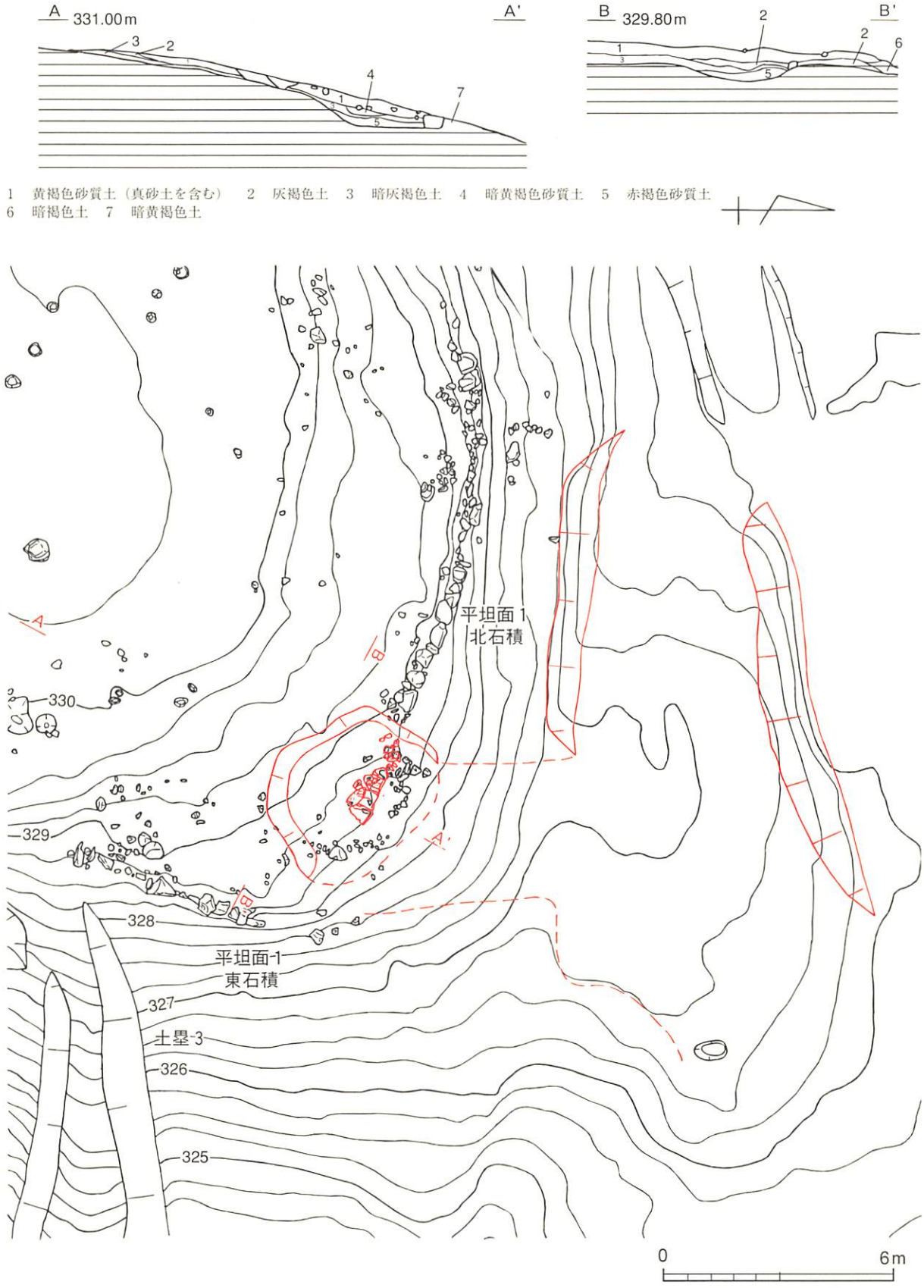


第11図　竪堀実測図（1：150）

ながる部分がないことから，ここを出入口と判断した。

通路状の部分は，石積が途切れた先もそのまま下方に伸び，平坦面2より約0.8m高くなった，面積約65㎡の小平坦面へと続く。小平坦面は平坦面1と2を直線的に結ぶ北側には段があり，左右に曲がる東西方向はスロープとなっているため，西もしくは東に曲がって平坦面2とつながっていたと考えられる。西側に曲がった場合，ゆるやかに降る幅約2mの通路状の部分を通り，平坦面2のほぼ中央とつながる。東側に曲がった場合は，段の下にあるくぼみ状の部分を通じて平坦面2あるいはさらに下方へとつながっていたと考えられる。両者を比較すると，平坦面1の北斜面を掘り込んで造られた西側は，掘り込みの端が北側に，すなわち平坦面2に向かって折れ曲がっており，平坦面2とのつながりを強く意識したつくりになっている。それに対して東側は，小平坦面からくぼみ状の部分につながる箇所が急傾斜である，くぼみ状の部分から先に通じる箇所がないことから，小平坦面から先の通路は西に折れ曲がっていたと考えたい。

出入口は，掘り下げの結果，単純に削り出しあるいは盛土によって造られたのではなく，次のような手順で構築されていることがわかった。まず長辺4.5m，短辺約3.5mの範囲を北側が開いた「コ」字状に堀りくぼめて段状の平坦面を作り，その西半に平坦面1北石積の延長方向に石を2段程度積んでからそれを埋めて通路状にしている。これらの手順は構造的に強度を高めるため



第12図　平坦面１出入口実測図（１：150）

にとられた方法とは考えがたく，また，掘り込み及び石積の周囲に地鎮等の痕跡も見つかっていないことから，どのような目的でこのような構築方法がとられたかは不明である。

遺物は埋土中から土師質土器（器種不明）が少数出土したが，いずれも小片のため図示できなかった。

平坦面５（第３図，図版６－３）

平坦面１の東斜面中央よりやや北寄りに作られた，幅約７ｍ，奥行約1.5mの斜面下方に向かって開けた弧状の小平坦面で，面積は約7.7㎡，平坦面１との高低差は約３ｍである。

土層観察から，平坦面は全て削り出しによって造られたと考えられる。ただし，本来は，削った土を前面に盛って拡張していた可能性も考えられる。

平坦面は北側の土塁３と，後述する南側にある平坦面１東側のやや張り出した部分に接するように造られている。これらの位置的関係から，出入口の構造上，防御に必要な十分な高低差がとれないという弱点を補強するために造られたと考えられる。

平坦面内から遺構は検出されず，遺物の出土もなかった。

なお，平坦面５のすぐ南側の部分にあたる平坦面１の東辺中央部では，平坦面が幅約５ｍにわたり，前方に約１ｍほど凸字状に飛び出しており，横矢的な目的で作られていた可能性も考えられる。しかし，明確に識別できなかったため遺構として扱わなかったことを付しておく。

２　平坦面２（第13図，図版７－１）

平坦面１の北側に接する平坦面で，平坦面１とは堀切１で，北側にある平坦面３とは堀切２で区切られる。平坦面１との高低差は約４ｍである。現状では平坦面・斜面とも雑木が生い茂り，斜面の一部は竹藪となっていたが，現状観察で堀切１の存在は確認できた。遺存状況は概ね良好で，厚さ10㎝以下の腐葉土を除去するとすぐに基盤面及び盛土面の上端の遺構検出面となる。ただし，平坦面２では基盤面が赤褐色粘質土となり，平坦面１とは異なる。

平坦面の平面形は，東西約37m，南北約９ｍのほぼ東西に伸びる長方形で，面積は約346㎡である。平坦面西側では明確な傾斜変換線があり平坦面の端を確定できたが，東側は地形に沿うように緩やかに降っており，端を明確にすることができなかった。先述したように平坦面１とは出入口でつながり，平坦面３・６とは平坦面の東端付近で堀切２につながる通路，さらに堀切２を介して連絡していたと考えられる。

平坦面２は西側及び北側に盛土されて平坦な面が作り出されているが，東側では盛土及び削り出しのいずれも確認できず。自然地形を利用していると考えられる。盛土は北側で最大約0.3m，西側で最大約0.4mで，版築などはなされていない。

平坦面の東端付近から，堀切２へとつながる通路と考えられる部分を検出した。地形改変が激しく断定はできないが，掘り下げの結果から，この部分は短い距離でさほど急傾斜でないにもかかわらず２度折れ曲がる形態であると推測できた。これは，この部分の基盤面が，水分を含むと

第13図　平坦面２遺構配置図（１：200）

非常に滑りやすくなる土質であることと関係があるのではないかと考えられる。しかし，折れ曲がり部分の通路面が不明瞭にしか確認できなかったこと，昭和17（1942）年に平坦面１に石碑を建立する際，山道を広げるために地形をかなり改変したという地元の方の話もあることから，本来は直線的に登る通路であった可能性も捨てきれない。

遺物は，平坦面１から２への通路と平坦面２が接する付近の再堆積土（平坦面１北側斜面からの流出土）中から土師質土器（皿）が出土した。

平坦面２に伴う遺構

平坦面２では，平坦面内からの遺構の検出はなかった。周辺では，平坦面及び西側斜面にかけて掘られた堀切１条（堀切１）を，西側斜面から土塁１基（土塁１）と土坑２基（ＳＫ４・５），基壇１基（基壇）を検出した。ただし，土塁１は，堀切２に伴うと考えられるため，堀切２の部分で述べることとする。

堀切

堀切１（第14図，図版７－２・３，８－１）

平坦面１と２を区切る堀切である。平坦面の中央付近，平坦面１から出入口を通り，下ってくると想定される通路が，平坦面２と接する辺りから掘り込まれ始めている。

堀は，堀切と竪堀をつなぎ合わせたような形状をしている。両者が同時に掘られたのか，時間差を置いて掘られたのかは土層観察からは明らかにできなかった。

堀切部は，長さ約16m，上端幅約3.2m，底面幅約1.6m，深さ約0.7m，立ち上がりの角度約35°の幅広の箱堀である。ただし，南側の立ち上がりの傾斜はゆるやかで，平坦面１北斜面との境界がはっきりしない部分もある。堀切の内部及び周辺からは，柵などが設置された痕跡は確認できなかった。

堀切西側の傾斜変換点付近からは竪堀となり，確認できた部分の長さ約12.5m，上端幅約１m，底面幅約0.15m，深さ約1.2m，立ち上がりの角度約40°の薬研堀である。なお，竪堀部はさらに下方に続く。

遺物は，堀切の東端付近から土師質土器（皿）の破片が出土した。

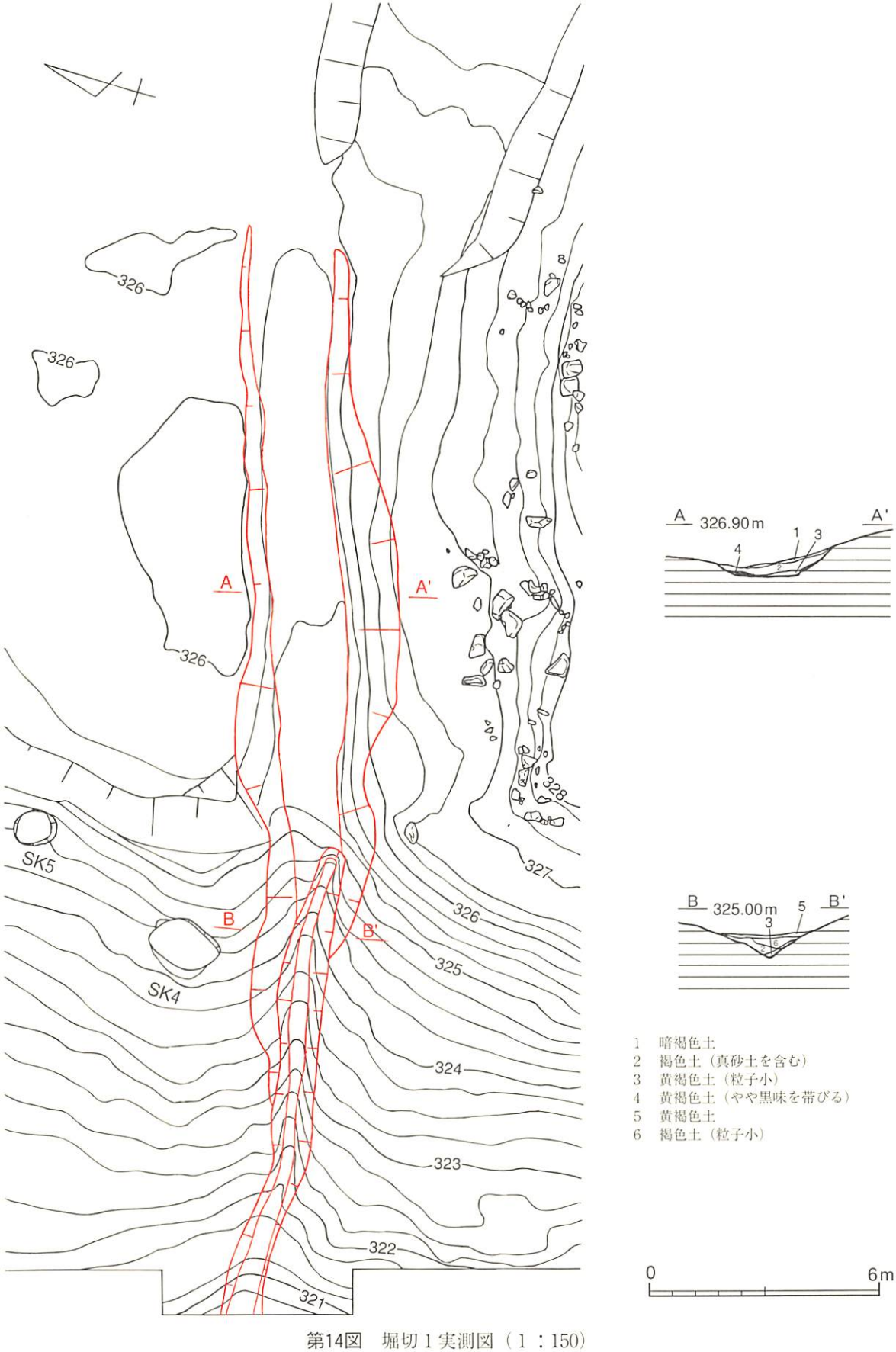
土坑

ＳＫ４（第15図，図版８－２・３）

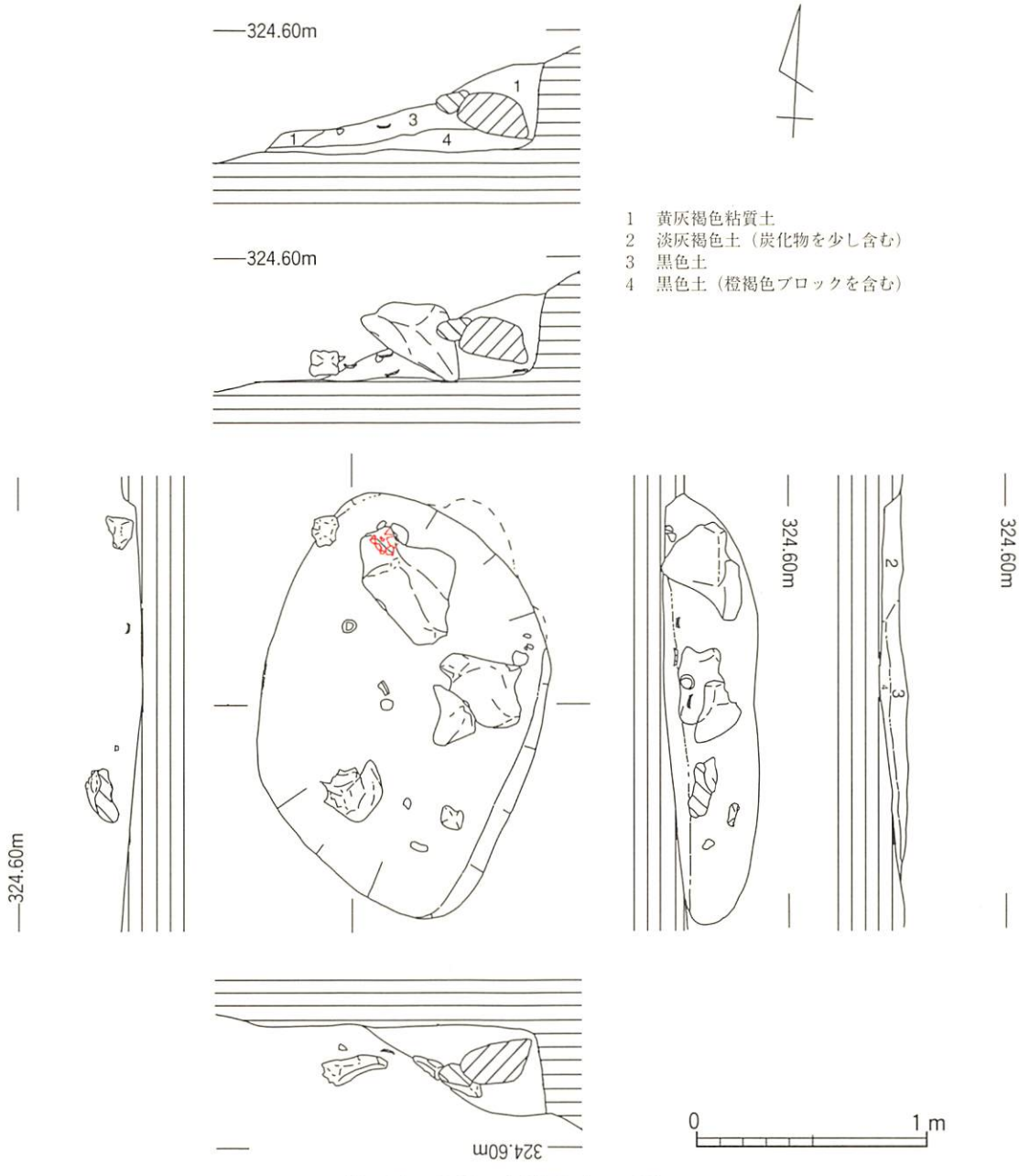
平坦面２西側の傾斜変換線から約３m下側，堀切１から約１m北にある土坑である。

緩やかな斜面をほぼ垂直に約0.4m掘り下げて，幅約1.25m，奥行約0.8mの楕円形の小平坦面を造り出している。土坑の底面はほぼ水平である。

土坑の埋土中全体から炭化物の細粒を検出し，特に主な内容土である黒色土は，消炭状の炭化物が風化し，土壌化したものと考えられる。さらに，底面付近からは焼土と見られる橙褐色土の



第14図　堀切１実測図（１：150）



第15図　ＳＫ４実測図（１：30）

小ブロックが検出された。また，土坑内からは10～60cmの石材が馬蹄形に上面のレベルをほぼ揃えるような状況で検出された。ただし，石材が火を受けた痕跡は確認できなかった。

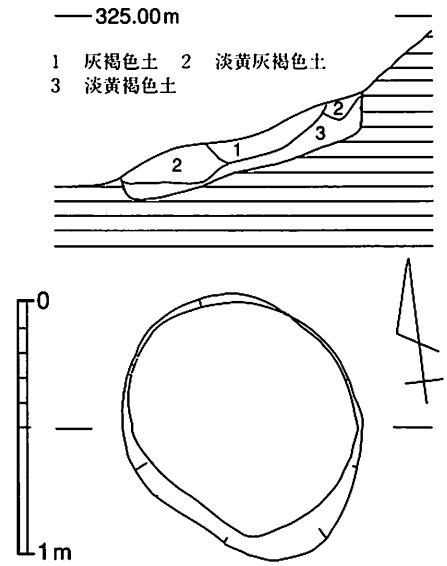
以上のことから，火の使用に伴う遺構であるが，焼土がごくわずかで，石材が火を受けていないことから，強力な火力の使用はなかったと考えられる。

遺物は，黒色土中から，完形に近い状態の土師質土器（皿）４点，土師質土器（杯）１点のほか，土師質土器の小片が出土した。

ＳＫ５（第16図，図版９－１）

ＳＫ４の北側約４ｍ，基壇に近接した場所に位置する。長径約１ｍ，短径約0.9mの楕円形で，底面は東から西に緩やかに傾斜し，壁面は底面に対しほぼ垂直に掘りこまれている。

遺構内からは，土師質土器が出土したが，小片のため図示できなかった。



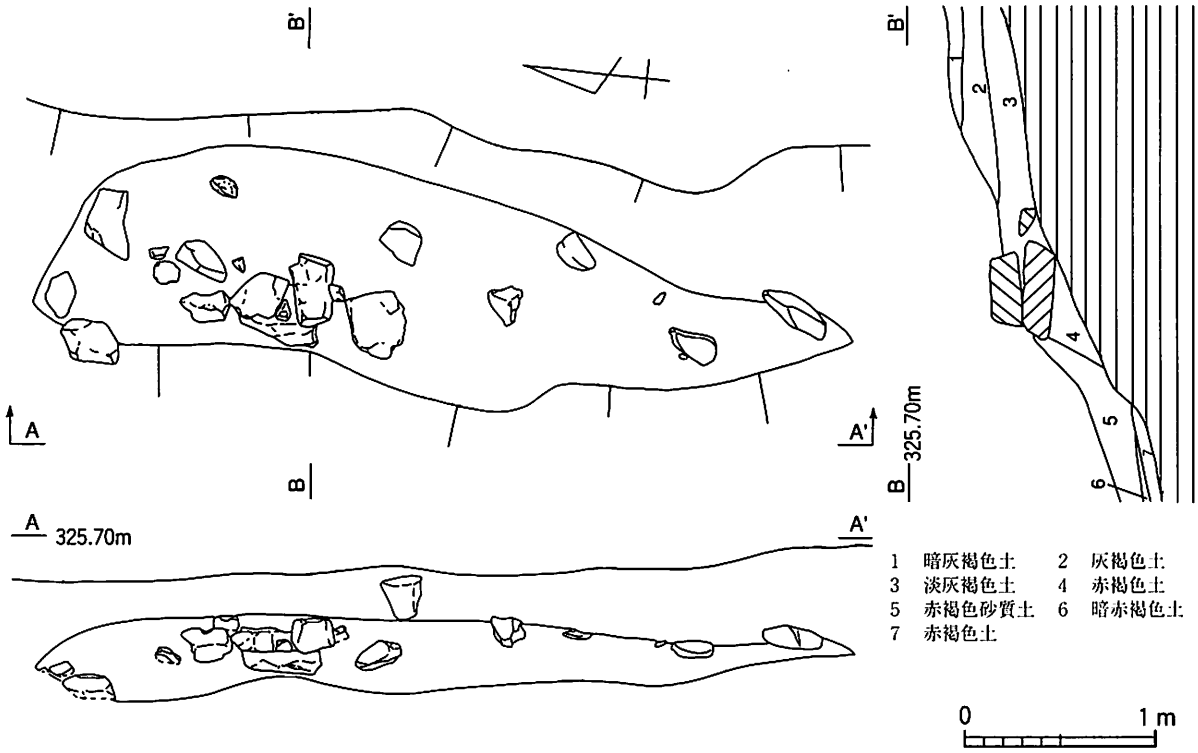
第16図　ＳＫ５実測図（１：30）

基壇（第17図，図版９－２）

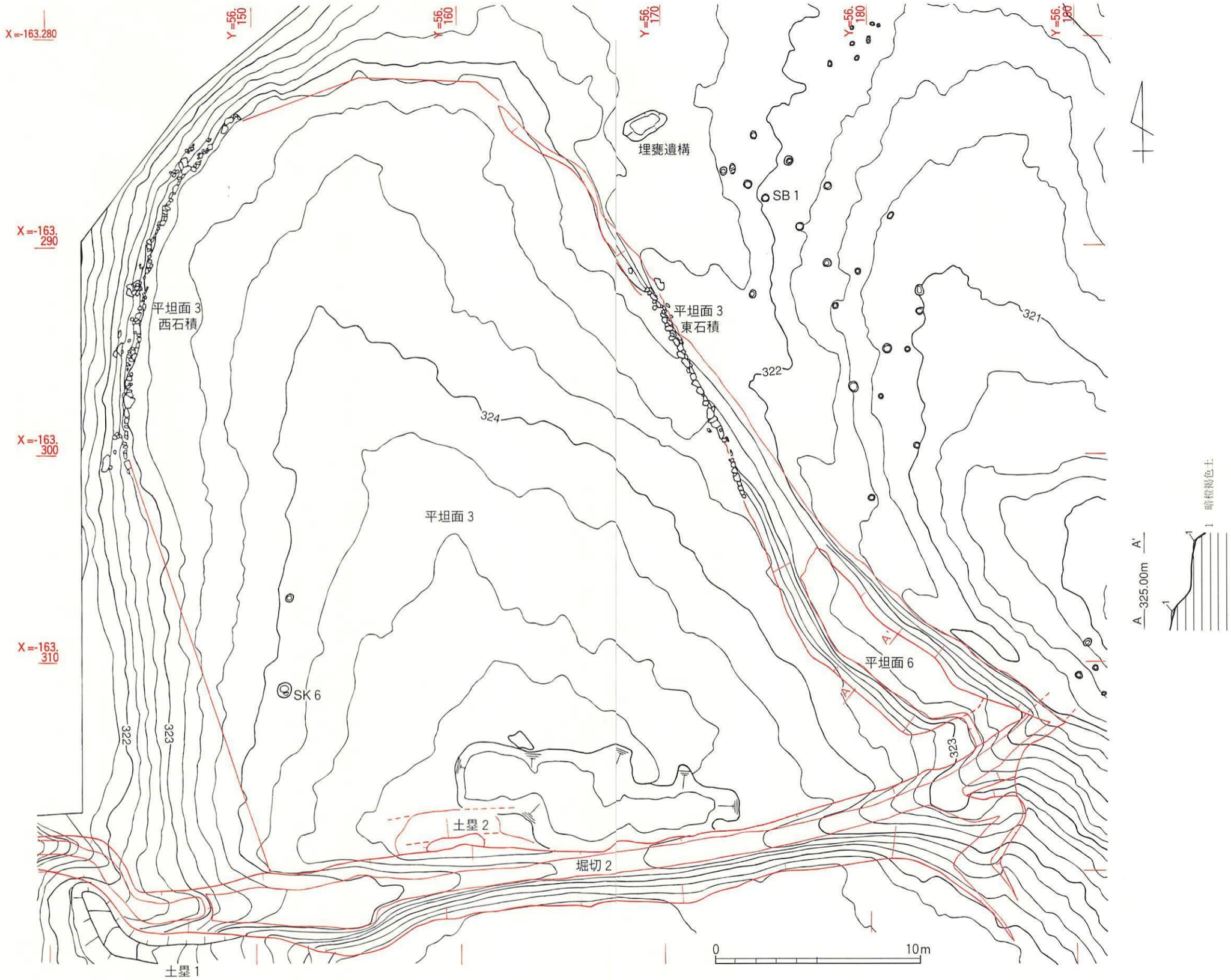
堀切２の南側約２ｍ，平坦面２の西端に接するように位置する。幅約4.5m，奥行約0.8mの弧状の平坦面で，面積は約3.5m²である。遺構内には石材が散乱しており，遺構の前面には最大２段の石積が残っていることから，本来は前面全てに石積があったと考えられる。再堆積土を取り除いた遺構前面の高さは約0.6mである。

土層観察から，遺構の築造は平坦面２の造成と同時に行われたと考えられる。造成は旧地表面に盛土して石積の基礎を作り，石材を積み上げながら土を入れている。背後の立ち上がりは，それ以後の平坦面２の造成を石積の端から１ｍ以上後退させて行うことによって造り出している。

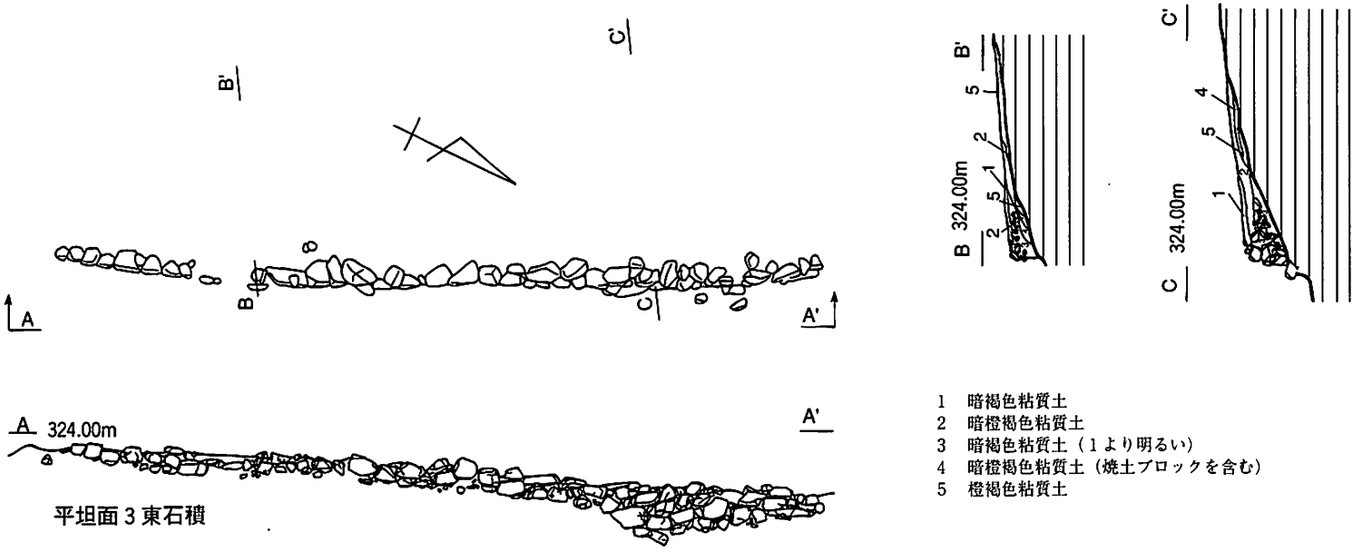
遺物は五輪塔（風輪・火輪），土師質土器が出土したが，土師質土器は小片のため図示できなかった。



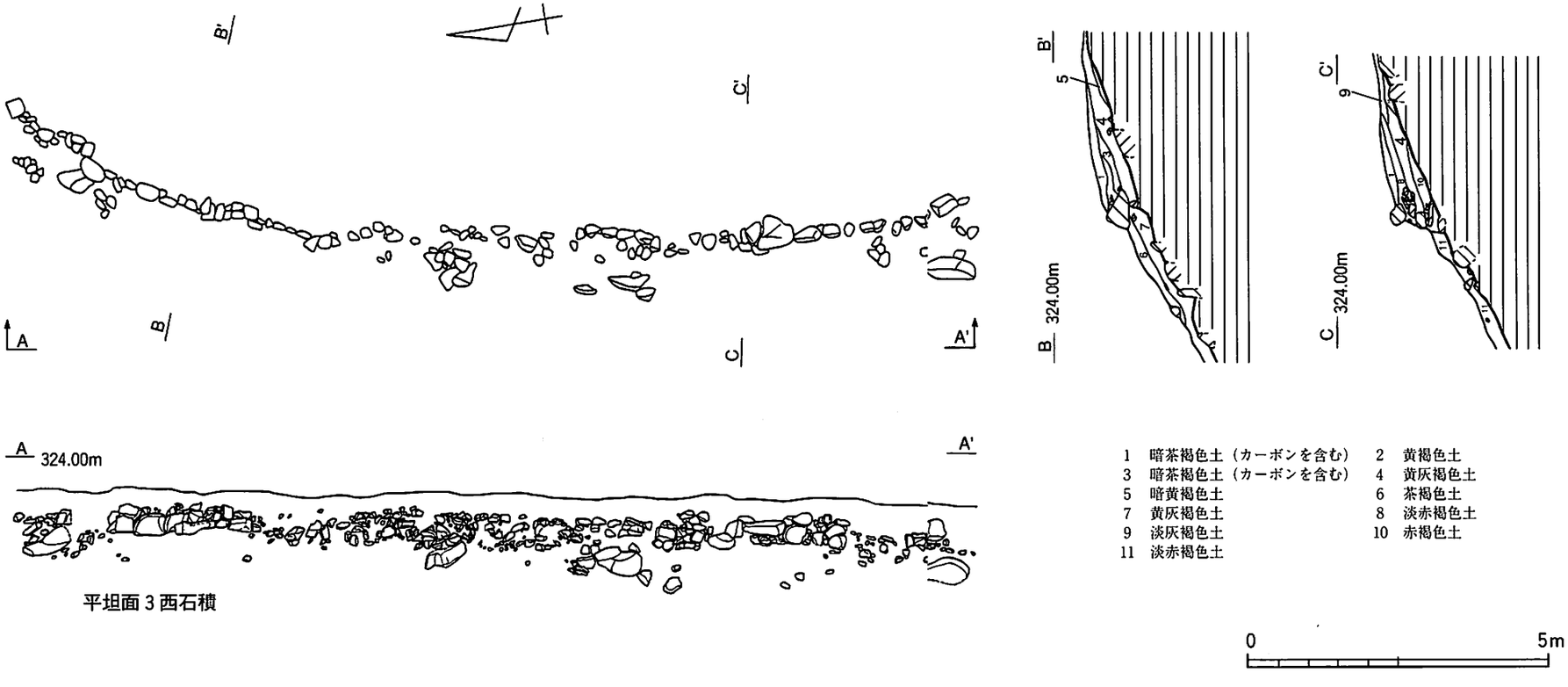
第17図　基壇実測図（１：40）



第18図　平坦面３・６遺構配置図（１：200）



平坦面３東石積



平坦面３西石積

第19図　平坦面３東石積・西石積実測図（１：100）

3　平坦面３（第18図，図版９－３）

平坦面２の北側に接する平坦面で，平坦面２とは堀切２によって区切られる。高低差は，平坦面１とは約５ｍ，平坦面２とは約１ｍである。現状では平坦面・斜面とも雑木が生い茂り，一部は竹藪となっていたが，現状観察で堀切２，土塁２，平坦面３東・西石積の存在が確認できた。また，平坦面の南東側には平坦面６が存在する。平坦面３と平坦面６の高低差は，約1.5mである。

平面形は，北辺約13m，東辺約40m，南辺約35m，西辺約36mの台形状で，面積は約965m²である。平坦面は，南側は堀切２を，東及び西側は石積を端とするが，北側は明確でない。ただし，後述するように東側の石積は城に伴う可能性は低く，実質的に端が確定できたのは南及び西側のみである。

平坦面の遺存状況は概ね良好で，厚さ10cm以下の腐葉土を除去すると，すぐに基盤面及び盛土面上端の遺構検出面となる。基盤面は平坦面２同様赤褐色粘質土で，西側傾斜変換点付近には20cm程度の礫が層状に露出する部分がある。

隣接する平坦面との連絡は，平坦面２・６と堀切２の堀内道を通じて行っていたと考えられる。

遺物は，平坦面の東半から土師質土器（皿），瓦質土器（鍋），西半から東播系須恵器（擂鉢）が出土した。

造成

造成のための盛土は，石積が行われていた東側及び西側で確認できた。最大の盛土の厚さは東側で約0.8m，西側で約0.6mである。造成に際して版築などを行った痕跡は確認できなかった。

石積（第19図，図版10）

石積は平坦面の東辺及び西辺で確認できた。

西側の石積は，現状で全長約18m，最大の高さ約0.6m，掘り下げで確認した最大の高さ約0.9mである。遺存の最も良好な部分で確認できた段数が３段で，石積全体が遺存している部分はわずかで，基底石とその上部に裏込め石が露出して残存する部分が大半である。築造は，土層観察から，地形の整形などを行わず，そのまま石を積み上げながら順次土を入れて築かれたと考えられる。積み方は乱積みで，石の広口面を石積面としているものが多い。裏込めの石はごくわずかで，使われている石材も10cm以下の小さなものが多い。石材は周辺に多数露出している花崗岩で，加工痕のある石材はなく，周囲にある20～30cm程度の手ごろな自然石を多く利用しているが，基底石の中には70cm程の大型のものも用いられている。

東側の石積は，全長約11m，高さ約0.8m，石積は地形に応じて１～４段で，ほぼ原型を保っている。基礎は，段数の多い部分では基盤面を一旦露出，整形してから石積を築き，段数の少ない部分では旧地表面の上に直接築いている。築造は，概ね石の広口面を石積面とした乱積みで，石を積み上げながら順次土を入れていったと考えられる。基底石に40～60cm，上段で20～40cm程度のばらつきの少ない石材が使われ，裏込めには，最大で約0.8m後方まで10～20cmの礫が入れられている。この石積は，基礎や石積の造作，使用石材などの点で，本城跡の他の石積と異なる。他の石積の築造方法は，ほぼ共通していることから，この石積は城との関連性が低いと考えられる。

平坦面３に伴う遺構

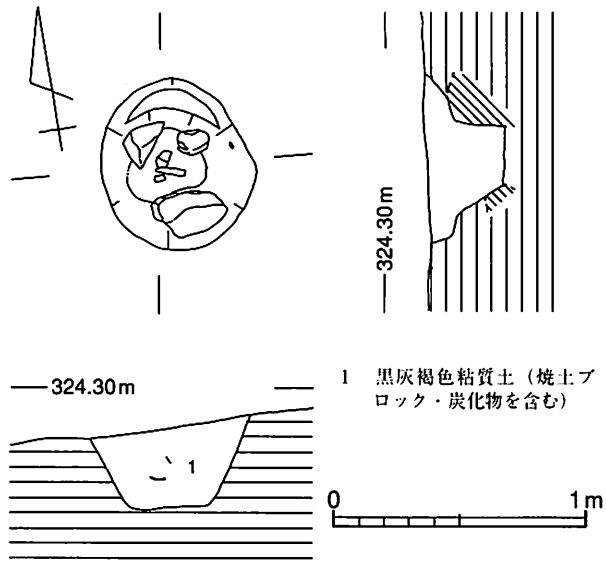
平坦面３からは，土坑１基（ＳＫ６）を検出した。平坦面周辺では，平坦面のある尾根を横断するように掘られた堀切１条（堀切２）と，堀切と一連と考えられる土塁２基（土塁１・２）を検出した。

土坑

ＳＫ６（第20図，図版11－１）

平坦面の南西寄りに存在する。平面形は長径約0.7m，短径約0.6mの楕円形，底面は径約0.3mの円形である。壁面は約60°で，基盤面に含まれる礫がある部分以外は直線的に掘りこまれ，断面形は台形状である。

遺構中央，埋土の中位辺りから，土師質土器皿１，鉄釘２，不明鉄製品２が出土した。



第20図　ＳＫ６実測図（１：30）

堀切

堀切２（第21図，図版11－２・３，12－１・２）

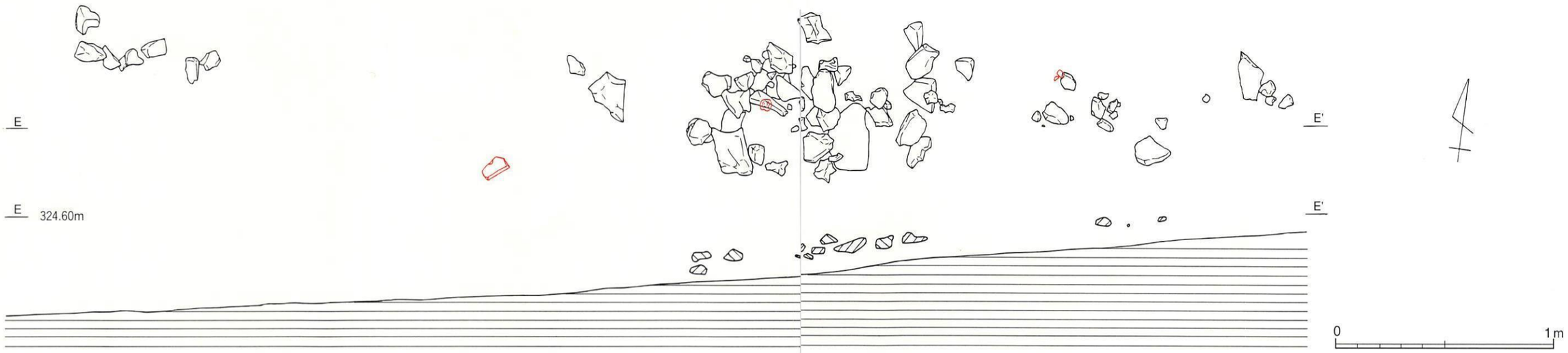
平坦面２と３を区切る堀切である。堀切１同様堀切と竪堀を組み合わせた形の堀で，東端は削平を受けている。堀切部は直線的に掘られているが，竪堀部は西側緩斜面部では食違い状に折れ曲がって掘られ，さらに下方に直線的に続く。

堀切部は，確認された全長は約41m，西側緩斜面の竪堀部を合わせると50m以上にわたり尾根を切っている。幅は上端幅2.5～4.3m，底面幅0.8～2.4mの箱堀で，平坦面２と堀底の高低差は約1.7m，立ち上がりの角度は約40°である。平坦面と接する部分は幅・深さとも大きく，丁寧に造られているが，西側斜面部は浅く，そのため土塁１が組み合わされたと考えられる。

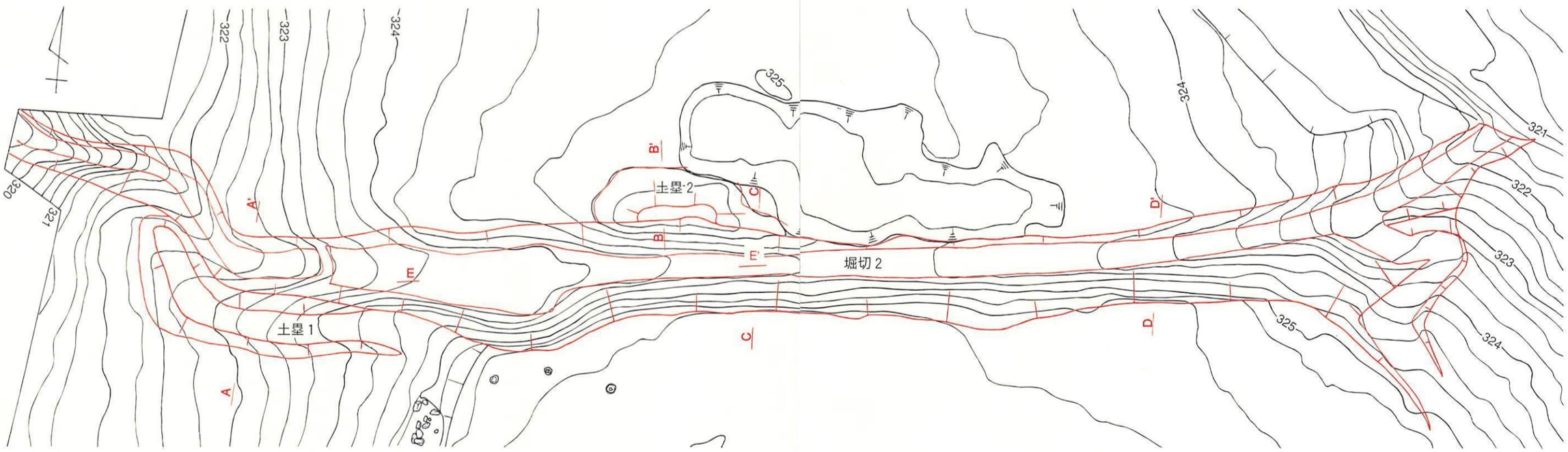
竪堀部は，調査区際で確認されたため全容は明らかではないが，確認した長さ約4.5m，上端幅1.3～1.7m，底面幅0.4～0.6m，深さ約0.6mの薬研堀である。

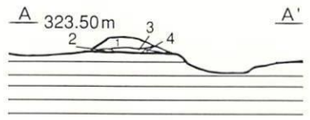
なお，本堀切の東端付近で，平坦面２ひいては平坦面１と通ずる通路がつながる。また，そこから約1.5m北東側で，平坦面６とつながる。さらに，削平されているため確認できなかったが，平坦面６との接続部のすぐ北東で，堀切２の延長が城の東端と北端を通り久芳，戸野に通ずる道と交差すると想定でき，いわば，城の大手と城内を結ぶ通路であった可能性が高い。このように堀切２は防御面だけでなく，通路としても重要な役割を負っていたと考えられる。

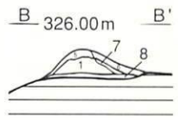
遺物は堀切部中央から西半を中心に，堀切内全体から土師質土器（皿）が出土した。また，堀切部西半の底面付近では五輪搭（火輪）なども含む礫が集中して検出され，その間から完形の土師質土器（皿）が出土した。

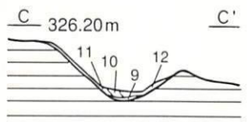


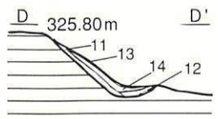
遺物出土状況（1：40）











1 淡黄褐色土（粒子小）　2 暗褐色土
3 灰褐色土　4 褐色土（赤味を強く帯びる）
5 淡褐色土　6 褐色土
7 淡灰褐色土　8 褐色土（真砂土を含む）
9 暗黄褐色土　10 褐色土（真砂土を含む）
11 褐色土（真砂土を含む。赤味を帯びる）
12 黄褐色土（粒子小）　13 黒褐色土
14 黄灰褐色粘質土

0　6m

第21図　堀切２・土墨１　土墨２実測図（１：150）

土塁

土塁１（第21図，図版11－３）

堀切２と一連の土塁である。流出が激しく現状ではわずかな高まりとなっていた。遺構は平坦面２西側斜面，堀切２の食違い状屈曲部の南側に沿って検出した。平坦面２の西端から約2.7m下がったところが起点で，現存長約10m，基部の幅1.4～2.6m，上部幅0.8～1.2m，高さは平坦面２西側斜面から約0.4m，堀切２の底面から約１mである。土塁の延長が西側の急傾斜部では確認できなかったことから，緩傾斜部の防御のために造られたと考えられる。なお，築造に際して版築はなされていない。

土塁２（第21図，図版11－３，12－１）

土塁１と同様，堀切２と一連の土塁である。現状では平坦面３の西寄りに一部残るだけだが，平坦面３東端付近で，土塁の基部の幅だけ残すようにして平坦面６と堀切２が設けられていることから，この部分にも土塁があったと推測され，本来は平坦面３の南辺全体に築かれていた可能性がある。現存長約6.8m，基部の幅約2.3m，上部幅0.3～0.8m，平坦面３からの高さ約0.5m，堀切２の底面からの高さ約1.2mである。先述したように，平坦面３の南辺全体にわたり築かれていたとすれば，全長は約35mになる。なお，土塁１同様築造に際して版築はなされていない。

土塁１・２とも遺物の出土はなかった。

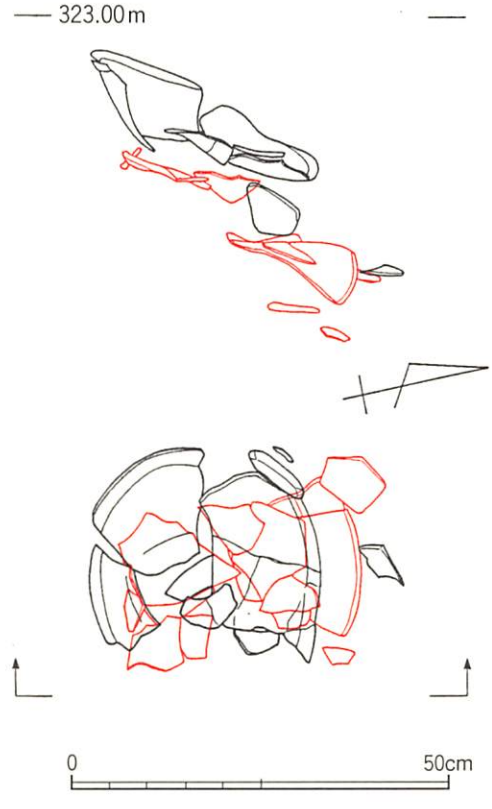
平坦面６（第18・22図，図版13）

平坦面３の南東隅に接するようにある小平坦面である。幅約７m，奥行約1.5mの細長い台形状で，面積は約23m²，平坦面３との高低差は約1.2mである。造成は，削り出した土を前方に拡張するように盛って造られたと考えられる。

平坦面は城外を通る道と堀切２を利用した堀内道の分岐点付近にある。また，土塁２の延長と考えられる部分が平坦面６と堀切２の連絡を妨げないように平坦面６南辺の中央付近で終わっている。こうした位置関係から，城への入口部分の守りを主な目的として造られた平坦面と考えられる。

平坦面内からは，遺構は検出されなかった。

遺物は中央斜面際から瓦質土器(鍋)が２点重なり合うように出土した。周辺から20cm程度の石を数個検出したため，石組の竈などがなかったか精査したが，竈の存在を推測できるものは確認できなかった。



第22図　平坦面６遺物出土状況実測図（１：10）

4　平坦面４（第23図，図版２－１）

平坦面１の南側に存在する。幅約16m，奥行約６mの斜面下方に向かって閉じる弧状の平坦面で，面積は約82㎡，平坦面１との高低差は約５mである。現状では，神社跡の前面は開けていたが，側面及び背面は雑木が生い茂っていた。この平坦面では，他の平坦面と連絡する通路が確認できなかった。ただし，後述する神社への参詣道が，城の南側のふもとからから通じている。

造成は，土層観察から，削り出した土を前方に拡張するように盛って造られたと考えられる。版築などはなされていない。

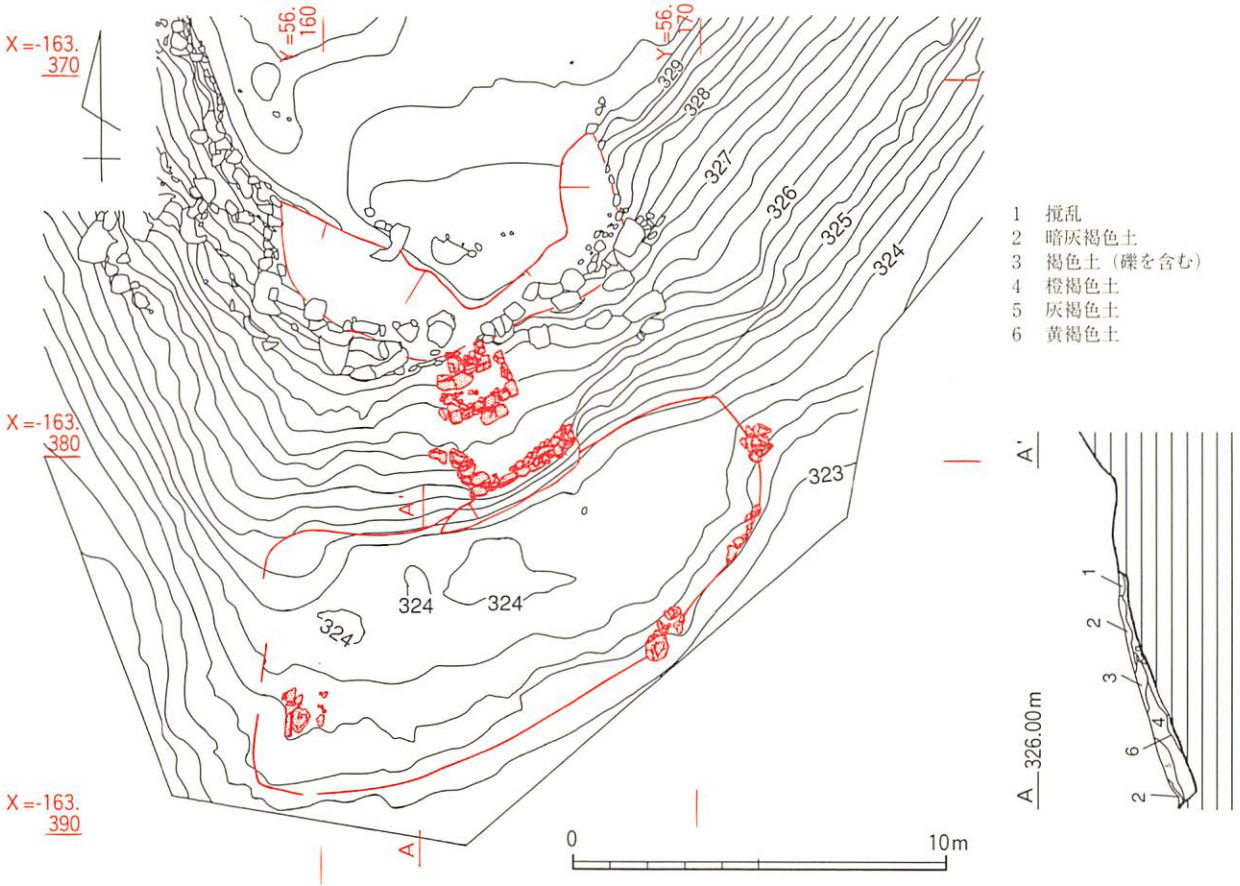
平坦面内からは神社跡が検出され，遺物は神社跡周辺から土師質土器(皿)が出土した。

神社跡（第24図，図版12－３）

平坦面４及びその周辺から，基壇，石垣，石列を確認した。基壇は，ダム建設に伴い移転するまで伊勢信仰に関わる小祠が鎮座していたものであり，石垣，石列も基壇と方向を揃え，小祠と関連性が深いものととらえて一連のものとして神社跡とした。

基壇は平面１からの急傾斜面に接し，石垣を伴う整地部分に築かれている。平面形は一辺約１mの正方形，高さは約0.8mで，50㎝以上の石材を多用し，ほぼ垂直に築かれている。

石垣は２段に分かれている。上の段の石垣は整地及び区画のためのもので，前面約２m，東側



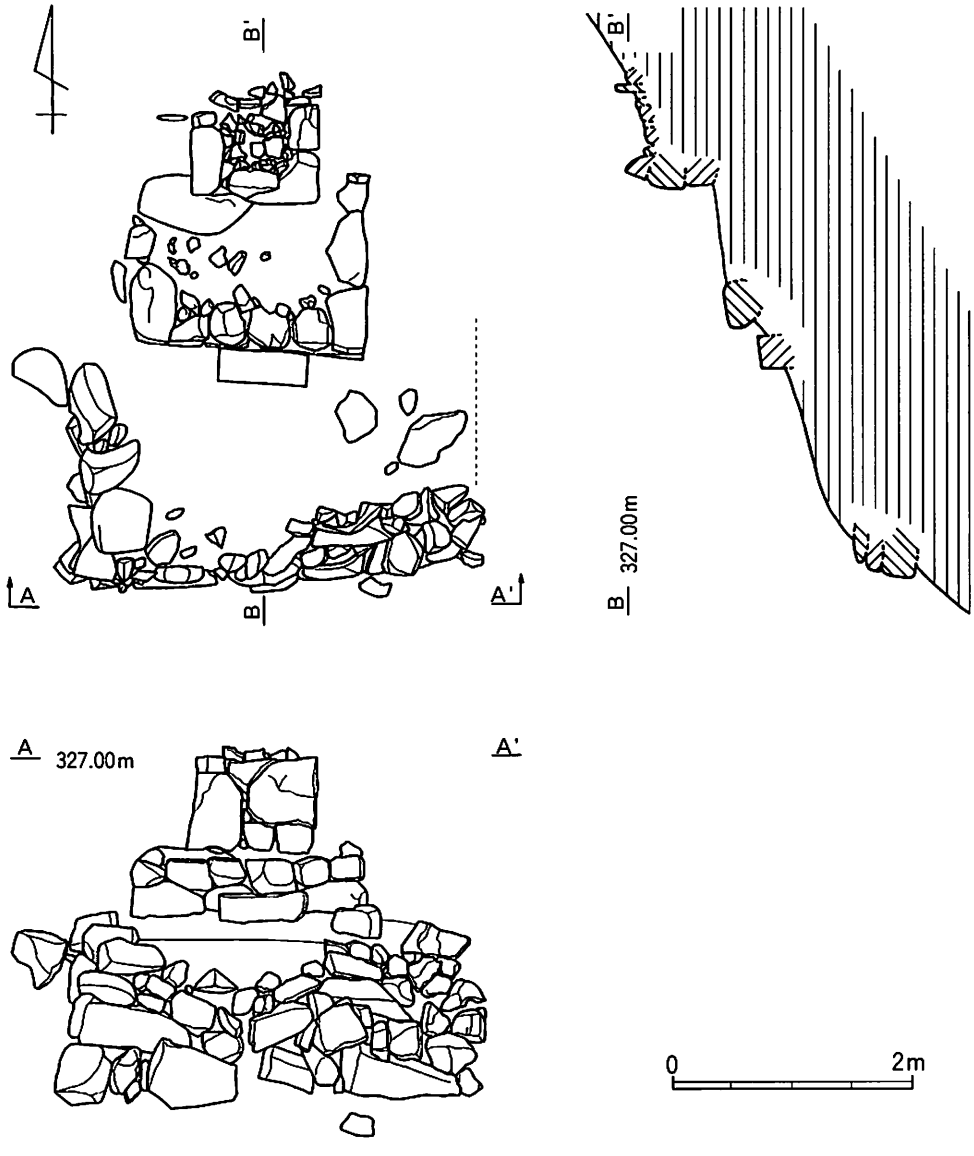
第23図　平坦面４遺構配置図（１：200）　※アミ目は神社跡とその関連遺構

約1.5m，西側約１mの石垣で１辺約２mの正方形を区画している。高さは約0.4mで，積み方は加工された石材を用いた布積である。下の段の石垣は，整地及び祠前の空間を確保するために築かれたと考えられる。前面中央部分が一部崩落している。幅約3.3m，奥行約1.8mの「コ」字状に配され，高さは約1.2mである。積み方は不揃いの自然石が用いられた乱積である。

平坦面の前面付近からは石列を検出した。石垣とほぼ方向が揃っているため社域を区切る石列と考えられるが，平坦面の前面ラインに沿っていることから，平坦面に伴う石垣である可能性も残る。石材には約20cm程度の自然石が使用されている。

神社跡の各遺構は使用石材や構築方法が平坦面の石積と異なり，規格性があり，技術的にも進んだ形態を見せることから，城よりも後世に築かれたものと考えられる。

遺物は，基壇周辺から土師質土器（皿）が出土した。



第24図　神社跡実測図（１：50）

5　北東区（第26図）

平坦面３の北側に存在する。現状は草原で，近年まで畑として利用されていた。

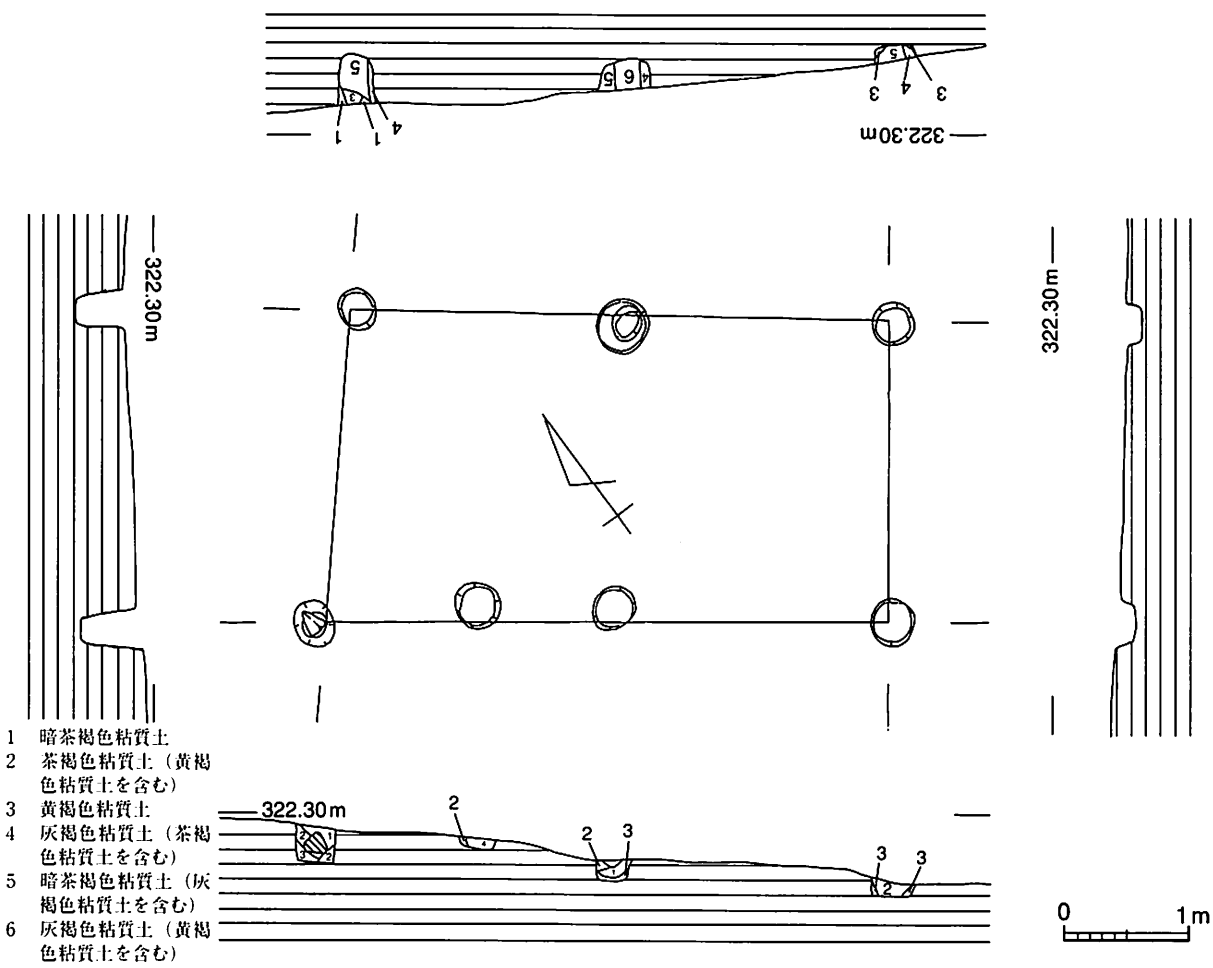
調査開始時は範囲内に堀切などの存在の可能性があり，城域としていたが，調査の結果，城と明確な関連性を持つ遺構・遺物が検出されなかった。広さは南北約50m，東西約40mである。平坦面３との高低差は平坦面３の北端付近で約0.4m，南東端付近で約3.3mである。遺構面は耕作土及び間層を除去して露出させた基盤面である赤褐色粘質土である。

遺構は掘立柱建物跡１軒（ＳＢ１），性格不明遺構１基（ＳＸ１），埋甕遺構を検出した。遺物の出土はなかった。

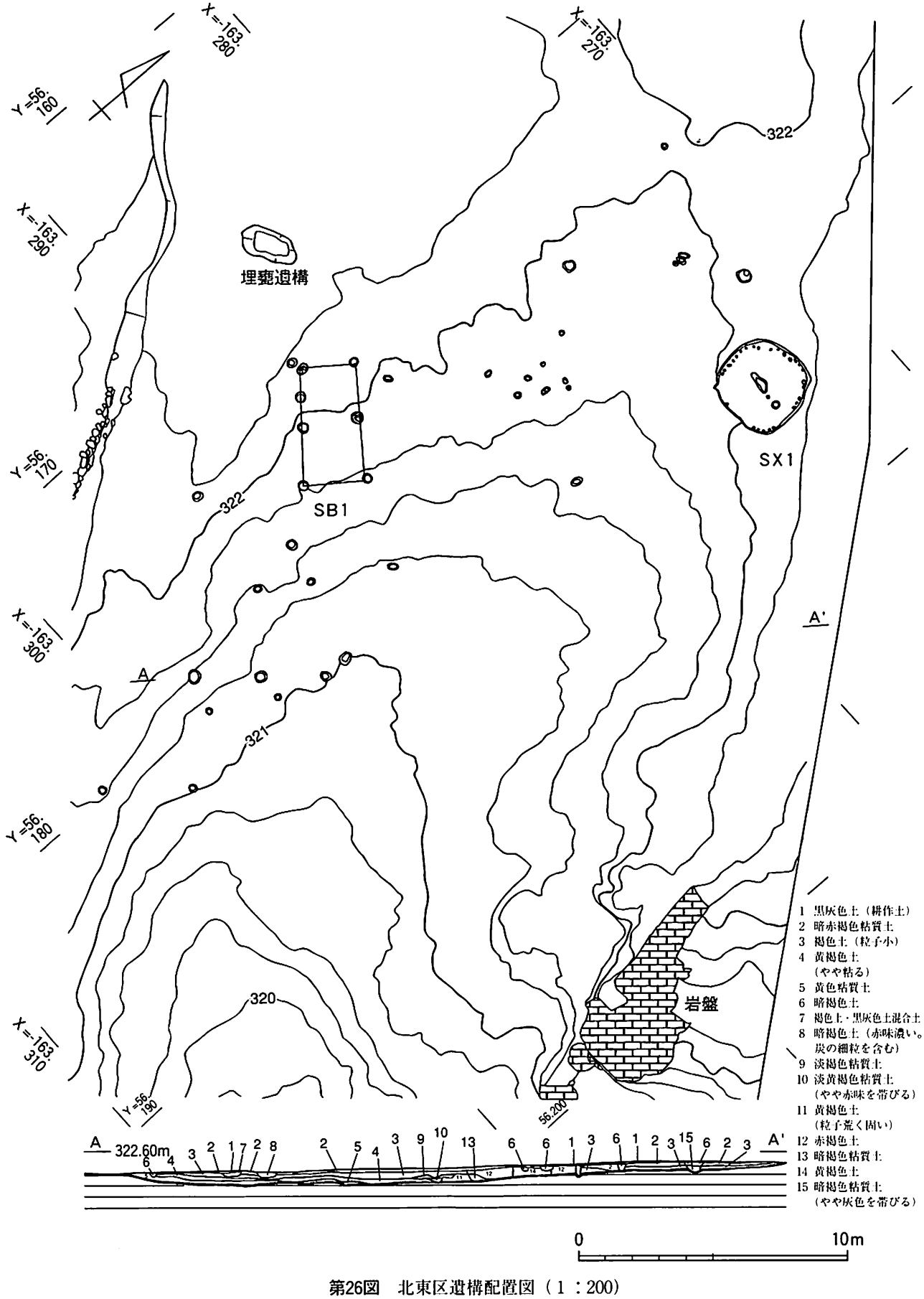
掘立柱建物跡

ＳＢ１（第25図，図版14－１）

区内西半に存在する。桁行の方向はN65°W，桁行２間（4.35m，4.5m）×梁行１間（2.4m，2.5m）の建物で，柱穴の間幅は2.1～2.3m，面積は約11.1㎡である。柱穴はいずれも素掘りで，径0.3～0.35m，深さは0.15～0.4mで，底面のレベルは斜面下方にあたる東側がいずれも低くなっている。なお，西側角の柱穴には約20cmの礫が入っていた。



第25図　ＳＢ１実測図（１：60）



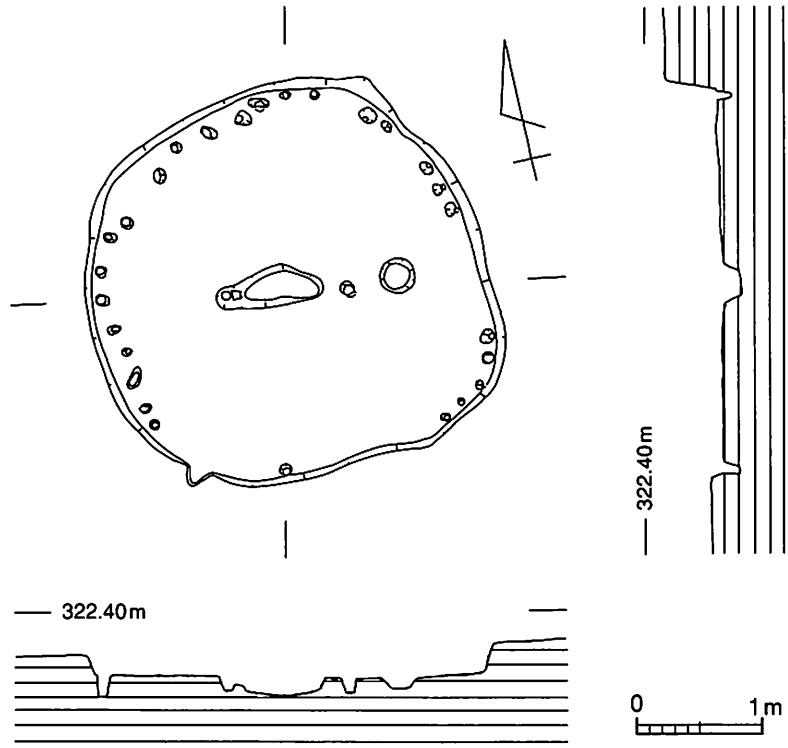
第26図　北東区遺構配置図（1：200）

柱穴内及び遺構周辺からの遺物の出土はなかった。

性格不明遺構

ＳＸ１（第27図，図版14－２）

区内北西部に存在する。直径約3.3mの円形，あるいは一辺約３mの隅丸方形で，面積は約8.4m²，深さ約0.5mである。中央に炉穴状の掘りこみが，その両側には２個のピットが，側壁際には小ピットが並ぶ，一見すると２本主柱穴の竪穴住居跡状の遺構である。



第27図　ＳＸ１実測図（１：60）

しかし，中央のピットは側壁のピットよりも径，深さとも規模が小さく，覆屋全体を支える主柱穴とは考えにくいこと，側壁際のピットは概ね内傾して掘られていることから，円錐状に寄り掛かり合うように垂木尻を据えて，中央の２本柱で仮に固定するような構造の覆屋であった可能性が高い。また，垂木尻が竪穴内にある，いわゆる「伏屋Ａ式」の構造で[(1)]，土で屋根を覆わない限り雨水が竪穴内に入るが，土屋根にした痕跡がない。つまり長期間の使用を考慮に入れていない一時的な建物を想定することができる。

一方，遺構の埋土は，橙褐色の小焼土ブロック，炭，黒灰色灰，赤褐色土が複雑に入り混じっており，遺構内で何かが燃えた後，人為的に攪拌されたことがうかがえる。一方，現地では自宅から離れた場所で耕作を行う場合，耕作地の近くに「ハンヤ」と呼ばれる仮小屋を建て，その中で草木を燃やして灰を肥料とする作業が恒常的に行われ，その際には鋤や鍬などで灰と土をよく混ぜてから使用したとの聞き書きを得た。

以上の点をあわせ考えると，この遺構は「ハンヤ」跡であると考えられる。なお，検出面と現在の耕作土層の間に間層があることから，現耕作面とは関係がなく，時期は不明だが，この場所を開墾する時に設けられたものと考えられる。また，城跡との関連性も不明である。

遺構内からの遺物の出土はなかった。

註

（１）宮本長二郎「日本原始古代の住居建築」 1996年　中央公論美術出版　110頁

V 遺 物

（1）土器・陶磁器（第28，29図，図版15，16）

土器類としては，弥生土器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・国産陶器・中国産磁器・国産磁器などが，遺物収納用コンテナ２箱出土している。資料の時期としては中世のものが大部分を占めるが，弥生時代から古墳時代にかけてものや，近世以降のものも少量含まれている。

１～５はＳＫ４から出土した土師質土器で，１～４が皿，５が杯である。いずれも焼成が悪く，器表面が荒れて調整が不明瞭であるが，底部は回転糸切りによって切り離されたと思われる。

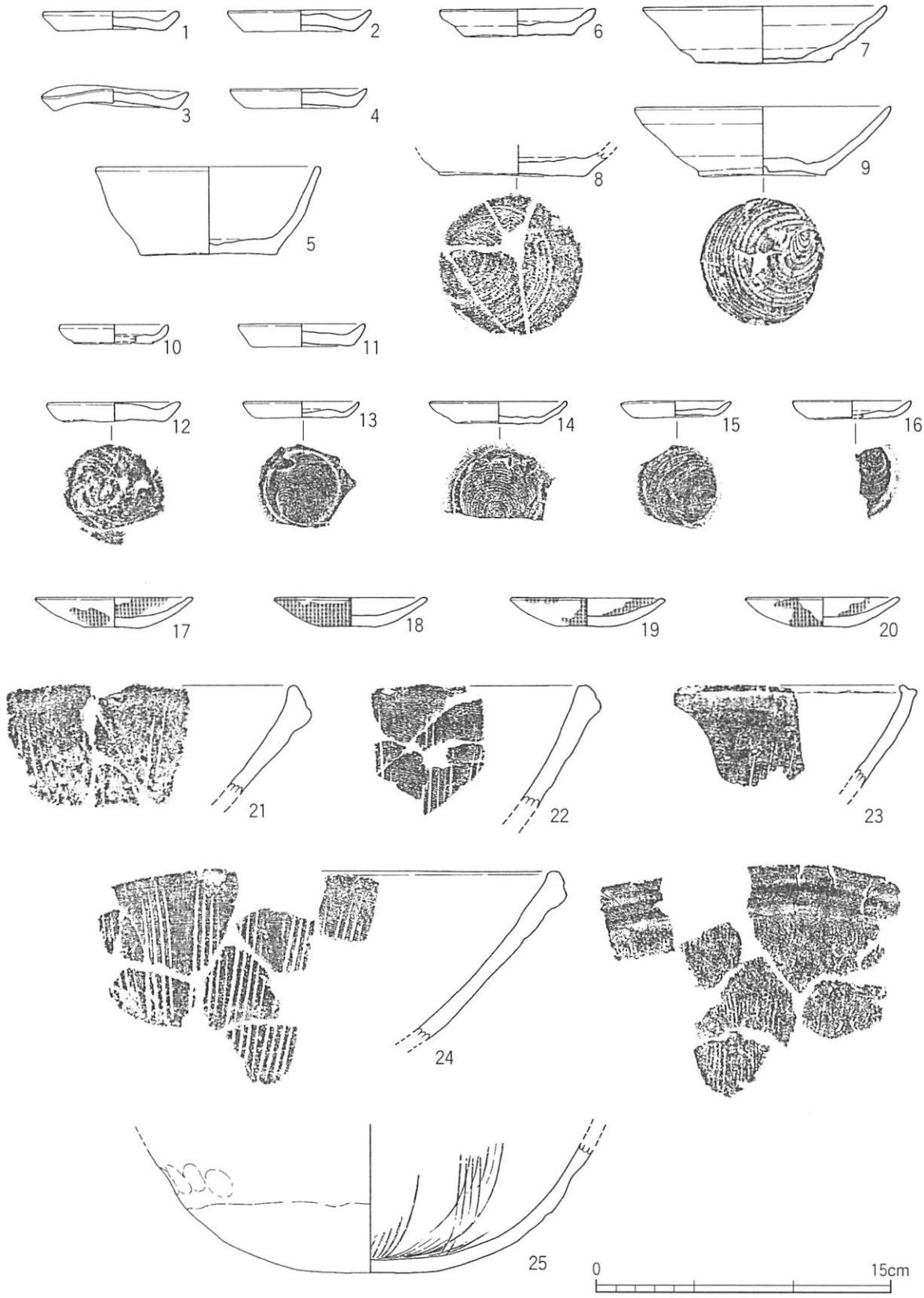
６～９は堀切２から出土した土師質土器の皿で，いずれも底部には回転糸切り痕を残す。６・８・９は胎土に細かい砂粒を多く含み，淡褐色を呈する。焼成はやや甘い。７は焼成が悪く，淡黄白色を呈する。

10～16はいずれも底部に回転糸切り痕を残す土師質土器の皿である。10・11は堀切１，12はＳＫ６，13は平坦面１，14～16は平坦面４から出土したものである。このうち10・13・15・16は形態・胎土が類似するもので，比較的きめ細かい赤褐色の胎土をもち，薄手に作られている。

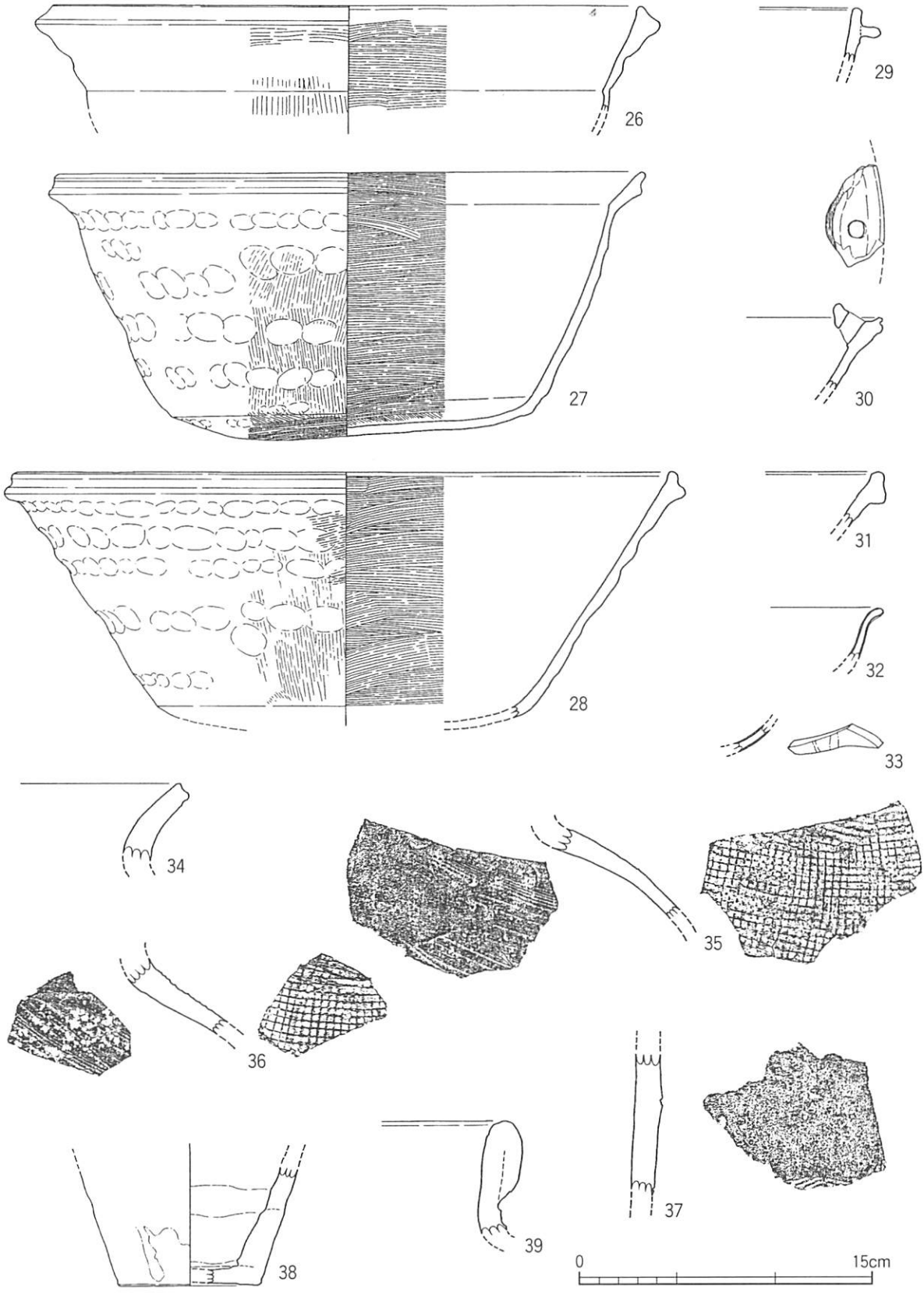
17～20は平坦面４の小祠跡周辺から出土した土師質土器の皿である。緩く湾曲する体部に，直径2.8cmほどの狭い底部をもつ。底部には切り離しの痕跡がなく，型作りによって成形し内面を回転ナデによって調整したものと考えられる。小祠跡周辺での祭祀に利用したもので，内外面に煤が付着する。砂粒をあまり含まない精良な胎土で作られ，淡黄褐色を呈する。

21～25は瓦質土器の擂鉢である。21・22・24は断面形を三角形に拡張させる類似した口縁部をもつ。いずれも体部内面に横方向，体部外面に縦方向のハケ目調整を施し，内面には５本を単位とする放射状の条線が刻まれている。23は口縁部を内側に突出させるやや薄手の擂鉢口縁部の破片である。25は丸底の擂鉢底部の破片で，内面には５本を単位とする交差する条線が刻まれる。21・22・24は平坦面１，23は平坦面３，25は堀切２からの出土である。

26～30は瓦質土器の鍋で，口縁部の形状にはいくつかのタイプがある。ほとんどの鍋は器表面が黄褐色を呈し，土師質焼成のように見えるが，これらは二次的な加熱によって黄褐色を呈するようになったものと考えられ，本来は瓦質焼成であった可能性が高く，ここでは瓦質土器として紹介する。26は口縁部を外側に折り返し，端部を肥厚させるもので，内面に横方向，外面に縦方向のハケ目調整を施す。体部外面には煤が付着する。27は口縁部を外側に折り返し，先端部外面を段状に拡張させるものである。底部は平底に近く，体部内面に横方向，体部外面に縦方向のハケ目調整を施す。外面全体と内底面の一部には煤状の炭化物が付着する。28は口縁部を折り返さず端部を拡張させるもので，体部内面に横方向，体部外面に縦方向のハケ目調整を施す。底部を欠くが，ほぼ平坦な底部が続くものと思われる。体部外面には部分的に煤が付着する。29は口縁部外面に鍔状の突帯を水平にめぐらせるものである。突帯部より下位には煤が付着する。30は口縁部内側に水平方向の内耳を貼り付けるもので，他遺跡の類例から，本来は２つの孔が並ぶもの



第28図　出土土器実測図１（１：３）



第29図　出土土器実測図２（１：３）

と考えられる。26・30は平坦面３，27・28は平坦面６から出土したもので，29は表採資料である。

31は平坦面３から出土した東播系須恵器の擂鉢である。口縁端部を拡張させ，拡張部分の外面は自然釉によって暗緑色の光沢がある。細砂を含む胎土で灰色を呈し，焼成は堅緻である。

32・33は中国産青磁碗の破片である。32は龍泉窯系青磁の端反碗口縁部で，淡緑色の釉にわずかに貫入が認められる。33は龍泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗の体部の破片である。胎土は白色，精緻なもので，淡緑色の釉がかかる。

34～36は亀山の壺でいずれも平坦面１から出土した。34は口縁部，35・36は頸部直下の破片である。外面には格子叩きが施され，内面の当具痕は板状工具によって磨り消されている。灰白色を呈し，やや瓦質に近い焼成である。図示したもののほかに，壺の体部の破片が数点出土しており，いずれの破片も胎土や色調，調整手法が類似しており，同一個体の可能性が高い。

37は常滑の甕の体部の破片と考えられる資料である。砂粒を多く含む胎土で茶灰色を呈し，外面の下端には押印の一部が認められる。

38は瀬戸の灰釉瓶子底部の破片である。灰白色の胎土に緑黄色の釉がかかる。このほかに櫛描文のめぐる肩の部分の小片も出土しており，同一個体の破片かと思われる

39は備前の甕の破片である。口縁を折り返し扁平な玉縁を形成するもので，体部の破片も数十点近く出土しており，本来は同一個体であったと考えられる。

以上に紹介した土器・陶磁器の多くは，中世の山城に関連すると考えられる資料であるが，大きくは14世紀代の南北朝期と15世紀後半から16世紀にかけての戦国期の二つの時期に分かれることが指摘できる。

まず，南北朝期の資料としては，31の東播系須恵器，33の青磁碗，34～36の亀山壺，37の常滑甕，38の瀬戸灰釉瓶子などが挙げられる。比較的年代が確定しやすいのは31の東播系須恵器の擂鉢や34～36の亀山の壺などで，14世紀の前半代を想定することができる。鎬蓮弁の青磁碗や瀬戸瓶子のように13世紀にまで遡る可能性のあるものも含まれているが，14世紀代に残ることはよくあることで，全般的には14世紀前半から中頃の時期に廃棄されたと考えてもいいだろう。

また，ＳＫ４から出土した土師質土器は，５のように器高の高い杯形のものが含まれており，今回出土した資料のなかでは古い様相を示している。さらに，29の瓦質土器鍋も戦国期の資料にはあまり含まれないもので，これらも南北朝期の資料に含まれる可能性が高い。

戦国期の資料としては，21～25の瓦質土器擂鉢，26～28・30の瓦質土器鍋，32の青磁碗，39の備前甕などを挙げることができる。39の備前は間壁編年によるⅣ期に相当するもので，15世紀後半を中心とする時期が想定できるだろう。瓦質土器擂鉢・鍋は県内の戦国期の遺跡に類例があり，15世紀末から16世紀にかけての時期が想定できる。これらに並行する土師質土器としては堀切２から出土した６～９の皿を挙げることができるだろう。

なお，17～20の土師質土器皿は型作りである点から，近・現代の資料かと思われる

註

（1）間壁忠彦『備前焼（考古学ライブラリー　60)』ニューサイエンス社　1990年

表1　出土土器一覧表

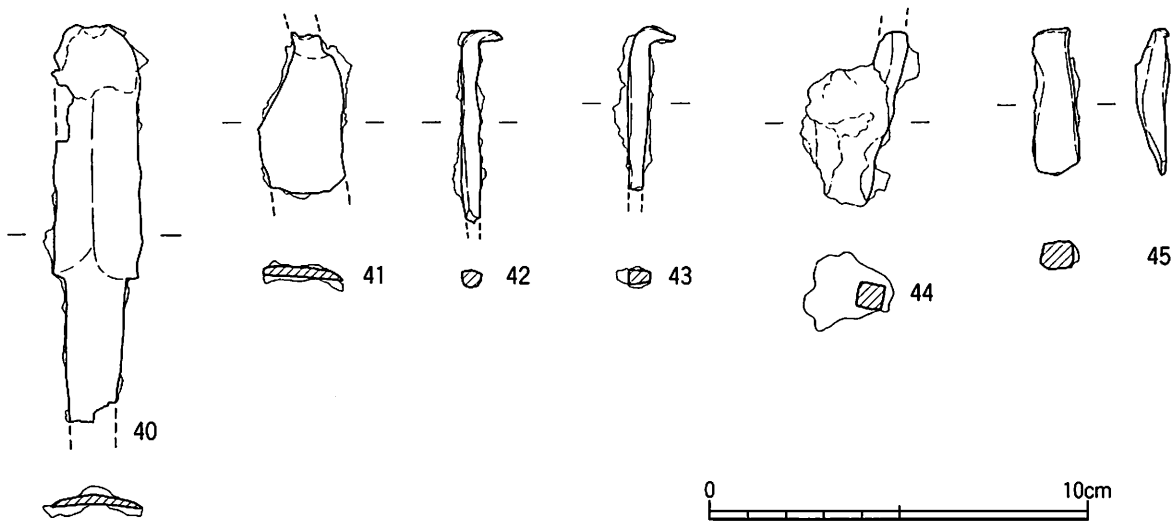
挿図番号	遺物番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土地区
第28図	1	土師質土器	皿	6.6	1.2	5.7	ＳＫ４
第28図	2	土師質土器	皿	7.2	1.2	5.6	ＳＫ４
第28図	3	土師質土器	皿	7.5	1.4	6.0	ＳＫ４
第28図	4	土師質土器	皿	6.9	1.0	5.5	ＳＫ４
第28図	5	土師質土器	杯	11.4	4.5	6.9	ＳＫ４
第28図	6	土師質土器	皿	7.9	1.4	5.5	堀切２
第28図	7	土師質土器	皿	12.4	2.9	6.9	堀切２
第28図	8	土師質土器	皿	－	－	7.3	堀切２
第28図	9	土師質土器	皿	13.0	3.5	6.5	堀切２
第28図	10	土師質土器	皿	5.6	2.0	4.1	堀切１
第28図	11	土師質土器	皿	6.4	2.2	5.1	堀切１
第28図	12	土師質土器	皿	6.8	1.0	5.2	ＳＫ６
第28図	13	土師質土器	皿	5.9	0.8	4.6	平坦面１
第28図	14	土師質土器	皿	7.0	1.1	4.2	平坦面４
第28図	15	土師質土器	皿	5.6	0.9	6.1	平坦面４
第28図	16	土師質土器	皿	6.0	0.9	4.2	平坦面４
第28図	17	土師質土器	皿	8.0	1.5	2.8	平坦面４
第28図	18	土師質土器	皿	7.8	1.5	2.7	平坦面４
第28図	19	土師質土器	皿	7.9	1.5	2.8	平坦面４
第28図	20	土師質土器	皿	7.9	1.5	2.8	平坦面４
第28図	21	瓦質土器	擂鉢	－	－	－	平坦面１
第28図	22	瓦質土器	擂鉢	－	－	－	平坦面１
第28図	23	瓦質土器	擂鉢	－	－	－	平坦面３
第28図	24	瓦質土器	擂鉢	－	－	－	平坦面１
第28図	25	瓦質土器	擂鉢	－	－	－	堀切２
第29図	26	瓦質土器	鍋	31.8	－	－	平坦面３
第29図	27	瓦質土器	鍋	31.4	13.7	－	平坦面６
第29図	28	瓦質土器	鍋	34.6	13.4	－	平坦面６
第29図	29	瓦質土器	鍋	－	－	－	表採
第29図	30	瓦質土器	鍋	－	－	－	平坦面３
第29図	31	東播系須恵器	擂鉢(こね鉢)	－	－	－	平坦面３
第29図	32	龍泉窯系青磁	碗	－	－	－	平坦面２
第29図	33	龍泉窯系青磁	碗	－	－	－	平坦面１
第29図	34	亀山	壺	－	－	－	平坦面１
第29図	35	亀山	壺	－	－	－	平坦面１
第29図	36	亀山	壺	－	－	－	平坦面１
第29図	37	常滑	甕	－	－	－	平坦面１
第29図	38	瀬戸	瓶子	－	－	7.3	平坦面１
第29図	39	備前	甕	－	－	－	平坦面１

（２）鉄製品（第30図，図版17）

平坦面１から平坦面３にかけて，18点の鉄製品が出土しているが，多くは遺構に伴うものではなく，表土層・包含層から遊離した状態で出土している。

40～43はＳＫ６から出土したもので，40・41は用途不明の鉄製品，42・43は鉄釘である。40・41はいずれも幅2.2cmほどの短冊状の鉄製品で，断面形はわずかに湾曲し，側面を薄く作るものである。40の一端には茎状の部分が付き，41の一端も幅が狭くなり，折り曲げられたような痕跡を残す。残存状況は良くなく，用途は明らかにし難いが，断面が湾曲する形態からヤリガンナの一部分の可能性も考えられる。ただし，ヤリガンナに見られる刃先の反りは認められない。42・43は断面方形の鉄釘である。いずれも一端を小さく折り曲げている。

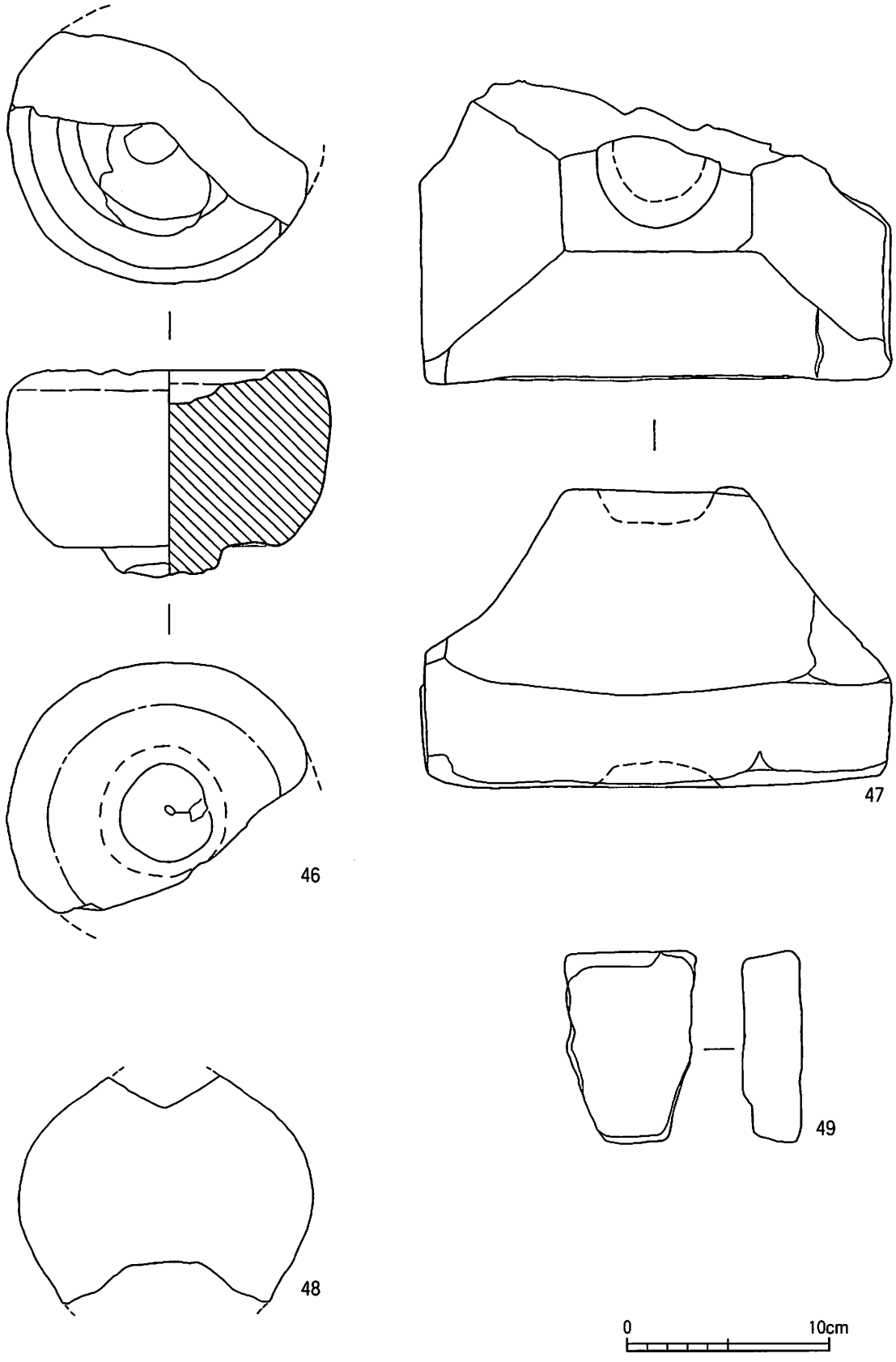
44・45はいずれも平坦面１から出土したもので，44は鉄釘。45は楔状の鉄製品である。45は，一端の厚みを薄く作り，その反対側には叩いたような痕跡が認められる



第30図　出土鉄製品実測図（１：２）

表２　出土鉄製品一覧表

挿図番号	遺物番号	名　称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土地点	備考
第30図	40	不明鉄製品	10.6	2.3	0.3	24.4	平坦面３ＳＫ６	ヤリガンナの可能性あり
第30図	41	不明鉄製品	4.4	2.3	0.3	7.6	平坦面３ＳＫ６	ヤリガンナの可能性あり
第30図	42	鉄釘	5.2	1.1	0.5×0.5	5.8	平坦面３ＳＫ６	
第30図	43	鉄釘	4.3	1.3	0.6×0.5	4.3	平坦面３ＳＫ６	
第30図	44	鉄釘	4.7	－	0.7×0.7	15.3	平坦面１	
第30図	45	楔状鉄製品	3.9	1.2	0.8	12.6	平坦面１	



第31図　出土石製品実測図（1：3）

（3）石製品（第31図，図版17）

平坦面２・３を中心に４点の石製品が出土しているが，遺構に伴うものは基壇から検出されたもののみで，その他のものは，堀切の埋土中から出土している。

46は基壇から出土したもので，五輪搭の風輪である。天地を逆にして検出した。風化が進んでおり，約1/2強が残存している。47・48はいずれも堀切２から出土した。47は西半の底面付近から出土した五輪搭の火輪で，天地を逆にして検出した。全体の約1/2強が残存している。48は東半の埋土中から出土した。全体の約1/5が残存している。現状では五輪搭の水輪としたが，残存部分が小さいため不確定で，風輪の可能性も残る。49は堀切１の埋土中から出土した。１面に磨かれたような擦過痕の残る石で，用途は不明である。

表３　出土石製品一覧表

挿図番号	遺物番号	名称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	出土地点	石材	備考
第31図	46	五輪搭(風輪)	直径(15.8)		10.2	2.2	基壇	花崗岩	
第31図	47	五輪搭(火輪)	23.1	(23.1)	14.8	6.5	堀切２	花崗岩	
第31図	48	五輪搭(水輪)	直径(13.8)		11.0	1.2	堀切２	花崗岩	風輪の可能性あり
第31図	49	不明石製品	9.4	6.4	2.9	0.3	堀切１		使用痕(擦過痕)あり

Ⅵ　まとめ

今回の福原城跡の発掘調査は，城跡の主要部分がほぼ調査対象になっており，山城の全体的構造の把握も念頭において調査を進めた。

調査の結果，丘陵先端部の尾根最高所に造成された平坦面を中心に，大小５つの平坦面が南北に存在すること，またこれらの平坦面と関連性が高いと考えられる，出入口，切岸，堀切，竪堀，土塁，石積などが要所に設けられていることが明らかになった。

以下では，福原城跡に関連するいくつかの点について触れることにする。

１　検出遺構

平坦面　調査範囲内からは大小６つの平坦面を検出した。

平坦面１は，尾根の先端付近の最高所に存在する平坦面で，四周は石積あるいは切岸となっており，北東隅には出入口が，斜面の要所には竪堀や土塁が造られるなど，立地あるいは防御能力から見ても本城跡の核となる平坦面といえよう。

平坦面２は，遺構が全く検出されていないことから，何らかの施設を建てるためよりも，城外へと通じる通路の途中に防御のために設けられたと考えられる。

平坦面３は，北辺側では城域外と考えられる北側の北東区との比高がほとんどなく，防御性が低いため郭として機能したか疑問が残る。しかし，西側に石積が築かれていること，東側は南に行く程比高も上り，南東隅付近には関連すると考えられる小平坦面（平坦面６）が存在すること，などから，やはり城の一部であったと考えたい。ただし，先述したような立地から防御以外の機能を持っていた可能性が考えられる。

平坦面４は，現状では南側の丘陵先端部から上ってくる道が通じており，この道が城が営まれていた当時から存在していたとすると，南側に対する防御の役割を持って作られたと考えられる。

ただし，先述したように平坦面１との間は急傾斜で，比高差もあり，かつ連絡路も確認できないなど，連携性がかなり低いことから，捨郭的な性格を持つ可能性がある平坦面である。

平坦面５・６はいずれもごく規模の小さい平坦面であるが，配置を見ると，平坦面６は城内への入口付近に，平坦面５は平坦面１を囲む斜面の中で守りの手薄な出入口側面下方にあることから，いずれも防御力の強化という目的の下に有効な場所に配されていることがうかがえる。

なお，広島県教育委員会の中世城館遺跡総合調査では，平坦面４の南約30mの位置に，城の一部の可能性がある平坦面（現在水田）が存在すると記されている[1]が，試掘調査及び実地踏査で城の構成要素であるという痕跡が確認できなかったため，本調査の対象としなかったことを付しておく。

出入口　福原城跡では出入口が明瞭に検出できたことも特徴の一つである。平坦面１の北東隅に作られた出入口から，平坦面１と２の間にある小平坦面までは直坂である。小平坦面より先は

左右に進路を取ることが可能だが，右側に進路を取った場合，通路とするには傾斜が急な部分があることと，10m程下った部分より先で通路が途絶えることから，左側に折れ曲がって平坦面２へ出たと考えるのが妥当なようである。

石積　石積は平坦面１及び平坦面３で検出した。各平坦面の土層観察などから，造成土の端に基礎となる石材を置き，その上に造成と並行して石を積み上げていたことが明らかになった。手法的に未熟で，法則化された技術で築造されていないため，土留め及び障壁としての機能しか果たしていない。

石積は，城の西辺で顕著に見られ，全長約105mの50％を超える約55mに石積みがなされ，これに，石積に続く自然石の露頭や平坦面２西側斜面にある基壇なども合わせると，西辺の７割以上が石に覆われていたことになり，その視覚的効果はかなり大きかったと考えられる。そして，そのことが石積が築かれる動機の一つであった可能性が高い。

なお，本報告書では中世城館にある石で築かれた障壁に「石積」という語句を用いて近世城郭の「石垣」と区別した。中世城館にある同様のものを「石垣」とした報告例はこれまでに多数存在する。しかし，中世城館の「石積」においては，その主目的は，障壁及び造成面の土留めであるのに対し，近世城郭の「石垣」では，それらに加えて構築物の基礎としての機能も求められている。両者は原理的には共通性あるいは系統性が認められるとしても，機能及びその結果表れる形態とそれが与える視覚的効果には大きな差が存在していると考えるからである。

堀切・竪堀・土塁　本城跡で確認した堀は，堀切２条と竪堀１条である。ただし，二本の堀切から西側斜面に延長されている部分を竪堀として捉えると，竪堀は３条あるといえる。堀切は断面形を見ると浅く，かつ狭い防御力に乏しいものに映る。とりわけ堀切１は防御でなく区画のために掘られたのではないかと思えるほどである。しかし，平面的に堀切を捉えると，堀切２は，長さが単独で約41mあり，緩斜面部の竪堀を一連のものとして考えると50m以上となり，これまで県内で発掘調査された中世城館の中でもかなり規模の大きい部類に属する[(2)]。竪堀についても同様で[(3)]，調査範囲内で確認できたのは，それぞれ，竪堀が約11m，堀切１から続くものが約12.5m，堀切２から続くものが約4.5mだが，周辺地形測量図から竪堀部分の全長を推定するといずれも20m以上あったと考えられる。

土塁は，平坦面１の出入口付近の東斜面，平坦面２の西側斜面，堀切２の北辺沿いなど，高低差が小さく，防御性の低い部分に築かれており，効率よく防御力を高めている。

これらのことから本城跡は防御力が高いとは言い難いが，かなりの労力が注がれていたことがうかがえる。

石組遺構　遺構に使用された石材が他の遺構に比べ加工されたような角ばった石材が多いことから，城跡に伴わない遺構であった可能性も考えられるが，遺構の上部及び周辺から15世紀後半と考えられる備前の甕（第29図－39）が出土しており，城跡に伴う遺構と判断した。

石組遺構は内部の土層観察から，強い火力を使用したことがうかがえる。城跡で想定できる主な火の使用用途としては，炊事，かがり火などの照明及び烽火が考えられる。遺構が，風当たり

が強く炊事などの小火力の使用には適していない尾根の最高部にあること，北西風を避ける位置にある平坦面６に炊事との関連がうかがえる遺物が存在していること，推測される火の使用状況などから，石組遺構は，烽火に伴うものである可能性が妥当ではなかろうか。ただし，烽火に伴うと考えられる遺構の検出例は県内はもとより全国的にも類例が少ないため，今後の資料数の増加を待ちたい。

2　出土遺物

出土遺物としては，弥生土器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・国産陶器・中国産磁器・国産磁器などの土器類のほか，鉄製品及び五輪塔の一部などの石製品などがある。これらの出土遺物を全て合わせても遺物収納用コンテナ４箱であり，他の城跡の調査例と比べてもかなり少ない。また，遺物の内容も，当時の生活に必要な用具がセットになることはなく，その時々の必要なものだけが持ちこまれているような状況であった。

3　城の年代観

遺物　第Ⅴ章で述べたとおり，出土遺物は南北朝期及び戦国期の大きく二時期に分かれる。規模の大きい平坦面１～３ではいずれの時期の遺物も出土しているが，その他の平坦面からは，戦国期以降の遺物のみ出土している。そのほかの城を構成する遺構からの遺物は，ＳＫ４から出土した遺物は南北朝期に属するが，そのほかの遺物は，その大半が戦国期のものであり，とりわけ，堀切２の底面付近からは原位置を保っていると考えられる戦国期の遺物が出土している。また，南北朝期には在地のものに加え広範囲にわたる産地からもたらされた遺物が出土するが，戦国期には在地及び近い産地のもののみが出土する点は，同時期の山城の調査例と共通している。

遺構　福原城跡で確認された遺構の構成から見た城の年代についても触れてみたい。

福原城跡では，竪堀，堀切，土塁，石積，出入口などを検出している。小都隆氏は，広島県内の発掘された中世城館遺跡の集成・検討のなかで，城館の構成要素の変遷を明らかにしている[4]。その成果を踏まえると，福原城跡を構成する諸遺構が城の構成要素として全て揃うのは最も早くて15世紀後半，それも16世紀に近い時期である。また，16世紀後半になると，造られなくなる遺構も含まれていることから，調査で確認できた福原城跡が成立したのは15世紀末～16世紀前半にかけての時期といえよう。この年代観は，遺物から得られたものともほぼ一致しており妥当性の高いものと考えられる。

4　福原城跡の復元

以上，福原城跡の調査から得られた成果を述べてきたが，最後に本城跡の構成の復元と城の性格の推測を行って終わりとしたい。

福原城跡の構成の復元

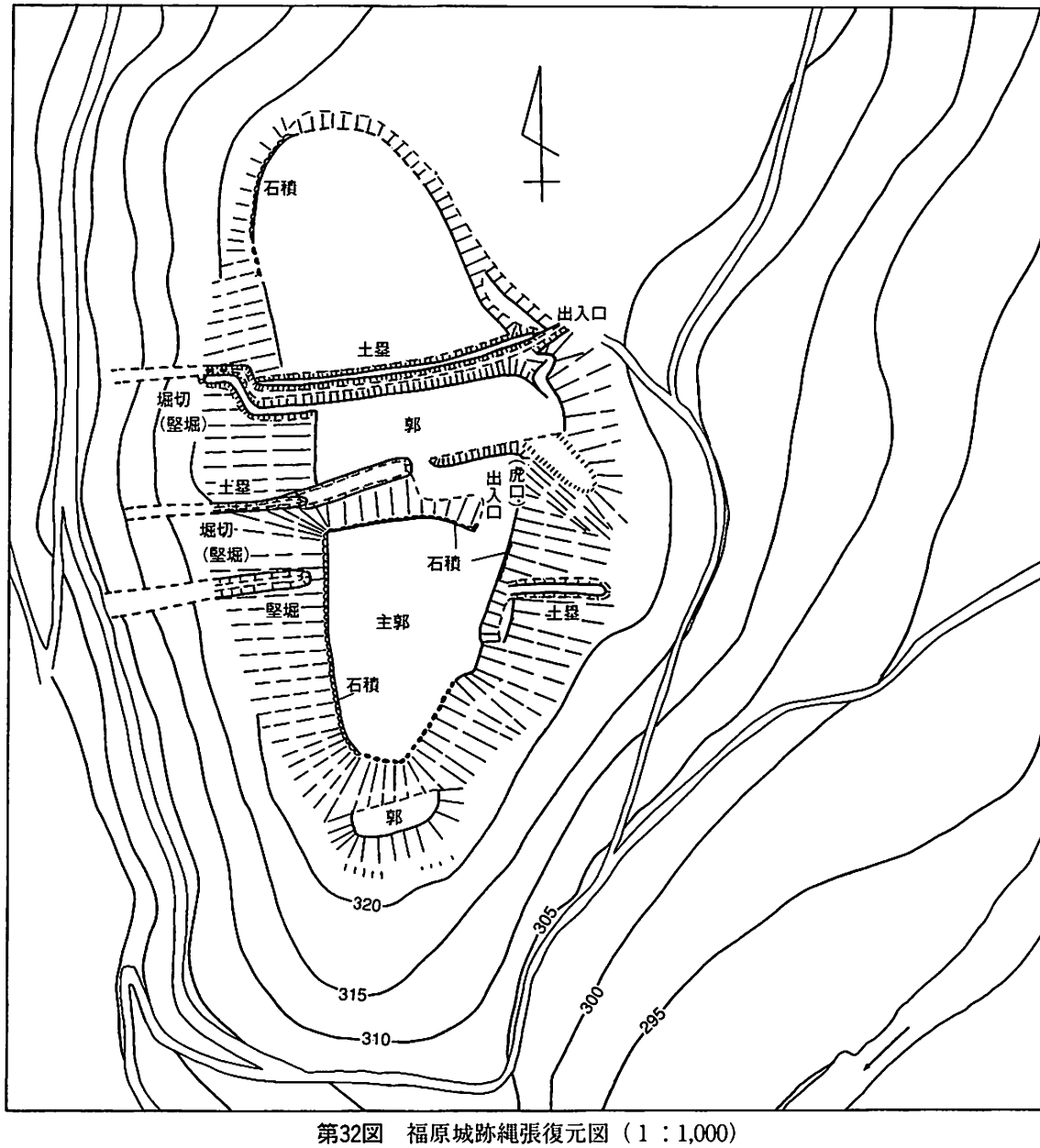
これまでに福原城跡は南北朝期と戦国期の２時期に主に利用されていたことがわかった。ここではそれぞれの時期について城の構成の復元を行いたい。

南北朝期の14世紀前半には，遺物の出土状況から平坦面１を中心に平坦面２の範囲まで利用したと推測される。ただし，遺物は，ＳＫ４以外はほとんどが平坦面１の造成土中から出土したもので，戦国期に行われた城の再築造の際埋没したと考えられる。戦国期の造成で地山が削平された面積は平坦面１の1/2程度であることから，当該期には，地形改変をほとんど行わず，地形の備え持つ防御力を利用する程度のものだったと考えられる。このように考えると南北朝期の福原城跡は平坦面１にあたる部分の地形を利用した単郭式の小規模な山城で，一時的に立てこもるためのものであったと考えられる。また，城への通路なども不明である。

戦国期の15世紀後半から16世紀前半にかけては，今回の調査で確認したほぼ全ての遺構によって福原城が構成されていたと考えられる。これらの遺構は，石積や竪堀（堀切の延長したものも含む）の配置に表されるように，西側斜面に重点的に配されている。本城跡の西側眼下を南東に流れる沼田川川沿いには，おそらく戸野と竹仁を結ぶ道が通じていたと考えられる。また，戸野方面から川沿いに北上する場合,国道375号線の通る左岸側は切り立った岸壁で通行はきわめて困難であったと考えられ，おそらくは右岸側を利用したものと推測できる。その場合，川沿いに大きく蛇行する道を通り，谷合を抜けてまず目に入るのが石に覆われ，長大な竪堀が掘り込まれた福原城跡の南側及び西側であるという視覚効果を考慮に入れて築城した意図が読み取れる。

次に，福原城跡内から検出した大小６面の平坦面の位置付けについて触れてみたい。平坦面１は四周に切岸，石積を廻らせ防御力を高めている点や位置的関係から，本城跡の主郭であろう。平坦面２は両側が堀切で区切られている点や主郭からの通路が通じている点から，郭と考えられる。平坦面３は先述した通り防御性は低いが，尾根を造成して平坦面を造り出し，西側には石積を築いていることから機能的には城の一部であったと考えるのが妥当であろう。平坦面４は遺物の出土も少なく，また，後世に小祠が築かれて改変されているため位置付けが難しいが，丘陵南端から城跡のある尾根に登ってくる道をさえぎるように築かれていることや，主郭と考えられる平坦面１との位置的関係から，根拠に乏しいものの郭であったと考えたい。平坦面５・６は共に城の防御力強化のために築かれたと考えられるが，郭とするには面積があまりに狭小なことから郭ではないが城に伴う施設であったと考えたい。このように考えると戦国期の福原城跡は，平坦面１を主郭とし，平坦面２・４が郭として利用された連郭式の城であったと想定できる。そして平坦面３は城の西側の規模や防御性を強調する，いわば示威のために造成されたものではなかろうか。

福原城跡と城外への連絡経路は，出入口の部分でふれたように，平坦面１→平坦面２とたどる。さらに，平坦面２の東端の通路を通って堀切２に降り，堀切２を堀内道として城外を通る道に出たと考えられる。城外を通る道は，調査前まで残っていた調査区の北端と東端を結ぶ道がそれにあたると考えられる。この道は，北は堀城や正覚寺のある久芳の中心部とつながり，南は丘陵を



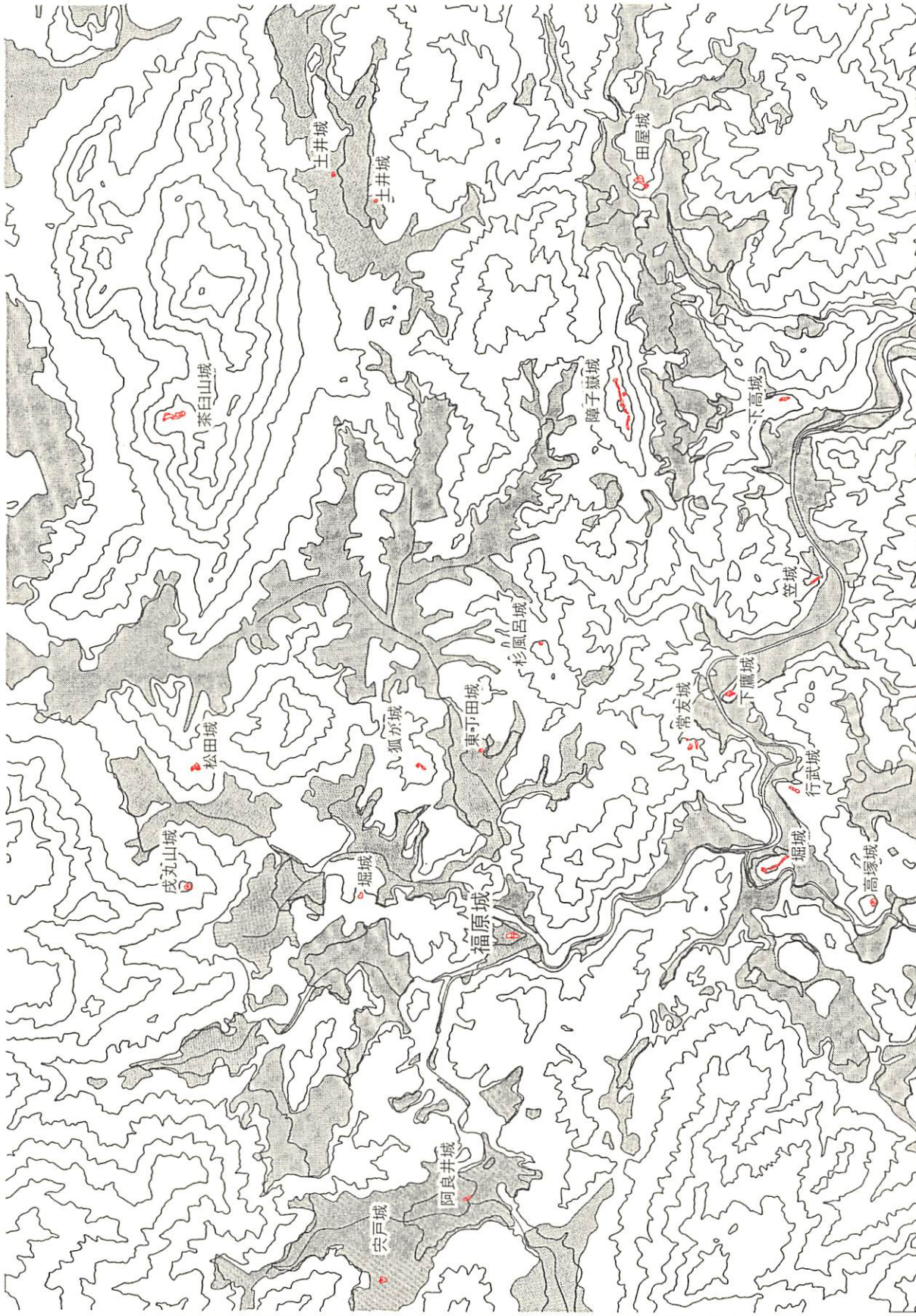
第32図　福原城跡縄張復元図（1：1,000）

斜めに下って福原城跡のある丘陵の先端付近に出た後，戸野方面とつながっていた。聞き書きによれば，主な移動手段が徒歩であった時代には，現在の国道375号線を通るよりも，よく利用されていた道であるということであり，こうした交通路の押さえの役目もかねていたと考えられる。

ただし，いずれの場合においても，遺構の防御性・規模，出土遺物の量や種類などからみて拠点となる城ではなく，いわゆる「出城」あるいは「村の城」の域を出ないと考えられる。

以上のことを総合すると，

1　福原城跡は，14世紀前半の南北朝期及び15世紀末から16世紀前半の戦国期の２時期に使用された城跡であること。



第33図　福原城跡と周辺の城跡（1：40,000）　※アミ目は現在の耕作地

2　南北朝期には平坦面１を中心とした単郭式の山城であったこと。

3　南北朝期には，築城に際してはあまり造成をせず，専ら自然地形を利用し，一時的に立てこもる程度の，いわば砦のような利用のされかたであった可能性が高いこと。

4　現在遺存している遺構の大半は戦国期に造作されたものであること。

5　戦国期には，平坦面１を主郭とした連郭式の山城であったこと。そして，城の西辺を強調して見せることを意識して，遺構の配置や造作を行っていること。

6　戦国期には，城跡の立地や城の防御施設の状況，主郭に想定される平坦面１内の石組遺構の存在，城内から出土遺物が少なく生活感に乏しい点などから，拠点としてではなく，交通の要衝を控えた物見・連絡・警備のための，いわゆる「出城」であった可能性が高いこと。

などの点が今回の調査の成果から導き出せたといえよう。

なお，本城跡の城主については，以前から地元で伝承されてきた毛利氏家臣福原氏との関連も含めて，今回の調査では明らかにすることはできなかった。

註

（１）広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書　第２集』 1994年　180頁

（２）（３）堀切・竪堀の集成は次の文献に依拠した

花本哲志「広島県の中世山城跡から検出された遺構について（３）」『研究輯録』Ⅷ　財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター　1998年　77～86頁

（４）小都　隆「発掘資料から見た城館の編年と分類」『芸備』第28集　芸備友の会　1998年　138～157頁

参考文献

（１）平井　聖・村井益男・村田修三編『日本城郭大系』別巻Ⅱ　新人物往来社　1981年

（２）西本省三・葛原克人編『日本城郭大系』13　新人物往来社　1980年

（３）飯田米秋『賀茂郡史（中世武士編）』広島ジャーナル　1984年

（４）芸備郷土誌刊行会『復刻　芸藩通志』第４巻　1973年

（５）山口県文書館『萩藩閥閲禄』第１巻～別巻　1967～1989年

付　北東区の埋甕遺構について

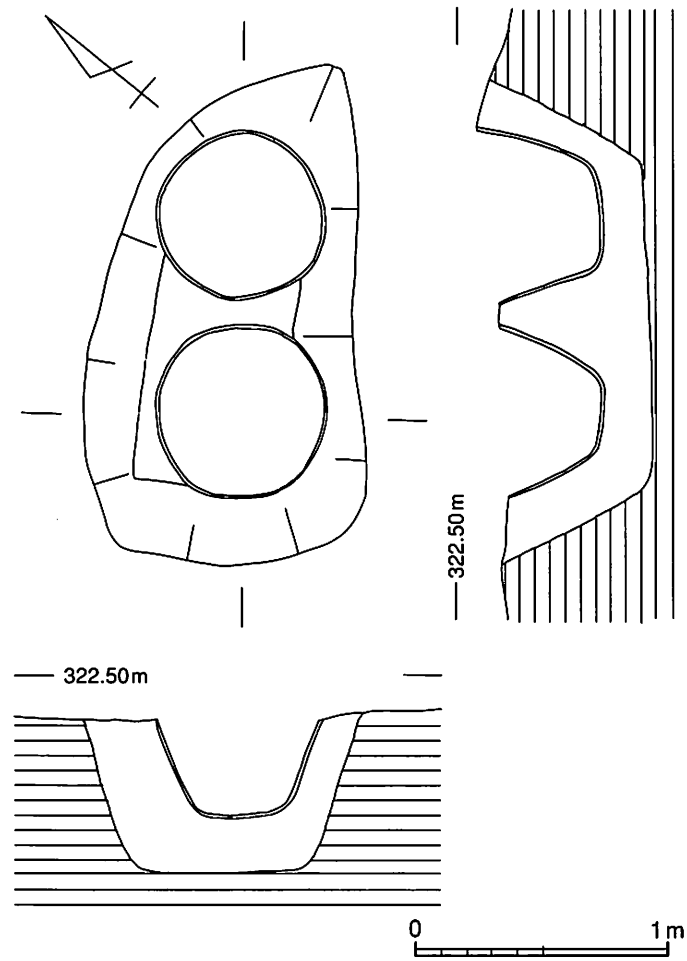
北東区西半の埋甕遺構より，２つの土師質土器甕を検出した（第26・34図，図版14－３）。検出状況から，福原城廃絶後拓かれた耕作地に伴うものと考えられる。南北約２ｍ，東西約1.1ｍ，深さ約0.6ｍの隅丸長方形の土坑に２つの甕を正立させて南北に並べて設置した状況で検出した。

50は北側から出土した。器高85cm以上，底径37cm，最大径73cmで口縁部を欠く。51は南側から出土した。器高89.5cm，胴部最大径83.7cm，口径87.6cm，底径39.8cmである。両者とも，浅い皿状の丸底で，埋設することを前提に作られたと考えられる。底部と胴部の境には明瞭な稜があり，胴部は幾分内湾しながら立ち上がる。51の口縁部の断面は逆三角形状を呈する。調整は両者とも外面がタテ及び斜めハケ目のちナデ，内面が胴部下方がタテ方向のハケ目後ナデ，色調は内外面とも黄褐色で断面内部は黒色，胎土は１㎜以下の砂粒を含み，焼成は良好である。

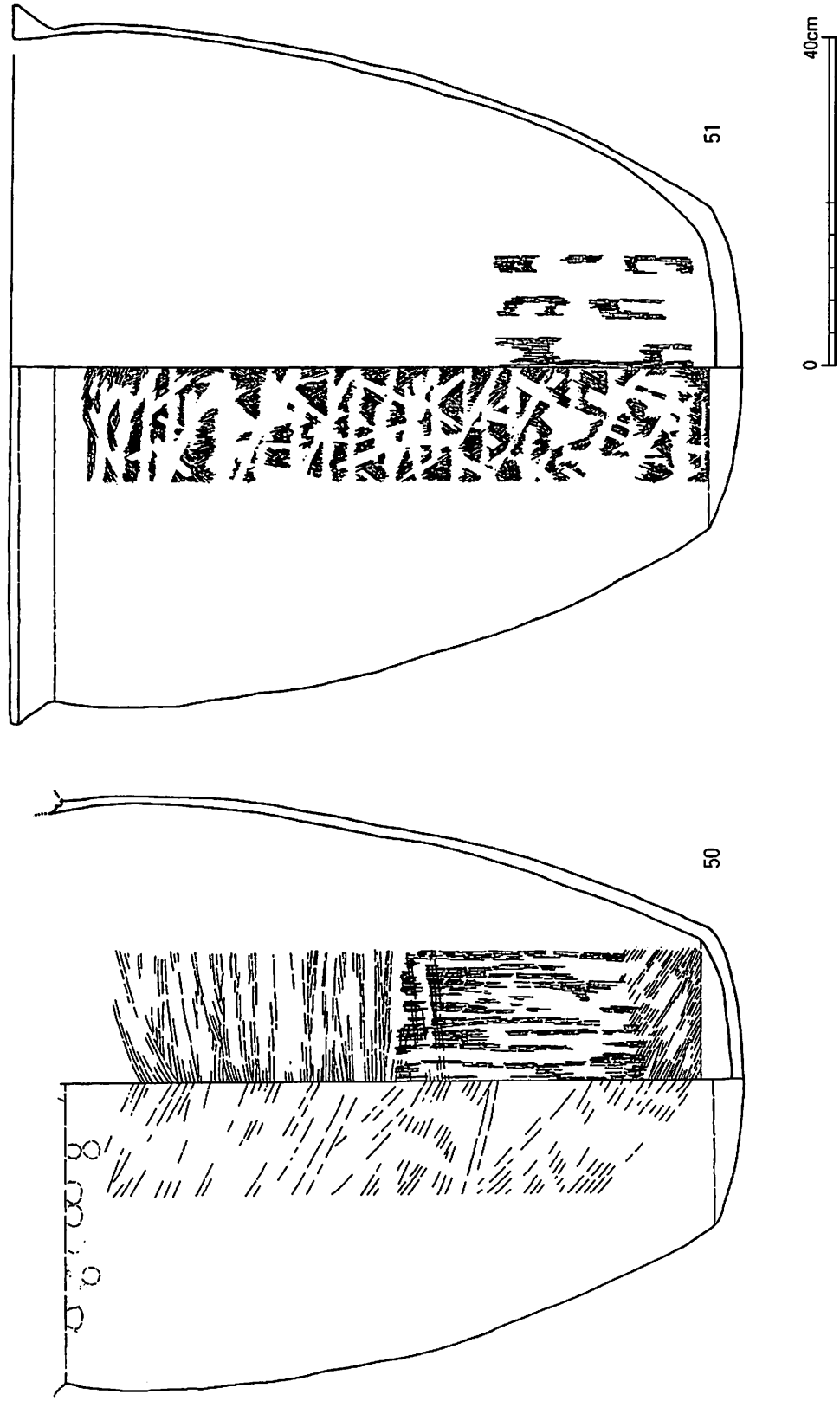
これらの甕は検出した土層から，近世以降のものと想定できる。これまでに県内各地で近世以降の埋甕遺構が60件以上確認され，うち東広島市域からは41件検出されている。県内他地域では，甕の製作手法や材質にばらつきが見られるが，東広島市周辺では，本報告例と類似した甕が使用された例が37件と多数を占める。また，大きさには一定のまとまりがあり，大まかな規格性がうかがえる（表４）。これらの点を併せると，近世の東広島市域に産地があったとするのが妥当とみられる。

この条件に合致するのが，現在の東広島市八本松町原で制作されていた「原村焼」である。「原村焼」は創業時期は不明であるが，江戸時代中期には操業していたことが『芸藩通志』の記述から伺える。明治に入っても土鍋・土瓶などが制作され，近隣で非常に重宝されたが，第二次大戦後生産は途絶えた。

以上のことから，福原城跡の２つの埋甕も「原村焼」の「はんどう」（甕の地方名）である可能性が高いと考えられる[1]。埋甕の機能については，他の報告例では，埋葬施設，屎尿関係施設，用排水施設などが想定されている[2]。福原城跡の場合は，検出状況や他の出土例[3]などから，屎尿関係施設として使用された可能性が高いと思われる。



第34図　埋甕遺構実測図（１：30）



第35図　出土土器（埋甕）実測図（1：8）

表4　東広島市内出土の近世以降の埋甕一覧

遺跡名	遺構名	法量			備考	調整		文献番号
		口径	底径	器高		外面	内面	
鏡東谷遺跡	ＳＸ02		30.0		埋甕			1
観音寺跡	トレンチ	60.0				ハケ目、ナデ	ハケ目、ナデ	2
	トレンチ		33.0			ハケ目、ナデ、指頭調整	ハケ目、ナデ	
道照遺跡	ＳＫ02	70.5	37.2	79.8	埋甕	板状工具によるナデ	板状工具によるナデ	3
	ＳＫ06		24.0		埋甕			
	ＳＫ07		26.0		埋甕、ＳＫ06と並置			
小谷黄幡遺跡	ＳＫ６	49.6	27.6	56.0	埋甕	ナデ	粗いナデ	4
	ＳＫ６	59.6	44.4	63.2	埋甕	粗いナデ	粗いナデ	
	ＳＫ12		39.0		埋甕	ナデ	ナデ	
新住西４地点遺跡	土壙９	69.7	39.0		埋甕、底部穿孔	指頭押圧	ハケ目	5
	土壙14	60.5	37.0		埋甕、底部穿孔	指頭押圧	ハケ目	
大槙１号遺跡	ＳＫ９		22.0		埋甕	粗いハケ目	粗いハケ目	6
	ＳＫ11	71.0	48.0	74.0	埋甕	粗いハケ目	粗いハケ目	
助平３号遺跡	ＳＫ２	64.8	33.4		埋甕	ヨコナデ、ナデ、ハケ目	ヨコナデ、ナデ	7
道照遺跡	ＳＫ001	63.0	33.5	64.2	埋甕	ナデ、ヨコナデ	底部に粗いハケ目、ナデ	8
	ＳＫ002		33.3		埋甕	ナデ	ハケ目	
	ＳＫ003		37.0		埋甕	ハケ目、ナデ	ハケ目、ナデ	
近信遺跡	ＳＤ１	63.0				ナデ	（不明）	9
溝口１号遺跡	ＳＫ38		40.5		埋甕	（不明）	ナデ、ハケ目	10
	ＳＫ76	66.9				ヨコナデ、指頭調整、ナデ	ヨコナデ、ハケ目、指頭調整、ナデ	
五反田遺跡	ＳＫ１	33.1	29.8		埋甕	ナデ	ナデ、指頭押圧	11
	ＳＫ１	32.0	30.0		埋甕	ナデ、口頸部に波状文	ナデ	
	ＳＫ６		21.8		埋甕	ナデ、ハケ目、指頭押圧	ナデ	
	ＳＫ７	29.6			埋甕	ナデ	ナデ	
下上戸遺跡	ＳＫ９		21.0		埋甕	ハケ目のち指頭調整	ハケ目	12
	ＳＫ14		38.6			（不明）	ハケ目のちナデ	
	ＳＫ15		49.5			ハケ目	ハケ目のち指頭調整	
	ＳＫ16		43.0		埋甕	指頭押圧のちハケ目	ハケ目	
	ＳＫ17		37.8		埋甕	指頭調整のちハケ目	ハケ目	
	ＳＫ32		39.6		埋甕	（不明）	ハケ目	
上溝上３号遺跡	ＳＫ103	58.0	42.0	52.8	埋甕	ナデ	ナデ	13
沖田１号遺跡	ＳＫ１		34.0		埋甕	（不明）	ナデ	14
	ＳＫ２		29.5		埋甕　底部穿孔	（不明）	ナデ	
	ＳＫ５		33.8		埋甕	（不明）	ナデ?	
	調査区	61.0				ナデ、ハケ目	横の板ナデ→ナデ→縦ナデ	
	調査区	58.0				ナデ	ナデ	
	調査区	59.0				ハケ目かタタキ	ヘラケズリのちナデ	

文献

1　広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「鏡東谷遺跡の調査」『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査年報』（Ⅷ）　1983年

2　広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「観音寺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅰ）　1983年

3　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「道照遺跡」『大槙遺跡群』　1985年

4　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「小谷黄幡遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅷ）　1992年

5　近畿大学「西４地点遺跡調査成果」『新住西１・４地点遺跡』　1992年

6　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大槙１号遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅱ）　1993年

7　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「助平３号遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅱ）　1993年

8　東広島市教育委員会「道照遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ　1993年

9　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「近信遺跡」『寺家城遺跡・近信遺跡』　1993年

10　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「溝口１号遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅹ）　1994年

11　財団法人東広島市教育文化振興事業団『五反田遺跡発掘調査報告書』　1994年

12　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『下上戸遺跡』　1996年

13　財団法人東広島市教育文化振興事業団『上溝上３号遺跡発掘調査報告書』　1998年

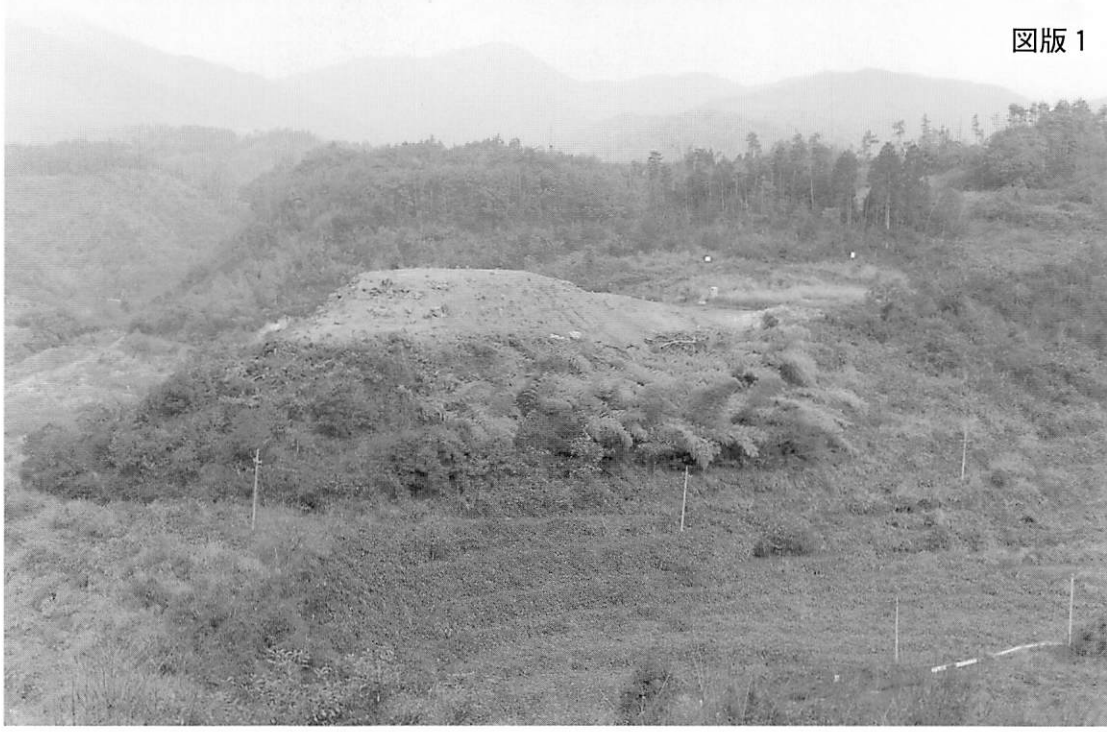
14　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『沖田１号遺跡発掘調査報告書』　2000年

註

(1) 財団法人東広島市教育文化振興事業団『五反田遺跡発掘調査報告書』1994年によると，「はんどう」の特徴として，「半球状の底部を持ち，胴部下半から広がりながらやや直線的に立ち上がり肉厚な口唇部を持つ」としている。

(2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『沖田１号遺跡発掘調査報告書』 2000年

(3) 埋甕は「Ⅰ：数十基の甕から構成するもの」と「Ⅱ：単独及び２組で構成するもの」に分類され，Ⅰは台所などの生活の場，Ⅱは厠か肥壺といった屎尿関係施設である可能性が指摘されている。
建設省中国地方建設局広島国道工事事務所・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『大槙遺跡群　西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 1985年　113頁



1　福原城跡全景
（南東から）

2　福原城跡全景
（上空西から）

3　福原城跡全景
（西から）

図版 2

1　平坦面１・４・５
（上空南西から）

2　平坦面１土留石
（東から）

3　平坦面１北石積
（北から）

1　平坦面１西石積
（西から）

2　平坦面１西石積
（南から）

3　平坦面１西石積
（北西から）

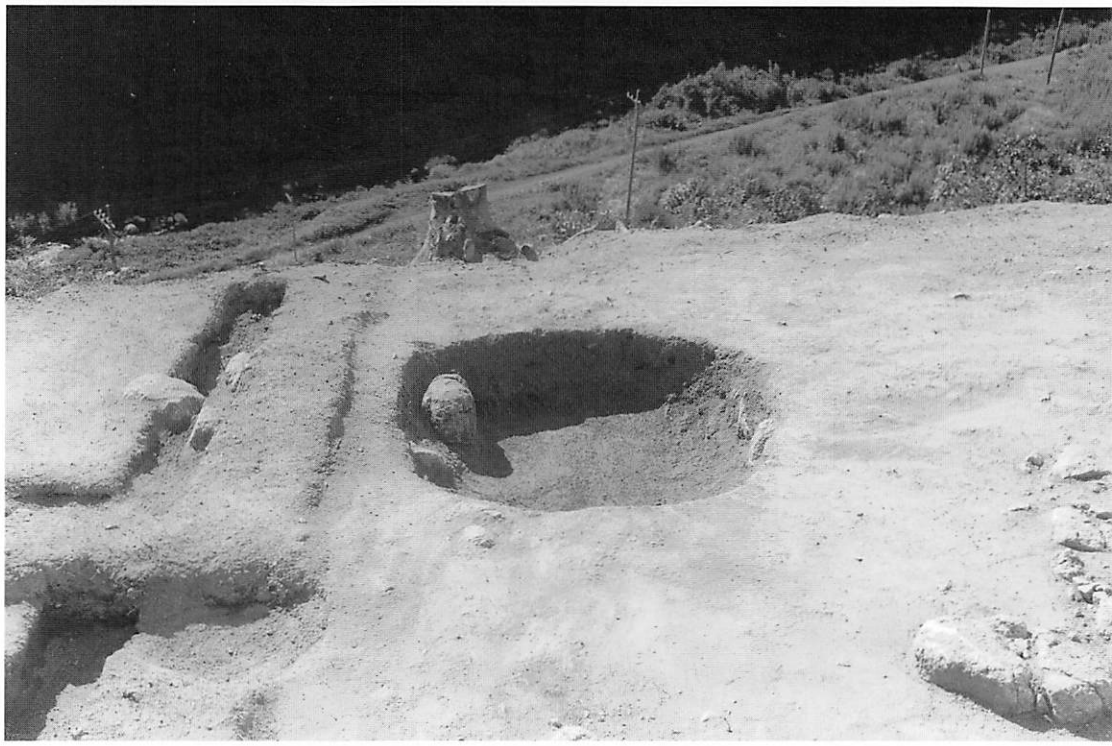
図版 4

1　平坦面 1 東石積
（東から）

2　石組遺構
（東から）

3　石列遺構検出状況
（西から）

１　石列遺構検出状況
（北から）



２　ＳＫ１
（東から）

３　土塁３
（西から）

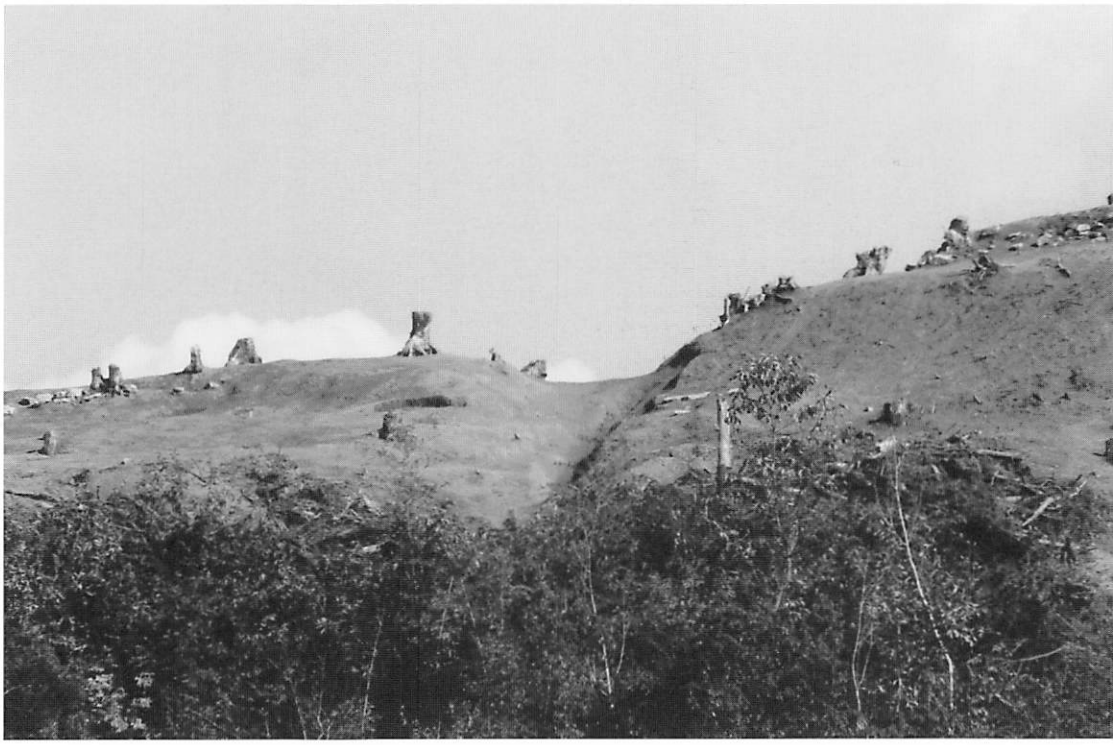
図版 6

1　竪堀
（西から）

2　平坦面 1 出入口
（北から）

3　平坦面 5
（東から）

1　平坦面 2
（上空南から）



2　堀切 1
（西から）

3　堀切 1
（東から）

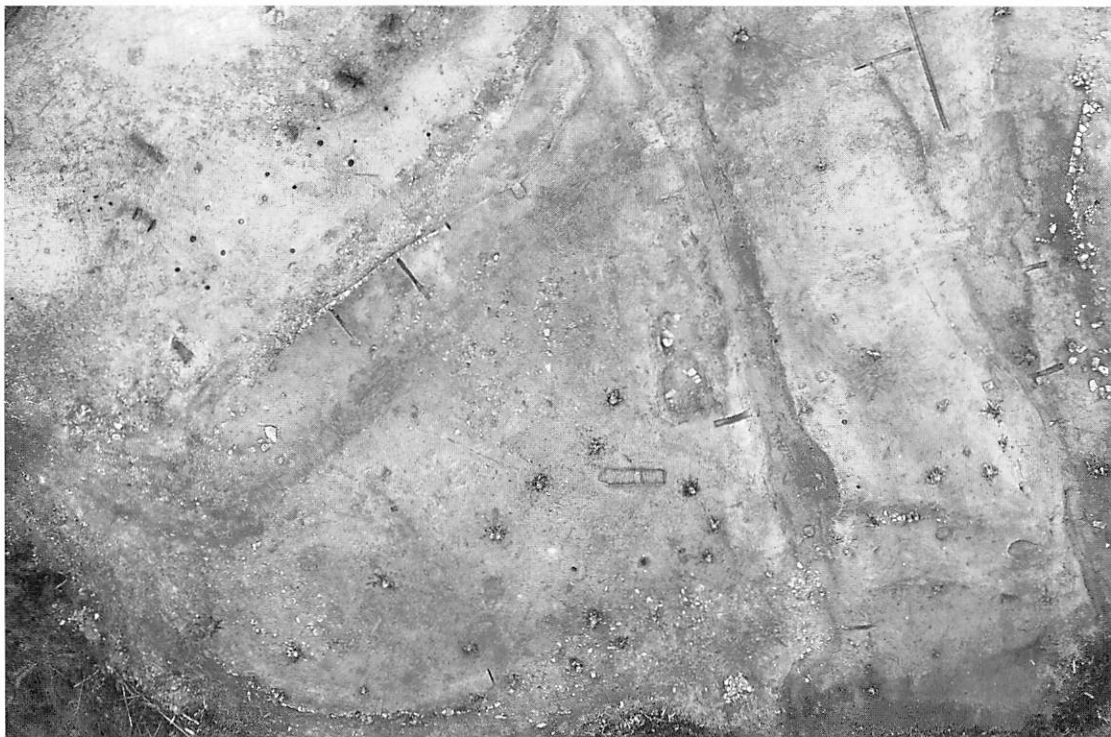
1　堀切１　堀切・竪堀
結合部（西から）

2　ＳＫ４
（西から）

3　ＳＫ４遺物出土状況
（西から）

1　ＳＫ５
（西から）

2　基壇
（西から）



3　平坦面３・６
（上空西から）

1　平坦面３西石積
（西から）

2　平坦面３西石積
（南から）

3　平坦面３東石積
（北東から）

1　ＳＫ６遺物出土状況
（西から）

2　堀切２
（東から）

3　土塁１・２，堀切２
（西から）

1　土塁２，堀切２
（西から）

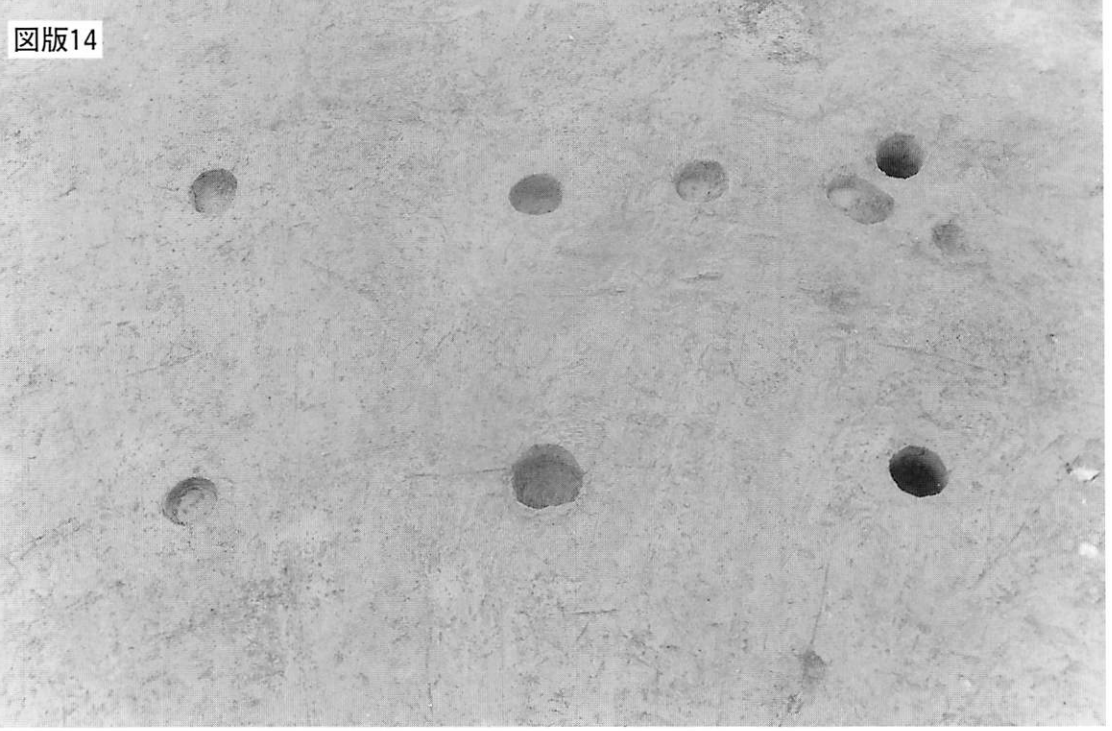
2　堀切２屈曲部
（南から）

3　平坦面４　神社跡
（南から）

1　平坦面６
（北東から）

2　平坦面６
遺物出土状況
（南東から）

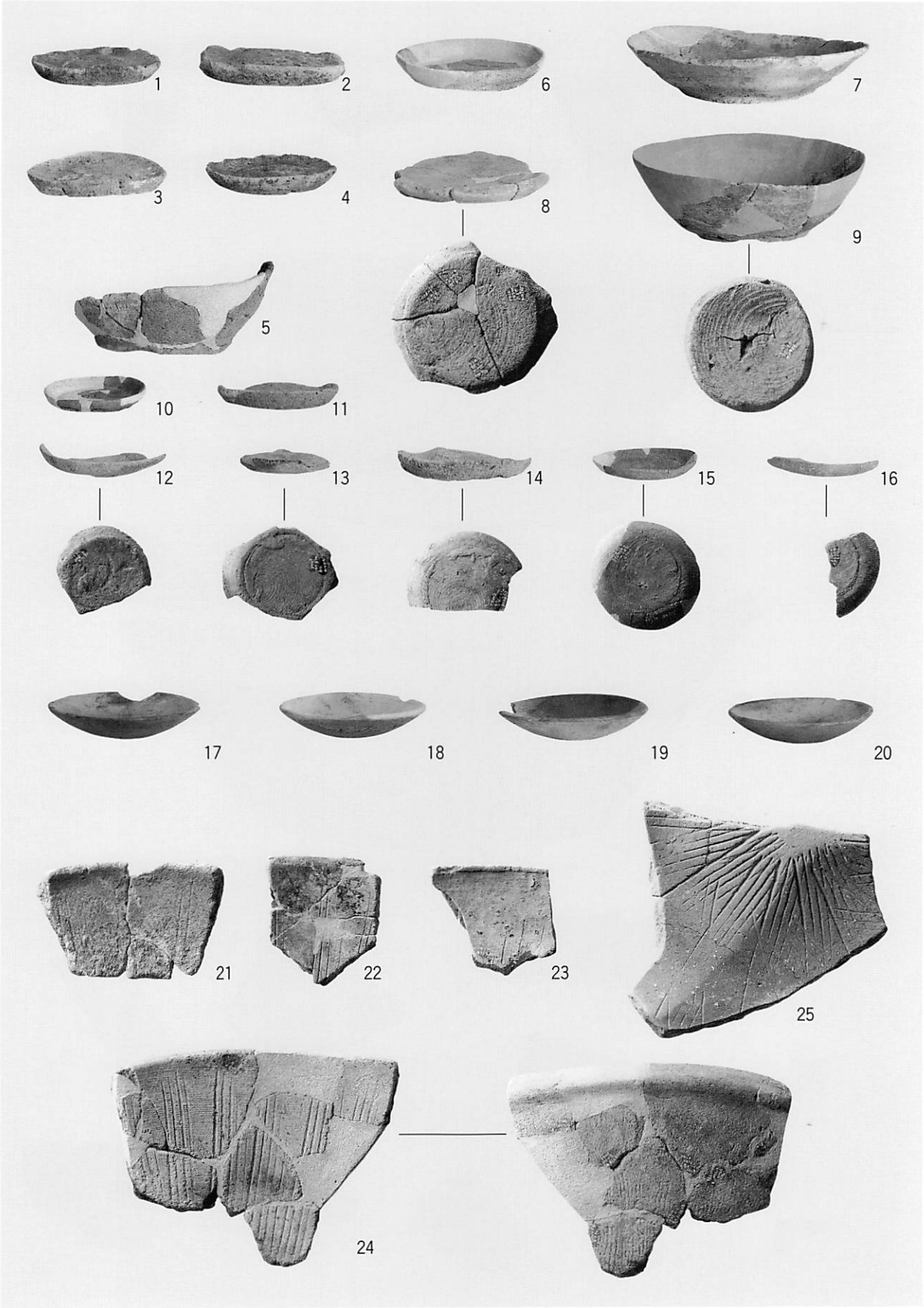
3　平坦面６
遺物出土状況
（東から）



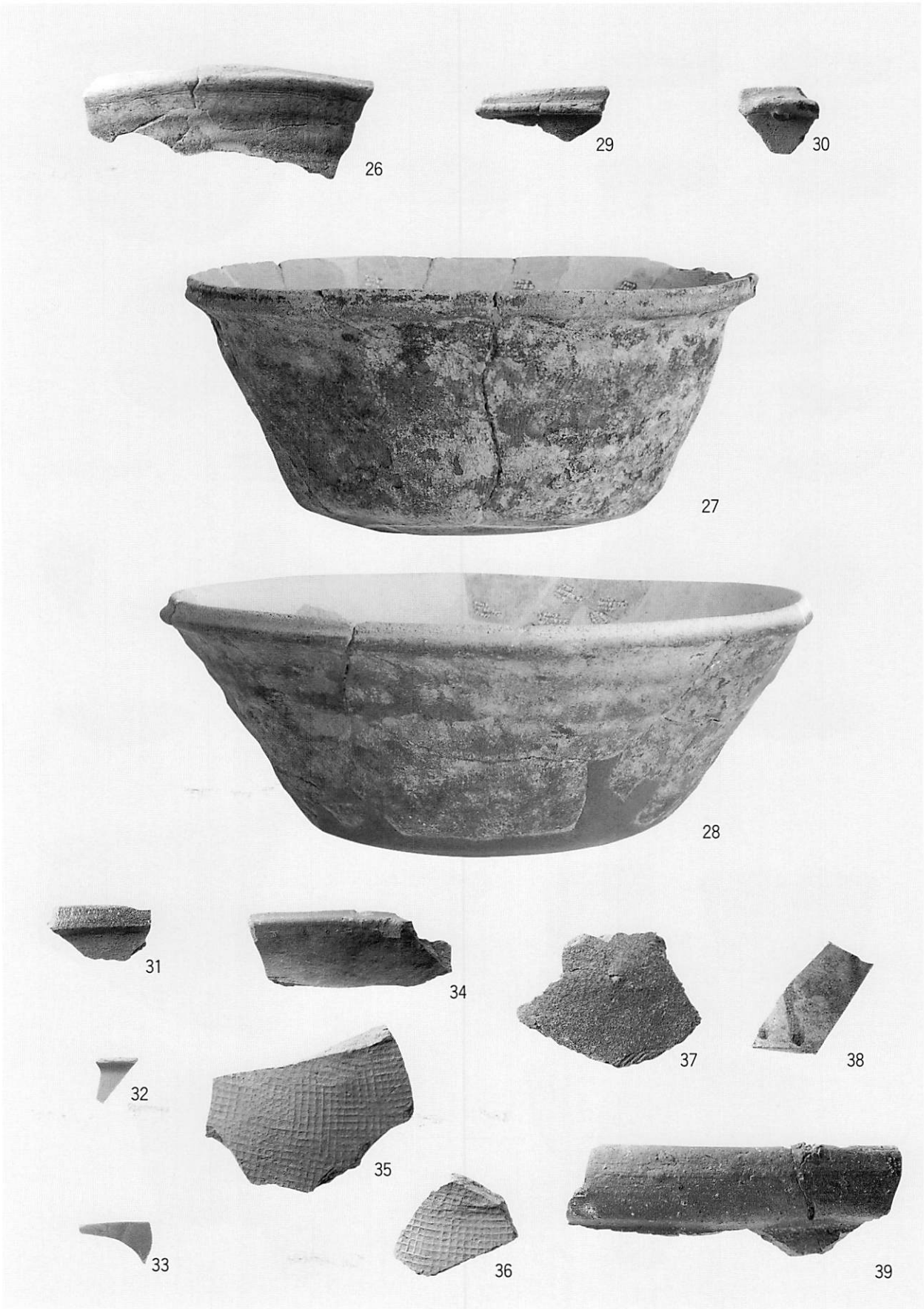
1　SB1
（北から）

2　SX1
（南から）

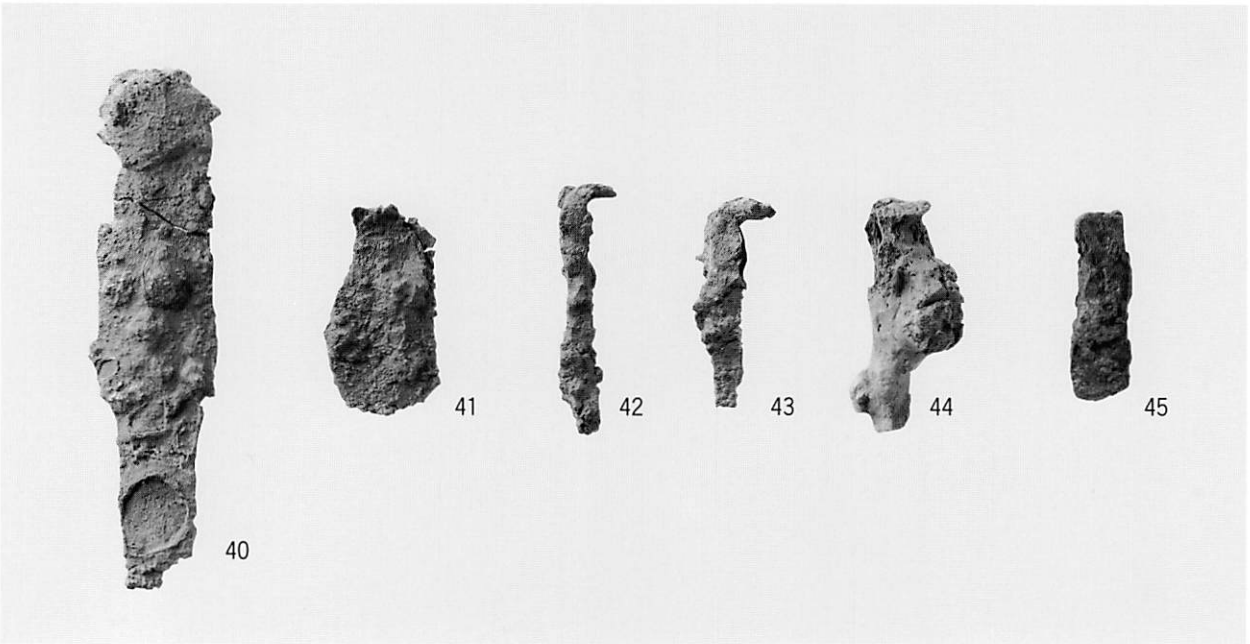
3　埋甕遺構
（南から）

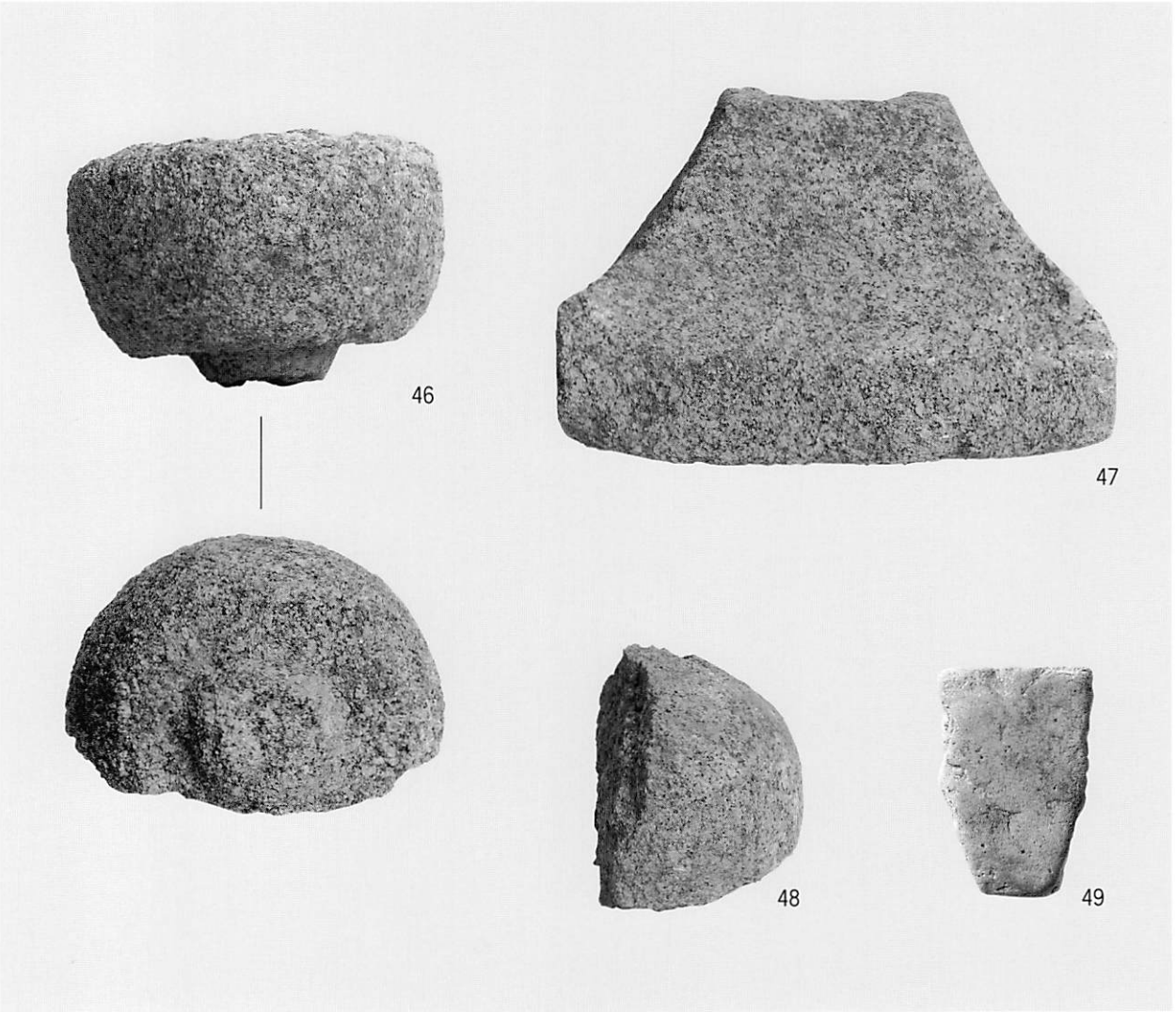


出土土器 1

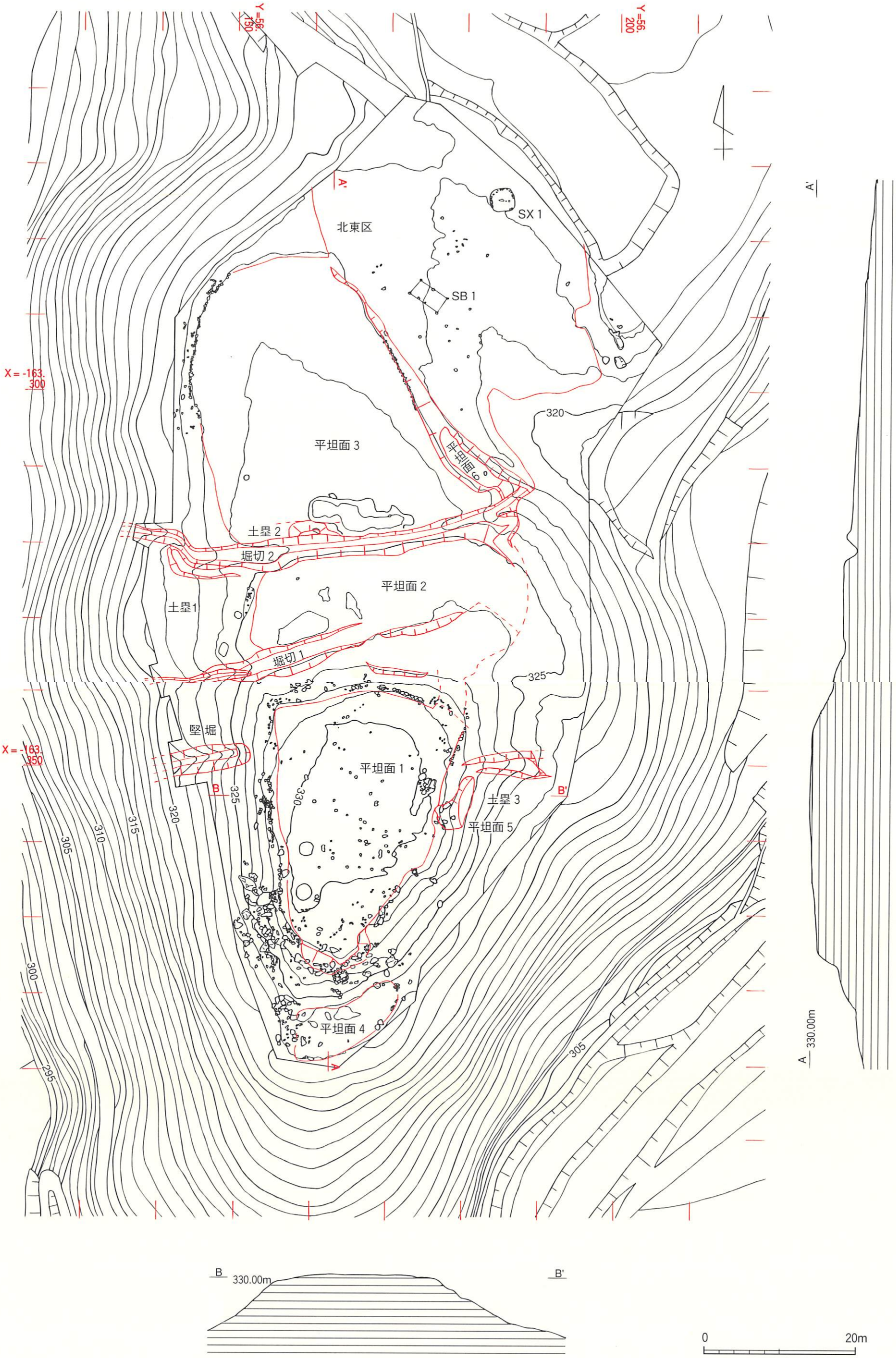


出土土器 2





出土鉄製品・石製品



第36図　福原城跡全体図（1：500）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふくはらじょうあと
書名	福原城跡
副書名	沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第２０７集
編著者名	糸賀省三・鈴木康之・葉杖哲也・三原稔宏
編集機関	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目８番49号 TEL082-295-5751
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
福原城跡	広島県 賀茂郡 福富町 久芳	34405	63	34度 31分 33秒	132度 46分 38秒	2001723 ～ 20011221	5,300m²	沼田川河川総合開発事業(福富ダム)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福原城跡	城跡	中世	平坦面・堀切・竪堀・石積・土塁・出入口	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・鉄製品・石製品	長大な堀切・竪堀・出入口・烽火の使用の可能性

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第207集

沼田川河川総合開発事業(福富ダム)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(１)

福 原 城 跡

発 行 日　平成15（2003）年３月31日

編集・発行　財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

〒733-0036 広島市西区観音新町４丁目８番49号

TEL(082)295-5751　FAX(082)291-3951

印 刷 所　西日本印刷株式会社